

多賀城市文化財調査報告書第99集

# 多賀城市内の遺跡2

—平成21年度発掘調査報告書—

平成22年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第99集

# 多賀城市内の遺跡2

—平成21年度発掘調査報告書—

平成22年3月

多賀城市教育委員会

## 序 文

多賀城市は、古来より多くの人々が生活を営み、文化を育んだ地であり、その証として数多くの有形・無形の文化財が残されています。特に、奈良時代に陸奥国府が置かれて以来、行政・文化・経済・交通の要衝の地として栄えたところであり、関連する多くの文化財が所在しています。さらに、本市においては一般に「遺跡」と呼ばれる埋蔵文化財が市の総面積の約1/4を占めており、毎年発掘調査において貴重な成果を得ています。そして、昭和54年度に本市単独の発掘調査を開始して以来、平成20年度までの30年間に実施した調査件数は365件、調査面積は約260,500m<sup>2</sup>にのぼります。当教育委員会では、その成果を単に記録の保存だけにとどめず、広くわかりやすく公開し、様々な面で活用がはかれるよう努めてきたところあります。また、開発事業に関連する発掘調査においては、これまでどおり常に事業との円滑な調整をはかり、遺跡保存のために事業者から御理解、御協力が得られるよう文化財行政を進めていく所存です。

さて、本書は平成21年度の国庫補助事業として実施した発掘調査25件の成果を収録したものです。これらの調査では、古墳時代の溝跡、古代のまち並みに関連する掘立柱建物跡、大溝跡、道路跡、中世の屋敷跡に関連する掘立柱建物跡、大溝跡などが発見されました。いずれの調査も比較的小規模なものでしたが、これらひとつひとつの成果の積み重ねが、本市の具体的な歴史像の解明につながり、ひいては新しいまちづくりに活用できるものと期待しています。

最後に、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成22年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊地 昭吾

## 例　　言

- 1 本書は、平成21年度の国庫補助事業として実施した発掘調査25件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 本書の執筆は、担当職員の協議のもとに I・VI・VII・X・XIV・XVII を島田敬、II～V・IX・XI・XV・XVII・XX・XVIII・XIX を武田健市、VII・XII・XIII・XIV を千葉孝弥、XII・XIII・XIV を相澤清利が担当し、編集は島田が行った。また、図版作成等は各担当者、遺物の写真撮影は鈴木琢郎・四家礼乃が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I 遺跡の地理的・歴史的環境	1	XV 山王遺跡第74次調査	121
II 新田遺跡第48次調査	3	XV 山王遺跡第75次調査	130
III 新田遺跡第49次調査	19	XI 高崎遺跡第76次調査	131
IV 新田遺跡第50次調査	30	XII 高崎遺跡第78次調査	132
V 新田遺跡第52次調査	37	XIII 高崎遺跡第79次調査	134
VI 新田遺跡第51次調査	67	XIV 高崎遺跡第80次調査	135
VII 新田遺跡第53・54次調査	69	XV 高崎遺跡第81次調査	136
VIII 新田遺跡第58次調査	85	XVI 高崎古墳群第6次調査	137
IX 新田遺跡第59次調査	87	XVII 西沢遺跡第16次調査	154
X 山王遺跡第69次調査	88	XVIII 高原遺跡第8次調査	160
XI 山王遺跡第70次調査	95	XIX 大日南遺跡第7次調査	161
XII 山王遺跡第72次調査	96	XVII 大日南遺跡第8次調査	162
XIII 山王遺跡第73次調査	106		

## 調査要項

1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾  
 2 調査担当 事務局文化財課 課長 高倉敏明  
 3 調査担当者 事務局文化財課調査普及係  
 係長 千葉孝弥 副主幹 武田健市  
 主査 石川俊英 烏田 敬 相澤清利 村松 稔  
 調査員 鈴木琢郎 四家礼乃 山田しょう  
 畠山未津留

### 調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第48次調査	山王字南寿福寺21-6	4月8日～5月26日	73m <sup>2</sup>	武田・四家
2	新田遺跡第49次調査	山王字南寿福寺21-17	4月28日～5月9日	58m <sup>2</sup>	武田・四家
3	新田遺跡第50次調査	山王字南寿福寺22-1	6月10日～7月14日	49m <sup>2</sup>	武田・四家
4	新田遺跡第51次調査	新田字北閑合23・26-2	6月10日	27m <sup>2</sup>	島田・山田
5	新田遺跡第52次調査	山王字北寿福寺25-9 外	8月26日～10月1日	55m <sup>2</sup>	武田・四家
6	新田遺跡第53次調査	山王字北寿福寺48-21	9月25日～10月20日	52m <sup>2</sup>	島田
7	新田遺跡第54次調査	山王字北寿福寺48-18	9月25日～11月17日	45m <sup>2</sup>	島田
8	新田遺跡第58次調査	新田字北閑合4-23、5-7	12月10日	7m <sup>2</sup>	千葉
9	新田遺跡第59次調査	新田字堀西27-2	12月22日	7m <sup>2</sup>	武田・畠山
10	山王遺跡第69次調査	山王字東町浦75-5の一部	4月9日～5月9日	35m <sup>2</sup>	島田・山田
11	山王遺跡第70次調査	山王字掃下し2-12	4月28日	49m <sup>2</sup>	村松
12	山王遺跡第72次調査	市川字多賀前106 外	5月13日～5月27日	289m <sup>2</sup>	千葉・石川・山田
13	山王遺跡第73次調査	山王字山王四区185-1 外	5月29日～6月12日	456m <sup>2</sup>	千葉・山田
14	山王遺跡第74次調査	南宮字伊勢210-1 外	6月24日～7月7日	147m <sup>2</sup>	島田・山田
15	山王遺跡第75次調査	山王字三千刈6-3	7月16日	6m <sup>2</sup>	武田・四家
16	高崎遺跡第76次調査	高崎三丁目283-10	7月15日	20m <sup>2</sup>	相澤・鈴木
17	高崎遺跡第78次調査	留ヶ谷一丁目136-41	7月22日	4m <sup>2</sup>	島田・山田
18	高崎遺跡第79次調査	留ヶ谷一丁目117-2 外	9月25日～9月26日	45m <sup>2</sup>	村松
19	高崎遺跡第80次調査	留ヶ谷一丁目32-5	10月29日	13m <sup>2</sup>	相澤・鈴木
20	高崎遺跡第81次調査	高崎二丁目231-12	1月8日	38m <sup>2</sup>	武田
21	高崎古墳群第6次調査	高崎二丁目502 外	11月5日～12月22日	421m <sup>2</sup>	千葉・四家
22	西沢遺跡第16次調査	市川字奏社35-1	9月8日～9月17日	50m <sup>2</sup>	相澤・鈴木
23	高原遺跡第8次調査	浮島字高原33-1 外	10月27日～10月28日	40m <sup>2</sup>	千葉
24	大日南遺跡第7次調査	高橋四丁目20-11 外	12月18日～12月22日	58m <sup>2</sup>	武田
25	大日南遺跡第8次調査	高橋四丁目20-10 外	12月19日～12月22日	36m <sup>2</sup>	武田

4 調査協力者	佐々木勝彦 会順良光 赤石英章 佐藤健介 佐藤之宣 一色田修 米倉卓也 角田 淳 熊谷敏明 千葉昌昭 佐藤忠良 川村拓矢 菅野広史 佐藤祐次 中川喜雄 藤原益栄 佐藤広光 鈴木進二郎 佐藤壯之助 小野寺康典 菊地浩一 (株)財商 (有)馬場工務店 (株)ローソン (株)創新ハウスコンサルタント
5 調査従事者	赤間かつ子 赤間 力 阿部 寿 阿部信夫 五十嵐智恵 市川菖曉 伊藤竜子 遠藤好巳 大竹一恵 大竹利吉 大場孝也 小野玉乃 片倉 忠 狩野俊明 官野清仁 菅野哲夫 工藤博文 今野和子 西條金三 境慎一郎 佐々木敏雄 佐藤霞織 佐藤 正 佐藤信子 佐藤由布子 塩井一征 庄司一子 鈴木政義 高野信義 武島 好 戸枝瑞恵 中村繁夫 中村敏雄 橋沼茂二 早坂隆雄 藤田恵子 星 彰 松田正樹 三浦惣一 村岡哲郎 若生美津枝
6 整理従事者	丑田明希 佐々木清子 高橋由里子 中村千恵子 本間規恵 宮城ひとみ 横山佳織

## 凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。  
S B : 据立柱建物跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」(多賀城市教育委員会 2003)に従った。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政庁跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)と、「扶桑略記」延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」「日本第四紀地図」1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10 C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

## I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南北に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせている。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉・塩釜線沿いには標高5～6mの微高地が延びており、その北側には利府町にまたがる低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。

本書で取り上げるのは、以下の7遺跡である。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代前期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、高崎中学校建設に伴う調査で約80軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸戻地区では大量的灯明皿が括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

高崎古墳群は、北西側に張り出す低丘陵の先端付近に立地し、その範囲は東西約120m、南北約140mである。現在確認できる古墳は1基のみである。これまで、古墳の周辺で5回の発掘調査が実施されているが、発見された遺構は堅穴住居跡や掘立柱建物跡などいずれも古代のものである。

西沢遺跡は、低丘陵の緩斜面に立地し、その範囲は東西約450m、南北約700mである。これまでの調査では、縄文時代と古代～近世にかけての遺構・遺物が多数発見されている。とりわけ平安時代に入ると、鍛冶工房を含む堅穴住居跡や掘立柱建物跡が整備されるようになる。

高原遺跡は、低丘陵の緩斜面に立地し、その範囲は東西約200m、南北約140mである。これまでの調査では、古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土壙などが発見されている。

大日南遺跡は、標高3mほどの沖積地に立地し、その範囲は東西約400m、南北約300mである。第3次調査では、一辺45～70mの大溝で開まれた15・16世紀を中心とする武士の屋敷跡が発見されている。

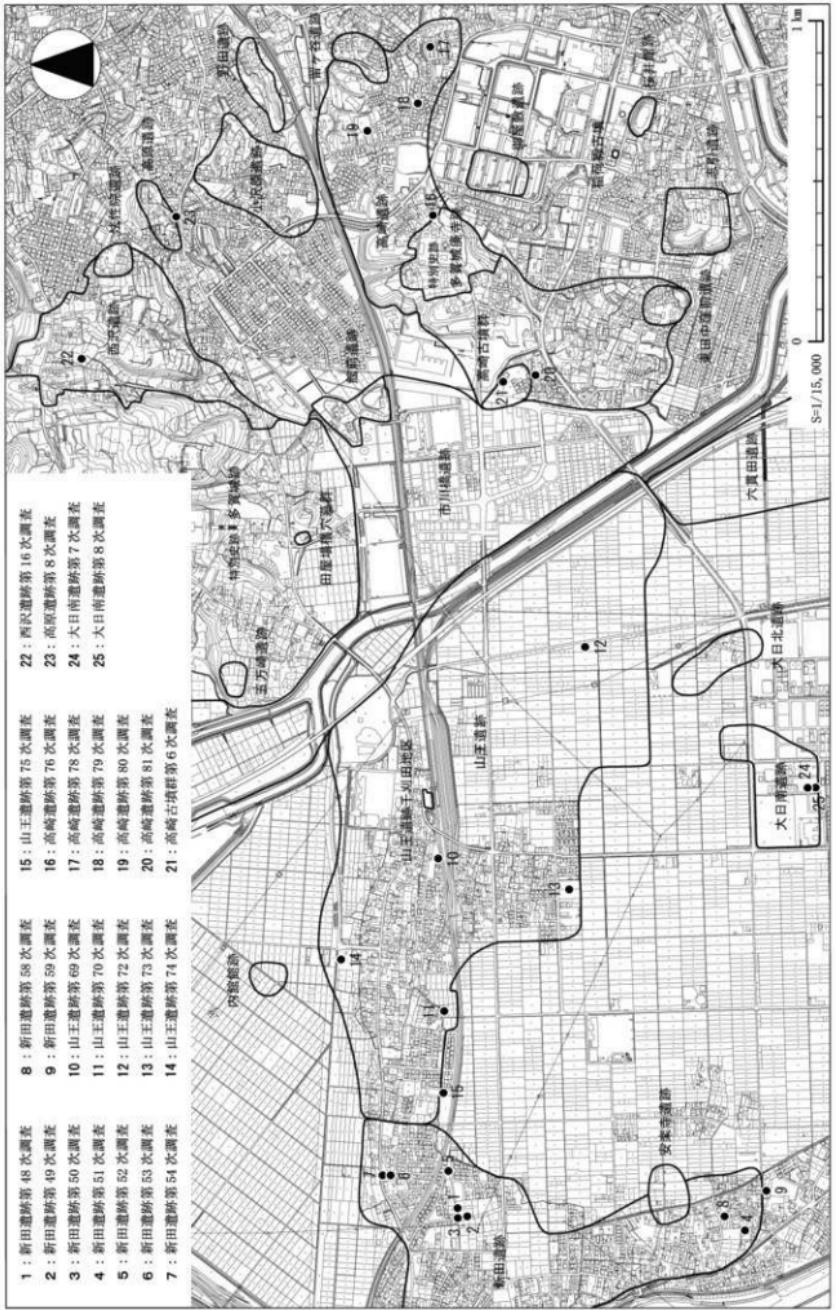


図1 調査位置図

## II 新田遺跡第48次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成20年12月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約20cm、長さ4.5mのコンクリート杭34本を打ち込むこと、深さ75cmの掘削を伴う給排水管付設工事等が示されていた。近接地の調査成果では、現表土下約40cmで中世の遺構が検出されていることから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、本発掘調査を実施することとなった。平成21年3月17日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、4月8日より現地調査を開始した。

はじめに、重機により表土除去を行ったところ、調査区中央付近に炭化物が多量に混入する黒褐色砂質土(II 1層)が分布しており、西半部ではこの下層にある黄褐色砂質土(II 2層)が現れていた。II 1層上面でS B 1891・1892掘立柱建物跡やS D 1887東西溝跡、S X 1885土橋跡、II 2層上面でS B 1893掘立柱建物跡や多くの柱穴等を検出した。このうち、II 2層上面で検出した柱穴についてみると多くがII 1層と近似する埋土であったことから、これらもII 1層上面より掘り込まれているものと考えられた。9日より作業員を投入して調査区内に排水用の側溝を設けるとともに、新田関係で最も新しいS D 1887・1886の埋土掘り下げを開始した。このうち、S D 1887は位置関係や規模より、西側に隣接する第45次調査区(平成20年度)で発見したS D 1859溝跡と一連のものであり、1時期のみの溝跡と捉えていた。しかし、S X 1885との重複関係より複数の変遷があることが明らかとなつたため、直ちに実測図作成用の基準点を設置し、時期別に平面図の作成及び写真の撮影を行いながら埋土を掘り下げた。また、この作業と並行し、柱穴の精査、平面・断面図作成等を隨時行い、5月2日にII 1層上面の調査を終了した。同日午後よりII 1層の掘り下げを開始し、II 2層上面でS K 1890・1895土壤を検出した。直ちにこれらの埋土を掘り下げ、平面・断面図を作成し、同日中にII 2層上面の調査を終了した。9日よりII 2層を掘り下げ、S X 1900東西道路跡を検出した。S X 1900は、第37次調査区(平成19年度)で新たに確認された道路跡の東延長線上にあり、奈良時代の東山道と推測しているものである。西半部では縦まりの強い灰黄褐色砂質土の路面整地りが認められ、残存状況の悪い東半部ではこの下層にある古い



第1図 調査区位置図



作業風景写真

段階の路面整地 a が現れていた。12日より S D 1901 北側溝跡の埋土掘り下げを開始し、埋まり土の違いから2時期以上の変遷があることを理解した(注1)。19日、東西道路の調査が終了したことから、路面下層にあるⅢ・Ⅳ層を掘り下げ、古墳時代の遺構検出面であるV層上面で S D 1898 溝跡と S K 1897 土壌を確認した。直ちにこれらの埋土を掘り下げて平面・断面図を作成し、20日に全景写真を撮影した。21日から、北壁を除く調査区の土層断面図を作成するとともに、調査時に北東隅部分の通路として残していた S X 1885 埋土を掘り下げなど補足的な調査を行う。26日、重機による調査区内の埋め戻しを行い、現地調査の一切を終了した。

## 2 調査成果

### (1) 層序(第3図)

I 層：宅地造成に伴う盛土(I 1層)とそれ以前の耕作土(I 2層)であり、厚さは I 1層が約20cm、I 2層が約30cmである。

II 層：調査区中央付近に認められる黒褐色砂質土であり、炭化物や明黄褐色砂質土小ブロックが多く混入している。厚さは10cm未満であり、この上面が中世の遺構検出面である。

II 層：全域に認められるにぶい黄褐色砂質土であり、黒褐色及びにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多く混入している。厚さは10～30cmであり、この上面が中世の遺構検出面である。

III 層：調査区全域で確認したにぶい黄橙色砂質土であり、灰黄褐色砂質土粒が多く混入している。厚さは5～10cmであり、この上面に S X 1900 東西道路跡の路面が造られている。

IV 層：調査区全域で確認した暗褐色砂質土であり、にぶい黄橙色砂質土粒が多く混入している。厚さは10～15cmである。

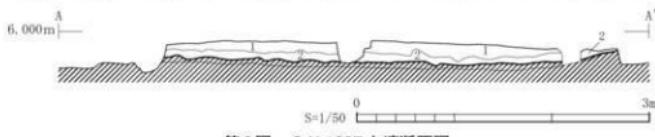
V 層：全域で確認したにぶい黄橙色砂質土であり、黒褐色粘土小ブロックが僅かに混入している。厚さは西壁付近で約50cm確認できる。この上面が古墳時代の遺構検出面であり、当該区における最終遺構検出面と考えられる。なお、西壁際で一部深掘りを実施しV層以下の堆積状況も確認しているが、締まりの弱い砂質土及び砂層と粘質土が互層状に堆積しており、安定した地盤は認められなかった。

### (2) 発見した遺構と遺物

#### [V層上面]

##### S K 1897 土壌(第2・5図)

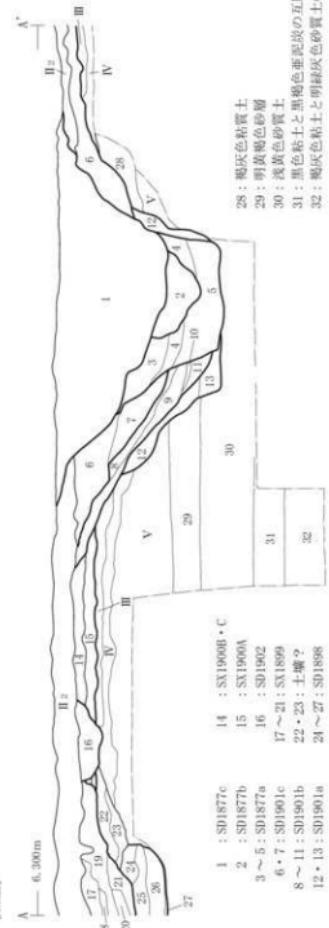
調査区中央部で発見した土壌である。規模は、東西5.7m以上、南北28m以上、深さ約20cmである。底



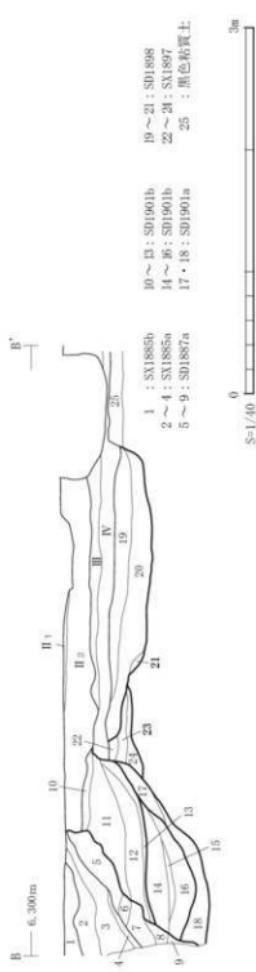
第2図 SK 1897 土壌断面図

注1：調査時には上層に厚く堆積している砂質土のみで1時期と捉えることが不確かであったが、その後に実施した第50次調査の結果と周辺地区的調査成果より、この砂の層が最終段階の埋土であると理解することができた。このことから、S D 1901には3時期の変遷があることが明らかとなった。

〔西壁〕



〔東壁〕



第3図 調査区西・東壁断面図

面はやや凹凸があり、西側に向かい僅かに低くなっている。壁は西側で見ると、非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は2層(第2図1・2)に分けることができる。上層は黒褐色粘質土小ブロックが混入するにぶい黄褐色砂質土、下層はにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入する黒褐色粘質土である。

遺物は、土師器甕が出土している。

#### S D 1898溝跡(第3・4・5図)

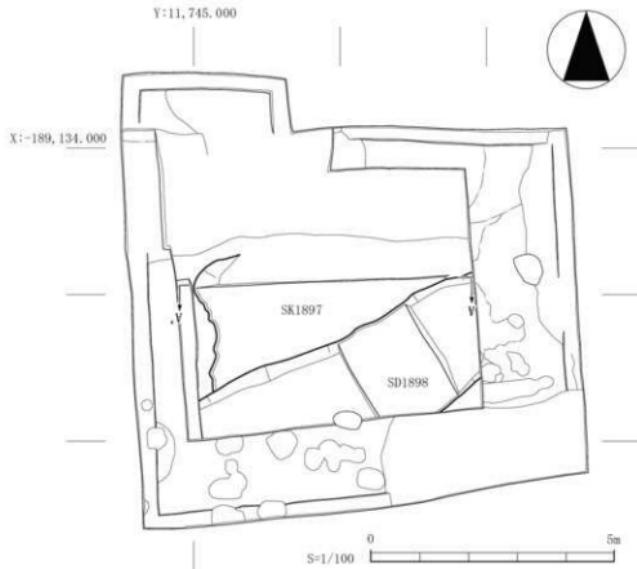
調査区南半部で発見した東西方向の溝跡であり、方向は東で約25度北に偏している。規模は長さ65m以上、上幅約2.2m、下幅約1.9m、深さ約35cmである。壁は北壁東端部で下位付近に段が認められるものの、およそ垂直に立ち上がっている。底面にはほとんど凹凸ではなく、東側から南側に向かって約10cm低くなっている。埋土は西側で4層(第3図:西壁24~27)、東側で3層(第3図:東壁19~21)に分けることができる。西壁でみると、24~26層は褐灰色または灰黄褐色の砂層であり、24・25層にはにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入している。27層は黒色粘土であり、東壁には認められない。

遺物は、土師器高杯・甕が出土している。



番号	種類	出土層位	特徴		L1体 残存率	L2体 残存率	器高	写真 回数	登録 番号	備 考
			外 面	内 面						
1	土師器 高杯	I-I	脚部: ハミガキ	底部: ハケメ	-	-	-	-	E19	

第4図 S D 1898溝跡出土遺物



第5図 N層上面検出構造

### 〔Ⅲ層上面〕

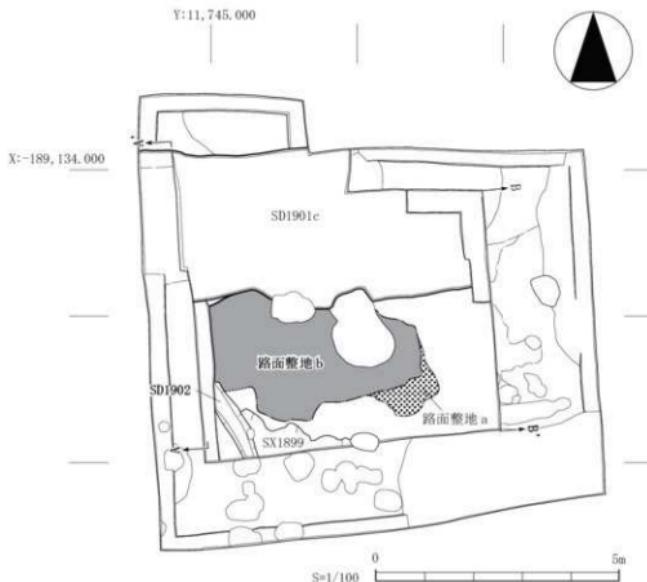
#### S X 1900東西道路跡（第6・7・8図）

調査区のほぼ全域で発見した東西道路跡であり、路面及び素掘りの北側溝 S D 1901を検出した。位置関係より、第37次調査 S X 1777及び第45次調査 S X 1855東西道路跡と一連のものである。今回は長さ約7mにわたって検出したが、さらに調査区東側に延びている。路面は調査区中央部から西側にかけて僅かに整地が認められるのみであり、北側溝もおよそ同位置にある中世の区画溝によって大部分が破壊されているため残存状況は悪い。路面整地及び側溝の状況から、3時期（A→C期）の変遷を確認した。

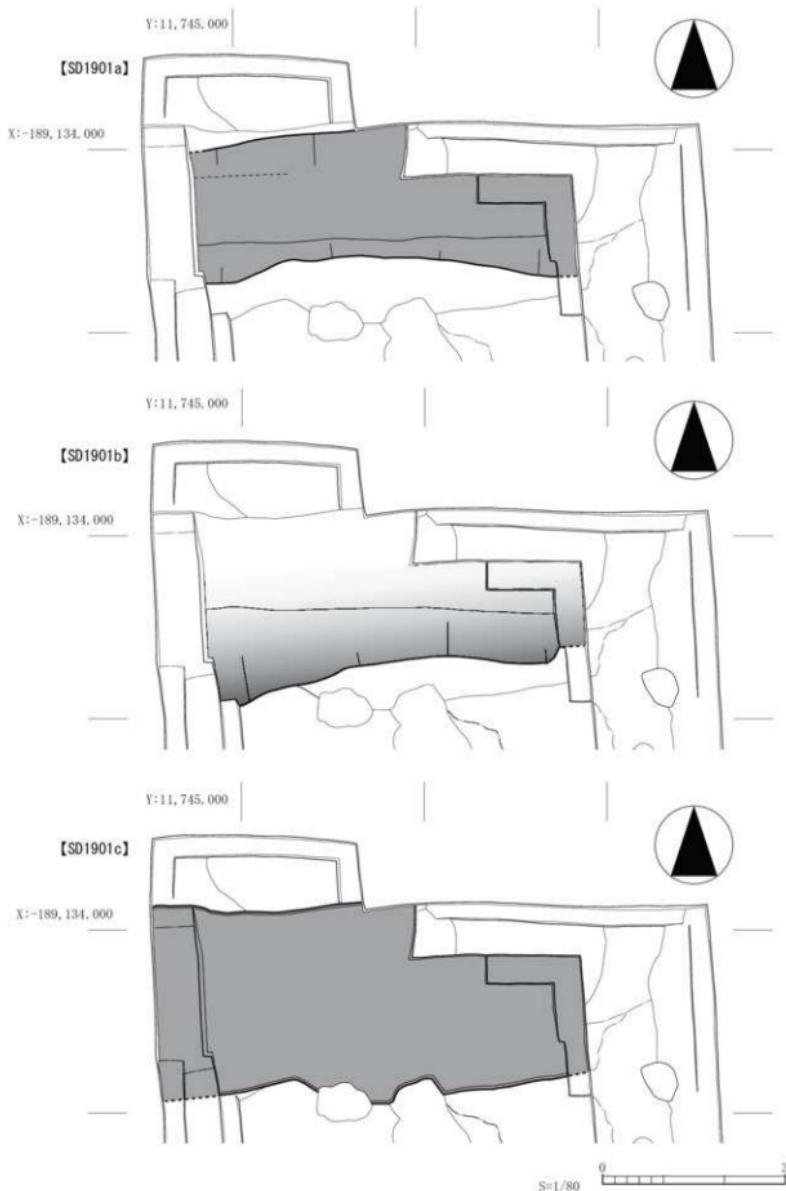
**A期**：路面整地 a と S D 1901 a を発見した。路面整地 a はⅢ層上面に約10cm認められる。黒褐色砂質土粒が混入する灰黄褐色砂質土であり、非常に縮まりが強い。S D 1901 a はB期側溝により大部分が破壊されており、残存状況は悪い。方向は東で約2度北に偏しており、規模は上幅2.0～2.3m、路面整地 a からの深さは約1.1mである。壁は中位付近に段が認められ、この上下ともおよそ垂直に立ち上がっている。底面は平らに成形されており、東西の比高はほとんどない。埋土は2層に分けることができる（第8図：西壁7・8、東壁8・9）。いずれも褐灰色粘土が主体であるが、上層には砂粒やにぶい黄橙色砂質土粒、下層には黄褐色砂が混入している。

遺物は、古墳時代の土器片が出土している。

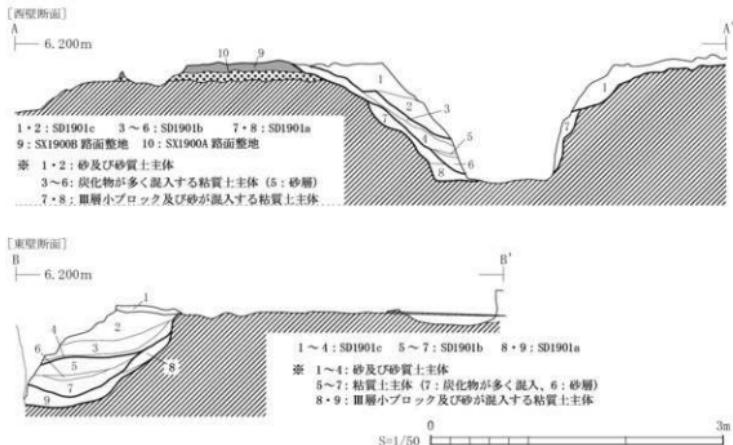
**B期**：路面整地 b と S D 1901 b を発見した。路面整地 b は、路面整地 a 上面に約10cm認められる。にぶい黄橙色砂質土小ブロックや黒褐色砂質土粒が多く混入する灰黄褐色砂質土であり、非常に縮まりが強い。



第6図 S X 1900東西道路跡ほか平面図



第7図 SD 1901北側溝跡変遷図



第8図 SX 1900 東西道路跡断面図

S D 1901 b は A 期北側溝とおよそ同位置で造り替えている。C 期側溝により大部分が破壊されており、残存状況は悪い。規模は上幅 1.7 m 以上、路面整地 b からの深さは約 1.1 m である。壁は残存する路面側でみると、非常に緩やかに立ち上がっている。底面は丸く掘り窪められており、東側から西側に向かって約 10 cm 低くなっている。埋土は西側で 4 層（第8図：西壁 3～6）、東側で 3 層（第8図：東壁 5～7）に分けることができる。西壁で見ると、3 層はにぶい黄橙色砂質土粒が多量に混入する褐灰色粘質土、4 層はにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入する黒褐色粘質土、5 層が黄褐色砂、6 層が褐灰色粘質土である。このうち、4・6 層に炭化物が多量に混入しており、6 層底面付近では特に顯著である。遺物は出土していない。

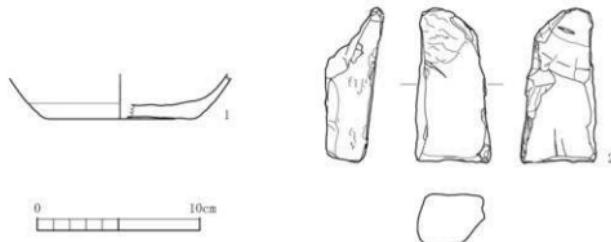
**C期**：S D 1901 c を発見した。路面については、路面整地 b を踏襲したものと推測される。S D 1901 c は B 期北側溝とおよそ同位置で造り替えている。中世の区画溝跡により大部分が破壊されており、残存状況は悪い。方向は東で約 2 度北に偏しており、規模は上幅 2.8～3.3 m である。壁は中位付近に段が認められるものの、非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は西側で 2 層（第8図：西壁 1・2）、東側で 4 層（第8図：西壁 1～4）に分けることができる。西壁で見ると、上層はにぶい黄橙色砂質土、下層はにぶい黄橙色や黄褐色及び灰黄褐色砂が互層状に堆積している。

遺物は、土師器甕（A 類）が出土している。

#### S X 1899 不明遺構（第3・6・9図）

調査区南西端部で発見した性格不明の遺構である。南側に向かって落ち込んでおり、確認できる深さは南端で約 40 cm である。埋土は 5 層に分けることができる（第3図：西壁 17～21）。17・18 層は褐灰色砂質土であり、17 層に黒褐色粘質土小ブロックやにぶい黄橙色砂質土小ブロックが混入している。19 層はにぶい黄褐色砂質土が混入するにぶい黄橙色砂質土、20 層が灰黄褐色砂、21 層がにぶい黄橙色砂質土である。

遺物は、須恵器杯（III 類）、砥石が出土している。



番号	種類	層位	特徴		口径 横径 残存率	底径 横径 率	高さ	写真 図版	登録 番号	備考	単位: cm
			外面	内面							
1	環底鉢	杯	I-1	外縁: ロクロナデ 底面: ハラ切り	ロクロナデ	(9.2) 8.24	-	-	R10	直腹	
2	砥石		I-1	長さ: 9.5、幅: 4.7、厚さ: 3.2					R11	砂岩	

第9図 S X 1899性格不明遺構出土遺物

## [Ⅱ2層上面]

### S K 1890 土壌 (第10・13図)

調査区北西部で発見した土壌である。規模は、東西25m以上、南北1.3m以上、深さ約60cmである。底面は起伏が多く、平坦でない。壁はおよそ垂直に立ち上がっている。埋土は5層に分けることができる(第10図1~5)。1~3層は黒褐色砂質土が主体である。1層には黄橙色砂質土粒、3層には黄橙色砂質土小ブロックが多く混入している。4・5層は黄褐色砂質土であり、4層には黒褐色粘質土小ブロックが多く混入している。

遺物は、古代の土器片が出土している。

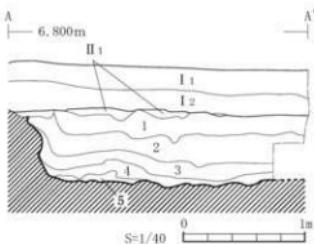
### S K 1895 土壌 (第11・13図)

調査区中央部で発見した、南北に長い不整形の土壌である。規模は、長軸約18m、短軸約1.3m、深さ36cmである。底面はやや丸みを帯びて窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けることができる(第11図1~3)。1・3層が黒褐色砂質土、2層が黒褐色粘質土であり、1層には炭化物粒が混入している。

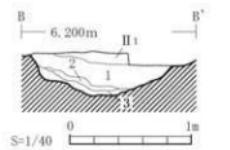
遺物は無釉陶器壺のほか、古代の土器片が出土している。

### S K 1896 土壌 (第12・13・15図)

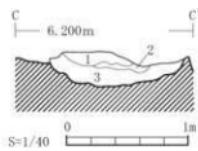
調査区南東部で発見した、南北に長い方形の土壌である。規模は、長辺1.2m以上、短辺約1.3m、深さ約30cmである。底面はやや丸みを帯びて窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層に分けることができる(第12図1~3)。1層が黒褐色砂質土、2・3層は明黄褐色砂質土が小ブロックまたは粒状に混入する黒色砂質土である。1・2層には



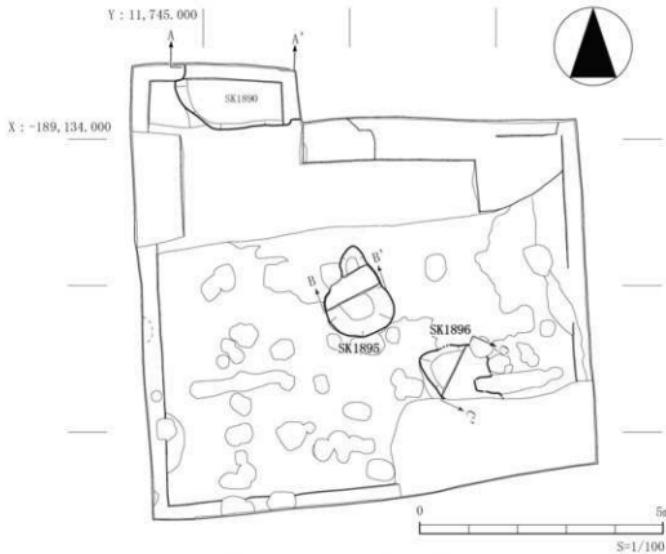
第10図 S K 1890 土壌断面図



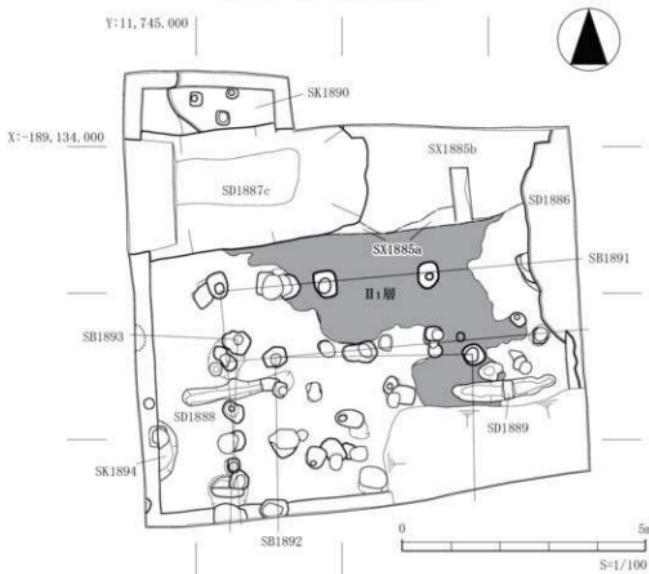
第11図 S K 1895 土壌断面図



第12図 S K 1896 土壌断面図



第13図 II-2層上面検出遺構



第14図 II-1層上面検出遺構

0 10cm

番号	種類	特徴		口径	底径	高さ	写真	登録番号	備考
		外面	内面						
1	かわらけ	ロクロナデ 底部・回転あわせ	ロクロナデ	(8.8) 1.24	(5.3) 5.24	24	—	R16	

第15図 SK 1896 土壌出土遺物

炭化物粒が若干混入している。

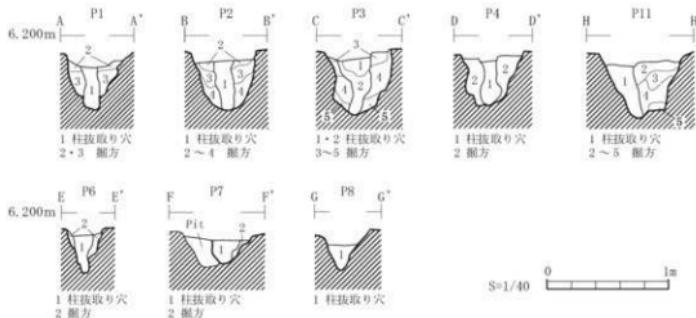
遺物はロクロ調整のかわらけのほか、古代の土器片が出土している

## 〔Ⅱ 1層上面〕

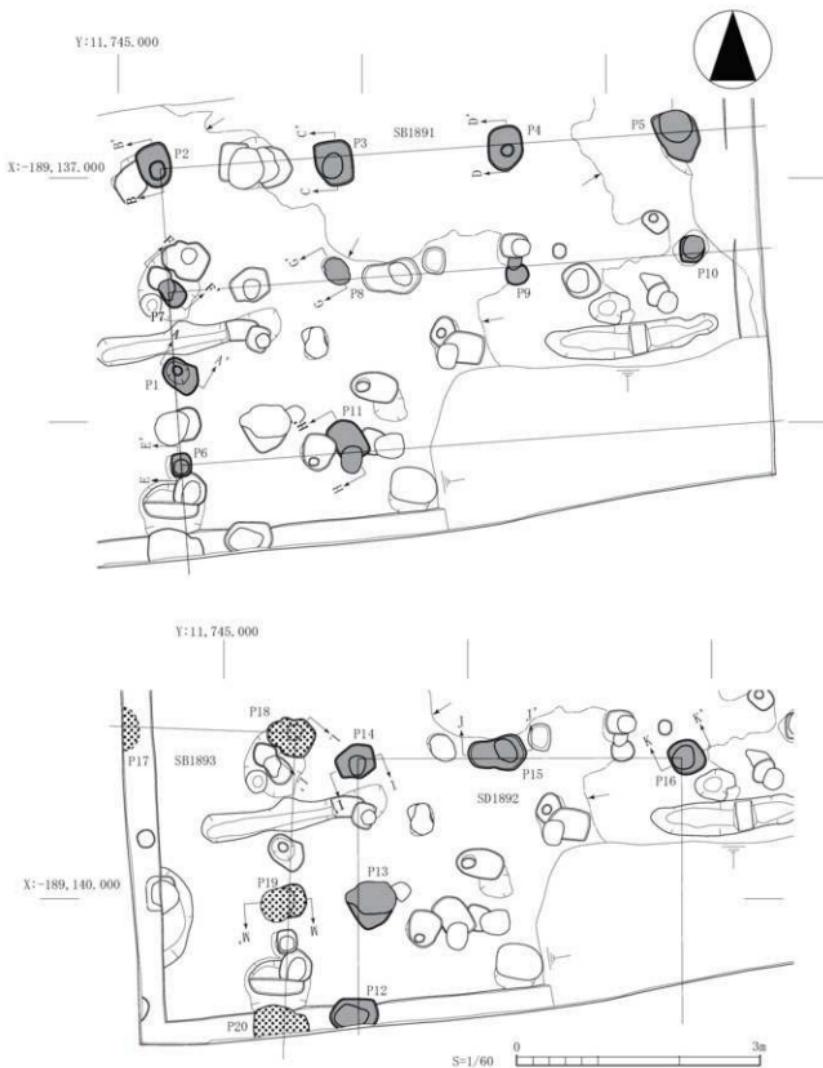
### S B 1891 挖立柱建物跡 (第14・16・17図)

調査区南半部で発見した東西4間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。5基の側柱(P1～5)のほか、建物内部でこれら側柱と柱筋を揃えた小規模な柱穴を6基(P6～11)検出している。別の建物跡を構成する柱穴とも考えられるが、位置関係や規模からここでは床東であると判断した。S B 1892・1893、S D 1886と重複しており、S D 1886よりも古い。側柱では全ての柱穴で柱抜取り穴を確認しており、このうち北西隅柱穴と西側の柱列北より1間目柱穴、北側の柱列西より2間目柱穴で柱のあたり痕跡を確認している。方向は、北側の柱列で測ると東で約5度北に偏している。規模は北側の柱列で総長6.5m以上、柱間は西より約2.3m、約2.1m、約2.1mであり、西側の柱間は2.47mである。掘方の平面形はおよそ方形を基調とし、規模は北側の柱列西より1間目柱穴で測ると、長辺55cm、短辺46cm、深さ55cmである。埋土は、明黄褐色砂質土小プロックが多量に混入する黒褐色砂質土である。柱抜取り穴は掘方の中心付近に柱痕跡状に認められるものと掘方を大きく壊すものがあり、前者はすべて柱のあたり痕跡を残すものである。埋土は、明黄褐色砂質土粒や炭化物粒が多量に混入する黒褐色砂質土である。床東では、すべての柱穴で柱抜取り穴を確認した。掘方の規模はほとんどが長辺30cm前後、短辺25cm前後、深さ30～40cmである。埋土は明黄褐色砂質土小プロックが多量に混入する黒褐色砂質土である。

遺物は、柱抜取り穴から無釉陶器壺や古代の土器片、掘方から古代の土器片が出土している。



第16図 S B 1891 挖立柱建物跡柱穴断面図

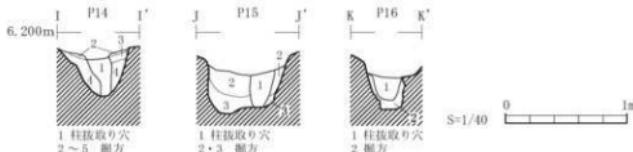


第17図 S B 1891 ~ 1893据立柱建物跡平面図

### S B 1892掘立柱建物跡(第14・17・18図)

調査区南半部で発見した桁行3間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。S B 1891と重複しているが、新旧関係は明らかでない。柱穴は5基検出しており、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。柱抜取り穴のうち、北西隅柱穴で柱のあたり痕跡を確認している。方向は、北東で測ると東で約1度北に偏している。規模は桁行が西側柱列で測ると総長3.1m以上、柱間は北より約1.7m、約1.4mである。北妻の総長は約4mであり、柱間は西より約1.8m、約2.2mである。掘方の平面形は不整形であり、規模は北妻棟通下柱穴で測ると、長軸72cm、短軸35～55cm、深さ46cmである。埋土は黒色または黒褐色砂質土であり、北妻棟通下を除くすべての柱穴に、にぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入している。柱抜取り穴は、掘方の中央付近に認められるものと掘方を大きく壊すものがある。埋土は黒色または黒褐色砂質土であり、にぶい黄橙色砂質土粒が多く混入している。

遺物は、掘方及び柱抜取り穴から古代の土器片が出土している。

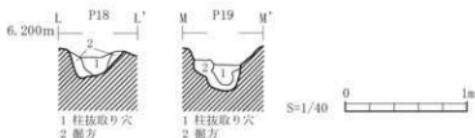


第18図 S B 1892掘立柱建物跡柱穴断面図

### S B 1893掘立柱建物跡(第14・17・19図)

調査区南西部で発見した南北2間以上、東西1間以上の掘立柱建物跡である。S B 1891、S D 1888と重複しているが、新旧関係は明らかでない。柱穴は4基検出しており、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認している。柱抜取り穴のうち、北東隅柱穴で柱のあたり痕跡を確認している。方向は東側の柱列で測ると北で約3度東に偏しており、柱間は東側の柱列北より1間目で約2.0mである。掘方の平面形は不整形であり、規模は北東隅柱穴で測ると、長軸58cm、短軸50cm、深さ25cmである。埋土は明黄褐色砂質土小ブロックが多量に混入する黒褐色砂質土である。柱抜取り穴は、北東隅柱穴では掘方の中央付近に認められるが、それ以外は掘方の大部分を破壊している。埋土はいずれも焼土や炭化物が多量に混入する黒褐色砂質土である。

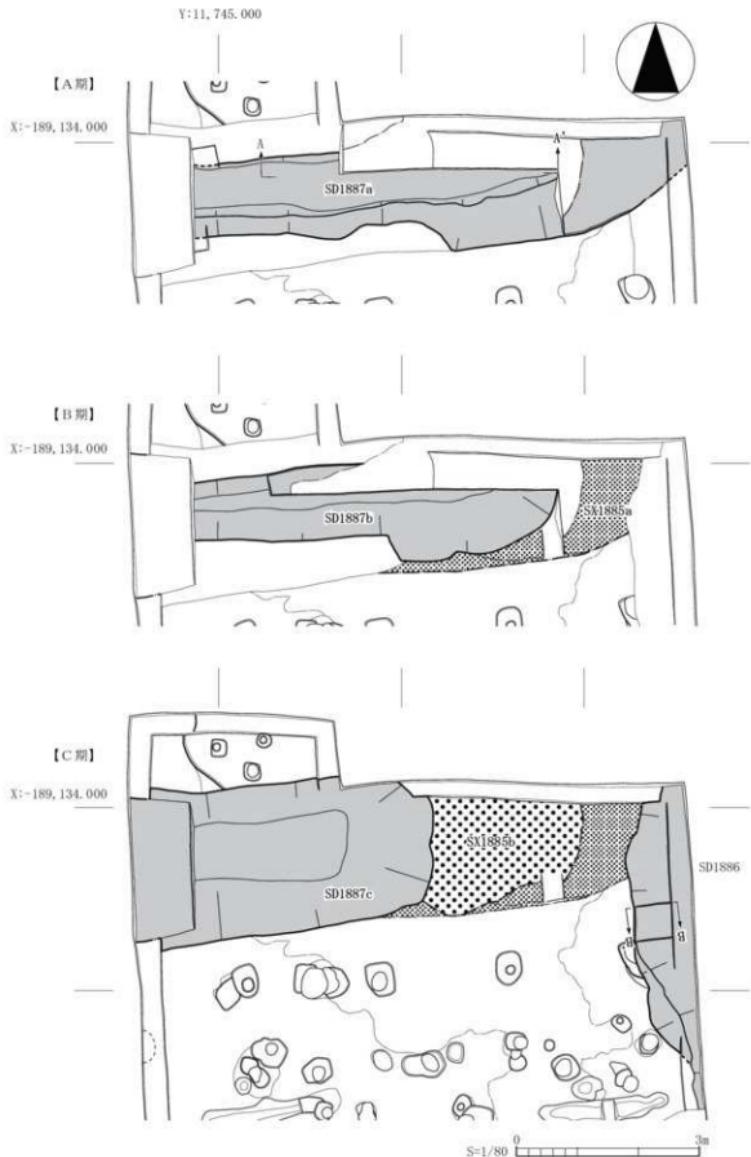
遺物は、抜取穴から古代の土器片が出土している。



第19図 S B 1893掘立柱建物跡柱穴断面図

### S D 1886・1887溝跡、S X 1885土橋跡(第14・20・21・22・23図)

調査区北半部及び東端部で発見した区画溝跡と土橋跡である。東端部で南北方向に延びる溝跡をS D 1886、北半部で東西方向に延びる溝跡をS D 1887とし、この間に設けられた土橋をS X 1885とした。層位



第20図 SD 1887・1886溝跡、SX 1885土橋跡変遷図

や位置関係などから、S D 1887は第45次調査 S D 1859と一連の溝跡であることが明らかである。S D 1887とS X 1885の重複関係から、区画全体で3時期（A→C期）の変遷があることを確認した。

**A期**：S D 1887 aを発見した。B・C期区画溝の掘削により、上面の大部分が破壊されている。規模は長さ9m以上、上幅22m以上、深さはⅡ層上面より1.3mである。壁はおよそ垂直に立ち上がっており、南辺中央部には僅かに段が形成されている。底面は概ね平らに成形されており、東側から西側に向かって約10cm低くなっている。埋土は西側で3層（第3図：西壁3～5）、東側で5層（第3図：東壁5～9）に分けることができる。西壁でみると、3・4層はにぶい黄橙色砂質土ブロックが多量に混入する黒褐色粘土、5層は黒褐色粘土や黄褐色粗砂ブロックが多量に混入するにぶい黄橙色砂質土であり、いずれも人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、無釉陶器甕が出土している。

**B期**：S D 1887 bとS X 1885 aを発見した。

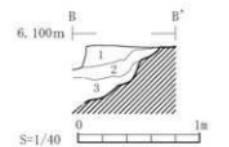
S D 1887 bはa期とおよそ同じ位置で、西に移動して造り替えている。c期の掘削により大部分が破壊されてしまい、残存状況は非常に悪い。規模は長さ7m以上、上幅2.1m以上、深さはⅡ層上面より1.1mである。壁は、東端部でみると緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が著しく、中心部分は極端に狭まっている。埋土は炭化物粒が多量に混入する黒色粘土である（第3図：西壁2）。遺物は出土していない。

S X 1885 aはS D 1887 a東側を埋め戻して設けられており、東西約4mの範囲にわたって確認できる。厚さは東端部で約50cmあり、非常に固く締まっている。埋土は3層に分けることができる（第22図4～6）。4層は明黄褐色砂質土ブロックと黒褐色粘土ブロックが主体であり、5・6層は明黄褐色粒と炭化物粒が多量に混入する黒褐色粘土である。

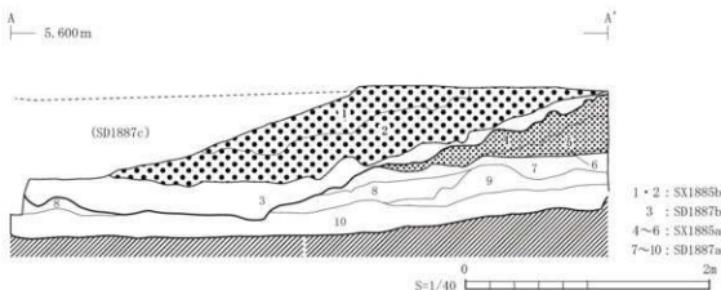
遺物は、古代の土器片が出土している。

**C期**：S D 1886・1887 cとS X 1885 bを発見した。

S D 1886は長さ約5.4mにわたって検出した。溝跡西辺の立ち上がりを確認したにすぎないことから、規模については明らかでない。埋土は3層確認した（第21図1～3）。1・2層が暗褐色砂質土、3層が黒褐色粘土であり、2層には浅黄橙色砂質土粒や黒褐色粘土小ブロックが多く混入している。



第21図 S D 1886溝跡断面図



第22図 S D 1887溝跡、S X 1885土橋跡断面図

番号	種類	出土遺物	特徴		口径 既存半 径半径	底径 既存半 径半径	厚さ	写真 番号	備考
			外面	内面					
1	青磁 (碗?)	SD1886	裏作		—	—	—	—	R14
2	無釉陶器 盤	SD1887c	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	5	R20
3	無釉陶器 盤	SD1887c	ナデ	ナデ	—	(12.4) 5/24	—	5	R21
4	無釉陶器 盤	SD1887c	口縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ模のナデ	ヨコナデ	—	—	—	5	R15
5	無釉陶器 盤	SD1887c	ヨコナデ	ヨコナデ 6条の筋目	—	—	—	5	R20

第23図 S D 1886・1887溝跡出土遺物

遺物は、青磁碗が出土している。

S D 1887 c は b 期とおよそ同じ位置で、2m西側に移動して造り替えている。長さ5m以上、上幅2.5m、深さ約1mである。壁は緩やかに立ち上がっているが、南側では中位付近に一部段が認められる箇所がある。底面は僅かに凹凸があるものの、東西の比高はほとんどない。埋土は浅黄橙色砂質土小ブロックが多く混入する黒色粘土質である（第3図：西壁1）。

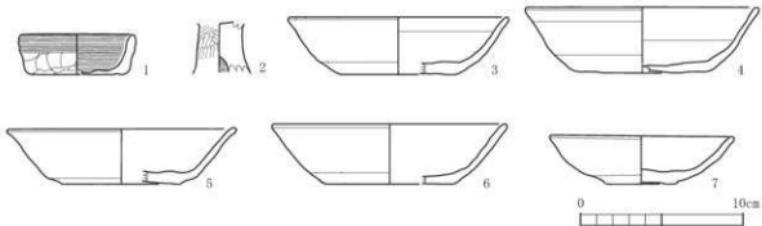
遺物は、無釉陶器擂鉢・甕のほかに古代の土器片が出土している。

S X 1885 b は S D 1887 b 東端部を埋め戻して設けられており、東西約4mの範囲にわたって確認できる。厚さは最大80cmあり、非常に固く締まっている。埋土は2層に分けることができる（第22図1・2）。いずれも多量の炭化物粒と、浅黄橙色砂質土粒及び小ブロックが混入する黒褐色砂質土である。このうち2層底面付近では、浅黄橙色砂質土小ブロックの混入が顕著に認められる。

遺物は、古代の土器片が出土している。

#### その他遺構及び堆積層出土遺物（第24図）

中世の遺構やII 2層から、古代の土師器杯・甕、須恵器杯、須恵系土器器皿などが出土している。II 2層からは実測可能なものが僅かに出土しているものの、小片が大部分を占めている。



番号	種類	出土遺物層位	特徴		口径	底径 既存率	基高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 杯	II-2層	口縁部:ヨコナデ 底部:直底下半:指標圧痕	口縁部:ヨコナデ。体部:ヘタナダ	(6.8) 3/24	5.4 3/24	2.5	—	R2	
2	土師器 高杯	SD1901.c	脚部:ヘタミガキ	脚部:ナダ	—	—	—	—	R22	
3	須恵器 杯	II-2層	ロクロナデ 底部:ヘタ切り	ロクロナデ	(13.4) 5/24	(7.5) 11/24	3.6	—	R1	Ⅲ類
4	須恵器 杯	II-2層	ロクロナデ 底部:ヘタ切り	ロクロナデ	(14.2) 1/24	(8.0) 2/24	4.1	—	R4	Ⅲ類
5	須恵器 杯	II-2層	ロクロナデ 底部:ヘタ切り	ロクロナデ	(14.4) 5/24	(7.4) 15/24	3.50	—	R6	Ⅲ類
6	土師器 杯	II-2層	ロクロナデ 底部:ヘタ切り	ロクロナデ	(14.4) 4/24	(7.2) 7/24	3.7	—	R18	Ⅲ類
7	須恵器 杯	II-2層	ロクロナデ 底部:斜軸切り	ロクロナデ	11.1 24/24	4.8 24/24	3.0	—	R3	

第24図 II-2層ほか出土遺物

### III 新田遺跡第49次調査

#### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年3月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約20cm、長さ4mのコンクリート杭30本を打ち込むことと、幅30cm、最深80cmの給排水管工事を行うことが示されていた。近接地の調査成果では現表土下約40cmで中世の遺構が確認されていることから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、本発掘調査を実施することとなった。平成21年4月21日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、4月28日より現地調査を開始した。

はじめに、重機により表土除去を行ったところ直ちに褐色砂質土(Ⅱ層)が現れ、上面で小規模な柱穴を確認した。5月8日より作業員を投入して排水用の側溝を設けるとともに遺構検出作業を開始し、S B 1922～1924掘立柱建物跡やS E 1925井戸跡等を検出した。柱穴の精査及びS E 1925の埋土掘り下げを行い、9日に実測図作成のための基準点を設置する。13日に平面図を作成し、柱穴の断ち割り及び断面図作成を随時行う。これらの作業が終了した16日からⅡ層の掘り下げを行い、黄褐色砂質土(Ⅲ層)上面で多数の小溝跡を検出した。これらはⅡ層に近似する埋土のものと、黒色粘土が混入するものに分けられ、重複関係から前者が新しいことを確認した。19日にこれら小溝跡の埋土を掘り下げ、直ちに平面図を作成した。21日からⅢ層の掘り下げを行い、黒色粘土(V層)上面でS X 1905東西道路を確認した。検出状況の写真撮影後、S D 1906南側溝跡の埋土掘り下げを行い、埋まり土の状況から2時期の変遷があると理解することができた。27日、道路の調査が終了したことからV層の掘り下げを開始し、褐灰色粘土(Ⅵ層)上面でS K 1904土壤、さらにその下層にあるにぶい黄褐色砂(Ⅶ層)上面でS D 1903溝跡を検出した。29日、調査区の全景写真を撮影し、6月2日からⅦ層検出遺構の平面・断面図及び西壁を除く調査区の土層断面図を作成する。また、これと並行し、S D 1906検出面の再確認などの補足的な調査を実施した。10日、重機による調査区内の埋め戻しを行い、現地調査の一切を終了した。

#### 2 調査成果

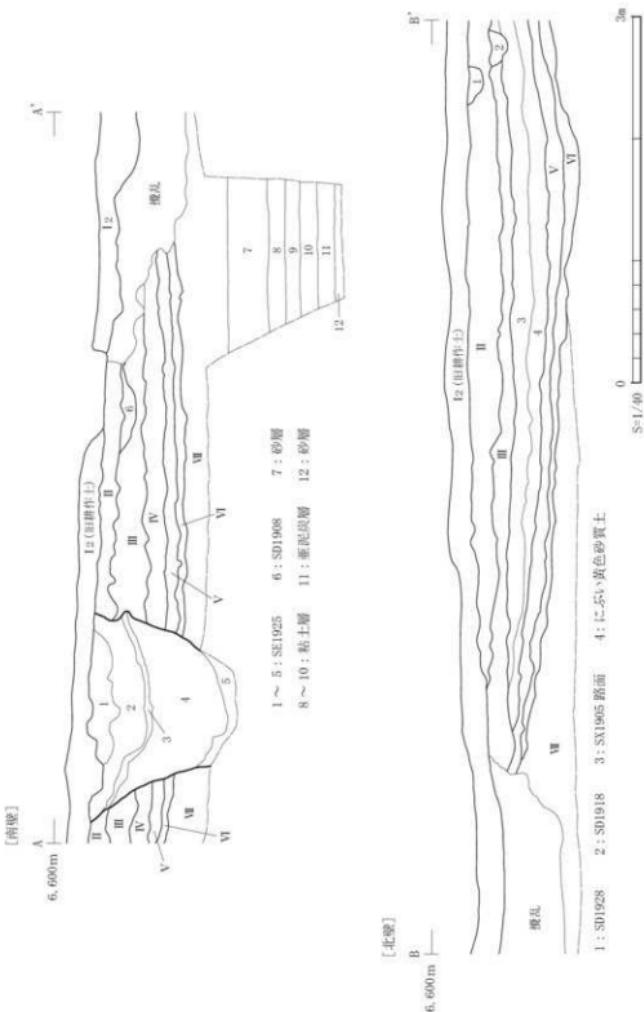
##### (1) 層序(第2図)

I層：宅地造成に伴う盛土(I1層)とそれ以前の耕作土(I2層)である。厚さはI1層が40～60cm、I2層



第1図 調査区位置図

第2図 調査区南・北壁断面図



が10～30cmである。

II層：調査区全域に認められる褐色砂質土であり、にぶい黄橙色砂質土粒が混入している。厚さは10～30cmであり、この上面が中世の遺構検出面である。

III層：全域に認められる黄褐色砂質土であり、にぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入している。厚さは20～30cmであり、この上面が古代の遺構検出面である。

IV層：調査区のおよそ全域で確認したにぶい黄橙色砂質土であり、にぶい灰黄褐色砂質土粒が僅かに混入している。厚さは10～20cmであり、S X 1906東西道路跡南側溝の埋土最上面に厚く堆積している。

V層：全域で確認した黒色粘土であり、にぶい黄橙色砂質土小ブロックが混入している。厚さは5～10cmであり、この上面が古代の遺構検出面である。

VI層：全域で確認した褐灰色粘質土である。厚さは10cm未満であり、この上面が古墳時代の遺構検出面である。

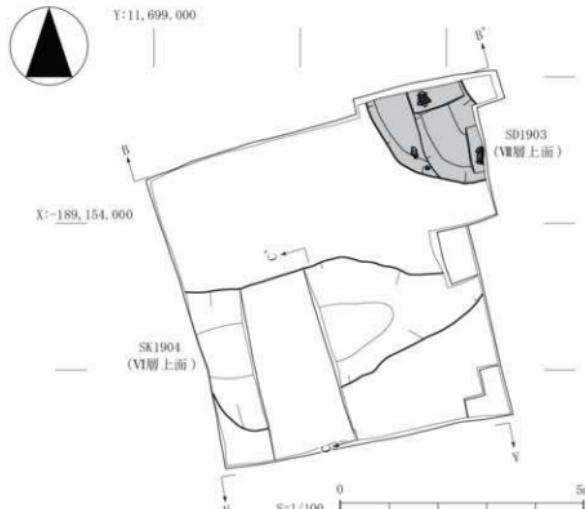
VII層：全域に認められる、締まりの強いにぶい黄褐色砂である。厚さは南壁付近で約40cm確認できる。この上面が古墳時代の遺構検出面であり、当該区における最終遺構検出面と考えられる。なお南壁際でVII層以下の堆積状況を確認する目的で一部深掘りを実施したが、締まりの弱い粗砂層や粘質土が堆積しており、安定した地盤は認められなかった。

## (2) 発見した遺構と遺物

[VII層上面]

S D 1903溝跡（第3・4図）

調査区北東部で発見した溝跡である。ごく一部分の検出であるが、屈曲する溝跡の南西隅付近にあたる



第3図 VI・VII層上面検出遺構平面図

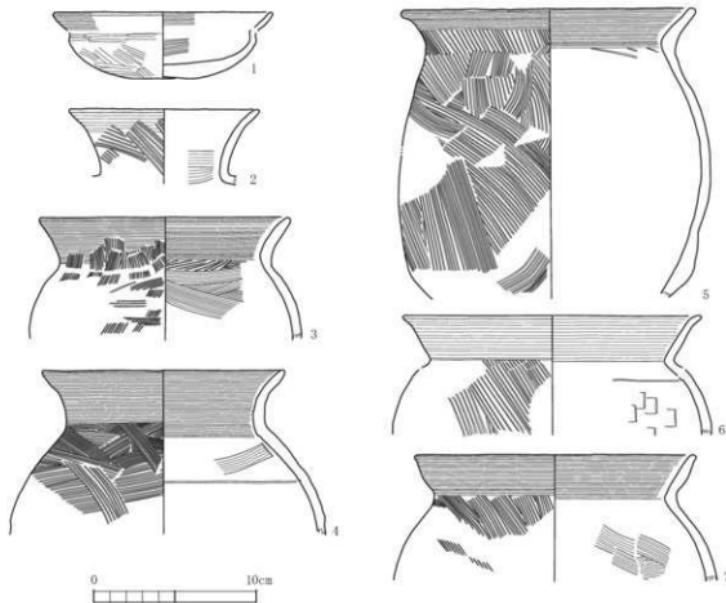
と考えられる。規模は、上幅約2m、深さ約30cmである。壁は非常に緩やかに立ち上がっているが、西側中位付近に幅約70cmの平坦面が認められる。底面はやや凹凸があり、丸く窪んでいる。埋土はVI層と同一の褐灰色粘土である。

遺物は、土師器鉢・壺・甕が出土している。

#### 〔VI層上面〕

#### S K 1904 土壙 (第3・5図)

調査区中央部で発見した土壙である。平面形は東西に長い不正形であり、規模は長軸6m以上、短軸約3



番号	種類	特徴		口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	写真 回数	登録 番号	備考	単位:cm
		外 面	内 面							
1	土師器 鉢	L1縁部:ヨコナデ 体部:ハラミガキ	L1縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	13.2 2.21 24/24	3.2 24/24	(4.0)	—	R10		
2	土師器 鉢	L1縁部:ヨコナデ→ハケメ	L1縁部:ヨコナデ, ハケメ	11.6 3.2 24/24	—	—	—	R2		
3	土師器 鉢	L1縁部:ヨコナデ→ハケメ 体部:ハケメ	L1縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ→ハラミ	16.0 2.24 23/24	—	—	—	R12		
4	土師器 鉢	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハラナデ	15.0 2.21 23/24	—	—	—	R1		
5	土師器 鉢	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ナデ	18.0 2.24 24/24	—	—	—	R5		
6	土師器 鉢	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ	L1縁部:ハナメ→ヨコナデ 体部:ハラナデ	18.0 5.24 24/24	—	—	—	R11		
7	土師器 鉢	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ	L1縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハラナデ	17.0 12.24 24/24	—	—	—	R4		

第4図 S D 1903溝跡出土遺物

m、深さ70cmである。壁は北側及び東側は緩やかであるが、南側はやや急に立ち上がっている。底面にはほとんど凹凸ではなく、中央に向かって丸く窪んでいる。埋土は中央ベルト付近で3層に分けることができる（第5図1～3層）。1

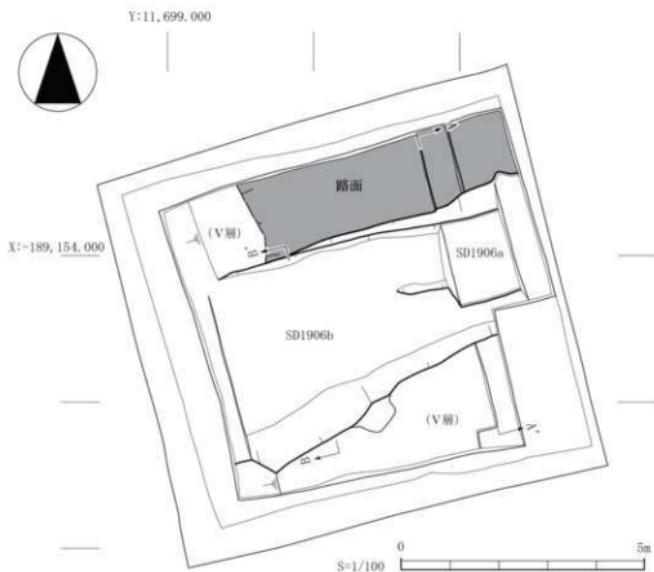
層は砂粒やにぶい黄褐色砂質土小ブロックが混入する褐灰色粘土質土、2層は砂が多量に混入する灰黄褐色粘土質土、3層は黒色粘土ブロックが多量に混入する灰黄褐色またはにぶい黄橙色粗砂である。

遺物は、土師器甕が出土している。

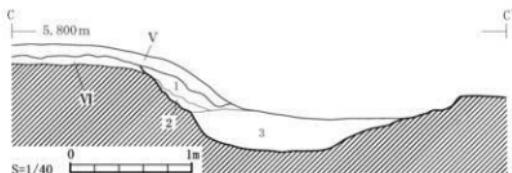
#### 〔V層上面〕

#### S X 1905東西道路跡（第6・7図）

調査区のほぼ全域で検出した東西道路跡であり、路面及び素掘りの南側溝S D 1906を検出した。位置関係より、第37次調査S X 1777東西道路跡と一連のものである。今回は長さ約7mにわたって検出したが、さらに調査区西側に延びている。路面はV層及び調査区北側に認められるにぶい黄橙色砂質土上面である。南側溝S D 1906は調査区東側が大きく削り取られており、上面にはにぶい黄橙色砂質土（IV層）が厚く堆積している。南側溝の状況から、2時期（A→B期）の変遷があることを確認した。



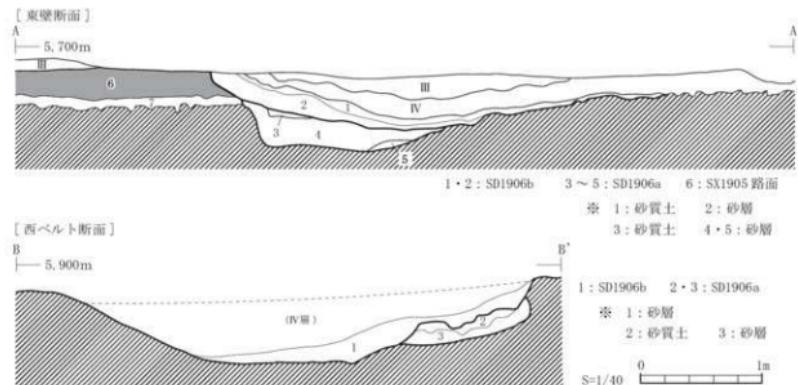
第6図 S X 1905東西道路跡平面図



第5図 S K土壤 1904断面図

**A期**: SD 1906 aを発見した。B期側溝により大部分が破壊されており、残存状況は悪い。方向は東で約14度北に偏しており、規模は上幅1.7m、路面からの深さは約70cmである。壁は比較的良好に残存する路面側でみると、およそ垂直に立ち上がっている。底面は平らに成形されており、東西の比高はほとんどない。埋土は東側で3層（第7図：東壁3～5）、西側で2層（第7図：西ベルト2・3）に分けることができる。西ベルトでみると、上層がシルト質の強いにぶい黄色砂質土、下層は粗砂などが多く混入するにぶい黄褐色細砂である。遺物は出土していない。

**B期**: SD 1906 bを発見した。A期南側溝をやや南側に移動して造り替えている。方向は東で約20度北に偏しており、規模は上幅約4m、路面からの深さは50～70cmである。壁は緩やかに立ち上がっているが、路面側の西半部には幅約40cmの平坦面が認められる。底面は丸く掘り窪められており、東側から西側に向かって約30cm低くなっている。埋土は東側で2層に分けることができる（第7図：東壁1・2）。上層は炭化物粒が僅かに混入するにぶい黄色砂質土、下層はにぶい黄橙色砂質土ブロックが混入するにぶい黄褐色細砂である。遺物は出土していない。



第7図 SX 1905 東西道路跡断面図

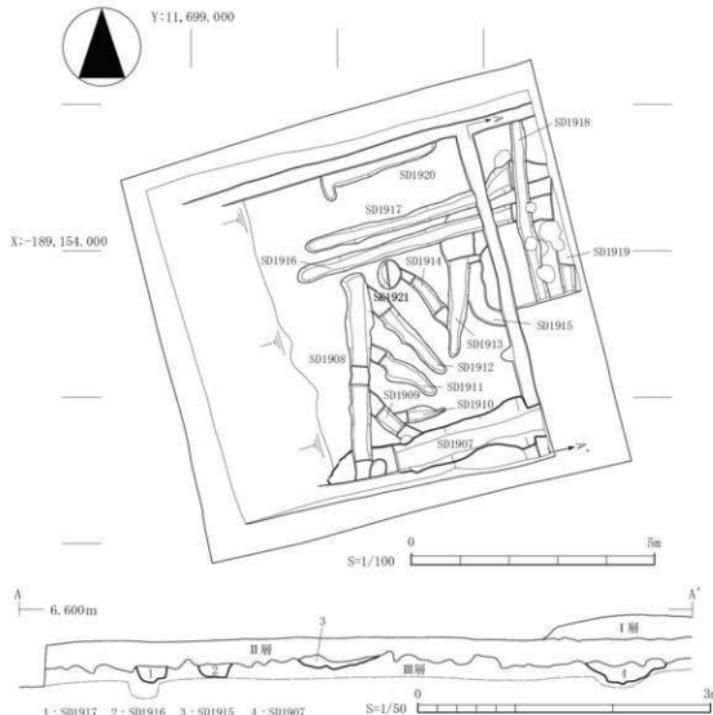
### 〔Ⅲ層上面〕

#### S D 1907溝跡（第8図）

調査区南端部で確認した東西方向の溝跡である。SD 1908・1909と重複しており、SD 1908より古く、SD 1909よりも新しい。方向は東で約16度北に偏しており、規模は長さ4.5m以上、上幅約1m、深さ約20cmである。壁は僅かに凹凸があるものの、緩やかに立ち上がっている。底面は丸く窪んでおり、東西の比高はほとんどない。埋土は、にぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入する暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

#### S D 1908～1920溝跡（第8図）

調査区全域で発見した小規模な溝跡である。南北方向のものと東西方向のものがあり、規模は上幅30～60cm、深さ10～15cmである。壁は緩やかに立ち上がるものと、およそ垂直に立ち上がるものがある。



第8図 III層上面検出遺構平面・断面図

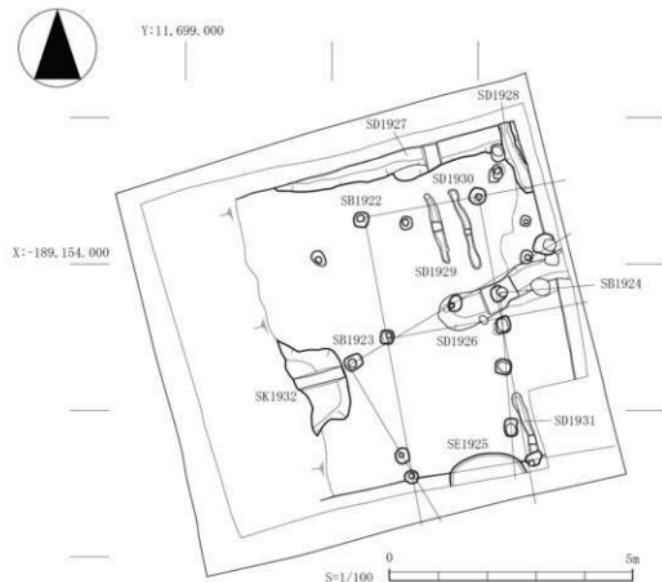
底面は平らなものもあるが、大部分は丸く掘り窪められている。埋土は、黒色砂質土小ブロックが混入する黒褐色砂質土ものの（SD 1909・1911・1912・1914）と、にぶい黄橙色砂質土小ブロックが混入する暗褐色砂質土のもの（SD 1907・1908・1913・1916～1920）があり、重複関係より前者が古いことを確認した。遺物は、土師器杯の小片が出土している。

#### 〔II層上面〕

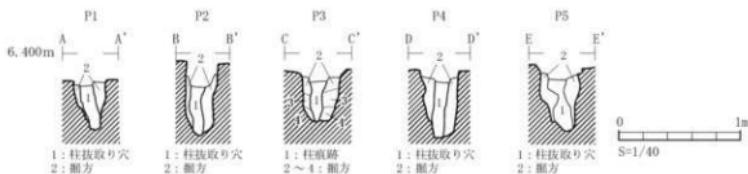
##### S B 1922掘立柱建物跡（第9・10・11図）

調査区東半部で発見した、総柱の掘立柱建物跡である。さらに北側に延びる可能性も考えられるが、ここではP3を北西隅柱穴と判断し、南北2間以上、東西2間以上のものと推測した。S B 1923・1924、SD 1926・1931と重複しており、SD 1931よりも古い。柱穴は6基検出した。北西隅柱穴で柱痕跡、それ以外の柱穴で柱抜取り穴を確認しており、柱抜取り穴では北側柱列西より1間目柱穴から南に1間目の柱穴（P5）を除くすべての柱穴で柱のあたり痕跡が認められた。方向は、西側の柱列で測ると北で11度16分西

に偏している。規模は西側の柱列で総長5.4m以上、柱間は北より2.48m、2.92mであり、北側の柱間は2.48mである。掘方の平面形はおよそ方形であり、規模は北西隅柱穴で測ると1辺約30cm、深さ約40cmである。埋土は暗褐色または褐色砂質土であり、黒褐色砂質土小ブロックが多量に混入している。柱痕跡は、およそ柱穴の中心で確認しており、直径は約15cmである。埋土は、炭化物粒が混入する黒褐色砂質土である。柱抜取り穴は、柱痕跡状に認められるものと掘方の中央部を大きく破壊しているものがあり、前者が柱のあたり痕跡を残すものである。埋土は暗褐色砂質土が主体であり、黒褐色砂質土または黄褐色砂質土小ブロックが多く混入している。遺物は出土していない。



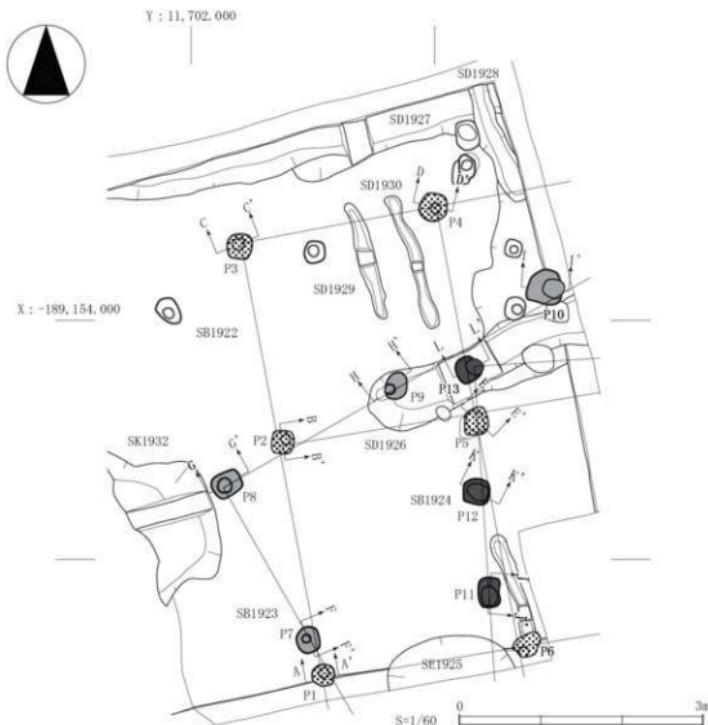
第9図 II層上面検出構造平面図



第10図 S B 1922 挖立柱建物跡柱穴断面図

### S B 1923掘立柱建物跡（第9・11・12図）

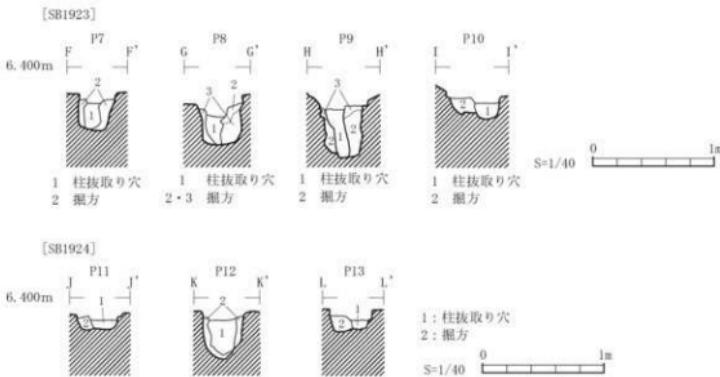
調査区南東部で発見した東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡である。S B 1922・1924、SD 1926と重複しており、SD 1926よりも古い。柱穴は4基検出した。すべての柱穴で柱抜取り穴を確認しており、このうち北側の柱列西より2間目柱穴を除く柱穴で柱のあたり痕跡が認められた。方向は、北側の柱列で測ると東で約30度北に偏している。規模は北側の柱列で総長4.8m以上、柱間は西より2.35m、約2.4mであり、西側の柱間は2.14mである。掘方の平面形は方形または楕円形であり、規模は北西隅柱穴で測ると長辺約40cm、短辺約40cm、深さ45cmである。埋土は暗褐色砂質土が主体であり、黒褐色粘質土粒が多く混入している。柱抜取り穴は、柱痕跡状に認められるものと掘方東側を壊すものがあり、前者が柱のあたり痕跡を残すものである。埋土は暗褐色砂質土が主体であり、黒褐色粘質土小ブロックや炭化物粒が多く混入している。遺物は出土していない。



第11図 S B 1922～1924掘立柱建物跡か平面図

### S B 1924掘立柱建物跡（第9・11・12図）

調査区南東部で発見した掘立柱建物跡である。南北3間以上の柱列より推測したものであり、建物西側の柱列であると考えられる。S B 1922・1923、S D 1926と重複し、S D 1926よりも新しい。柱穴は3基検出しておらず、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。方向は西側の柱列で測ると北で約3度西に偏しており、柱間は北より約1.5m、約1.3mである。掘方の平面形はおよそ方形であり、規模は北西隅柱穴で測ると、長軸35cm、短軸34cm、深さ19cmである。埋土は暗褐色砂質土粒が多量に混入する黒褐色砂質土であり、炭化物粒が僅かに混入している。柱抜取り穴は、掘方の大部分を壊すものと東辺の一部を壊すものが認められる。埋土は、黄褐色砂質土小ブロックが多量に混入する灰黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。



第12図 S B 1923・1924掘立柱建物跡柱断面図

### S E 1925井戸跡（第2・11図）

調査区南東部で発見した素掘りの井戸跡である。平面形はおよそ円形であると推測されるが、大部分が調査区外にあるため、規模などの詳細は明らかでない。埋土は5層確認した（第2図：南壁1～5）。1層は黒褐色粘土、2層はにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多く混入する黒褐色砂質土、3層は暗褐色砂質土、4層は黒褐色粘土及びにぶい黄橙色砂質土小ブロックが混入する褐灰色粘土、5層はにぶい黄橙色砂質土や浅黄色砂質土小ブロックが多く混入する黒褐色粘土である。このうち、1～4層には炭化物粒が多量に混入している。遺物は出土していない。

### S D 1926溝跡（第11図）

調査区東側中央部で発見した東西方向の溝跡である。S B 1922～1924と重複し、S B 1924よりも古く、S B 1923よりも新しい。規模は長さ2.8m以上、上幅50～70cm、深さ4～8cmである。壁は非常に緩やかに立ち上がり、底面は西から東へ向かって僅かに低くなっている。埋土は黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

### S K 1932土壤（第11図）

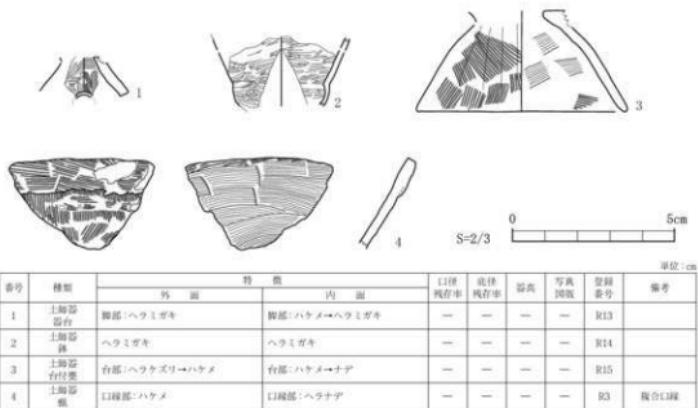
調査区西側で発見した不正形の土壤である。西側にある南北方向の攪乱に大部分が破壊されており、残

存状況は悪い。規模は、南北2.1m、東西1m以上、深さ約30cmである。壁は緩やかであるが、南側でやや急に立ち上がる箇所が認められる。底面は凹凸が著しく平坦でない。埋土は黒褐色粘質土小ブロックが多い量に混入する暗褐色砂質土である。

遺物は、古代の土器片が出土している。

#### その他遺構及び堆積層出土遺物（第13図）

V層から、古墳時代の土師器鉢・甕・台付甕、中世の遺構から古代の土師器杯、須恵器高台付杯などが出土している。大部分が小片であり、実測できたものは僅かである。



第13図 V層出土遺物

## IV 新田遺跡第50次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年4月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に深さ75cmの掘削を行うことと、最深約80cmの污水管付設をはじめとする給排水関係の工事内容が示されていた。近接地の調査成果では現表土下約40cmで中世の遺構が確認されていることから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、本発掘調査を実施することとなった。平成21年5月29日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、6月9日より現地調査を開始した。

はじめに、重機により表土除去を行ったところ、黄褐色砂(II層)上面で小穴1基とSD 1937小溝跡を確認した。10日より作業員を投入し、西半部にある後世の擾乱を除去とともに、II層上面の精査と全景写真撮影を行う。12日よりII層の掘り下げを開始し、黒褐色粘質土(IV層)上面でSX 1935東西道路跡を検出した。13日よりSD 1936北側溝跡の埋土掘り下げを開始し、3時期の変遷があることを確認した。この間、雨天が続き作業が滞ったものの、24日にはIV層上面の全景写真を撮影した。25日からIV層の掘り下げを開始し、にぶい黄褐色砂質土(V層)上面でSK 1934土壙、にぶい黄褐色砂質土(VI層)上面でSX 1933性格不明遺構を確認した。27日にVI層上面の全景写真を撮影し、30日からは調査時の作業用通路として残していたSD 1936東半部の埋土掘り下げ及び東壁の土層断面図を作成する。7月3日、これらの作業が終了し、調査器材を撤収した。その後、調査区北東部で確認したコンクリート製井戸跡の撤去に時間を要したが、14日に重機による調査区内の埋め戻しを行い現地調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



SD 1936 北側溝検出状況写真

### 2 調査成果

#### (1) 層序(第2図)

I層：宅地造成に伴う盛土(I1層)とそれ以前の耕作土(I2層)である。厚さはI1層が約40cm、I2層が30～40cmである。

II層：全域に認められる黄褐色砂であり、黒褐色粘質土小ブロックが多く混入している。厚さは10～30

cmであり、この上面が中世の遺構検出面である。

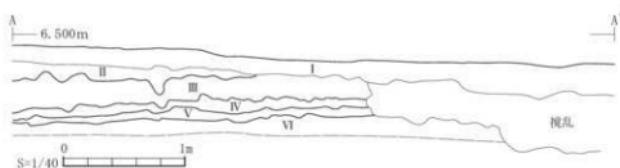
III層：全域に認められる灰黄褐色またはにぶい黄褐色砂質土であり、黒褐色粘質土粒が多く混入している。

厚さは5～30cmであり、SX 1935東西道路の路面上で最も厚く堆積している。

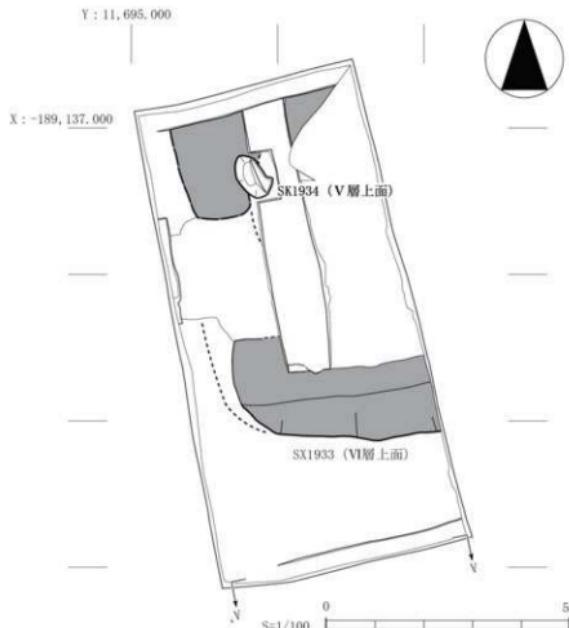
IV層：全域で確認した黒褐色粘質土であり、黄褐色砂質土粒が多く混入している。厚さは約10cmであり、この上面が古代の遺構検出面である。

V層：全域で確認したにぶい黄褐色砂質土であり、灰白色の凝灰岩粒が多く混入している。厚さは2～25cmであり、この上面が古墳時代の遺構検出面である。

VI層：全域に認められるにぶい黄橙色砂質土である。この上面が古墳時代の遺構検出面であり、当該区における最終遺構検出面と考えられる。



第2図 調査区南壁断面図



第3図 V・VI層上面検出遺構平面図

## (2) 発見した遺構と遺物

### [VI層上面]

#### S X 1933性格不明遺構(第3・7図)

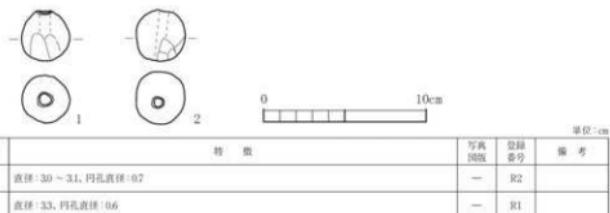
調査区中央から北側で確認した、性格不明の遺構である。大部分が古代のS X 1935道路跡に破壊されており詳細は明らかでないものの、残存状況より屈曲する溝跡の南辺から北西隅付近である可能性が高い。溝跡の幅は2.5m以上であり、範囲は南北7.6m以上、東西4m以上に及びものと推測される。埋土は中央付近で4層(第7図:中央ベルト20~23)、東側で2層(第7図:東壁10・11)に分けることができる。20層は黒褐色粘質土が小ブロック状に多量に混入するにぶい黄褐色砂質土、21層は黒褐色粘質土粒が多く混入するにぶい黄橙色砂質土、22層はにぶい黄橙色砂質土粒が多く混入する褐灰色粘質土、23層はにぶい黄橙色砂質土粒が多く混入する黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

### [V層上面]

#### S K 1934土壌(第3・4・7図)

調査区北半部で発見した土壌である。平面形は南北に長い円形であり、規模は南北約1m、東西約50cm、深さ約60cmである。壁は北側と東側は垂直に、南側と西側は非常に緩やかに立ち上がっている。底面はほとんど凹凸がなく、平坦である。埋土は3層に分けることができる(第7図:中央ベルト17~19)。17層は黄褐色砂質土粒が混入する黒褐色粘質土、18層はにぶい黄橙色砂質土粒や炭化物粒が僅かに混入する灰黄褐色粘質土、19層はにぶい黄橙色砂質土粒が多く混入する暗褐色砂質土である。

遺物は、土玉が出土している。



第4図 S K 1934土壌ほか出土遺物

### [IV層上面]

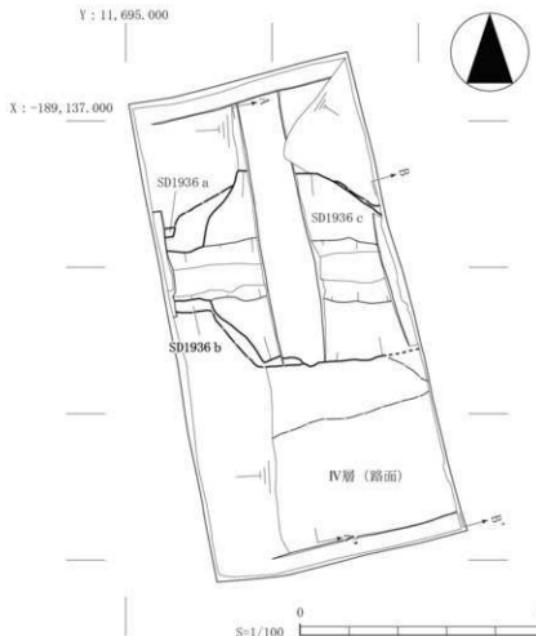
#### S X 1935東西道路跡(第5~7図)

調査区のほぼ全域で検出した東西道路跡であり、路面と素掘りの北側溝 S D 1936を検出した。位置関係より、第37次調査 S X 1777や第45次調査 S X 1855、第48次調査 S X 1900、第49次調査 S X 1905東西道路跡と一連のものである。今回は長さ約4.5mにわたって検出したのみであるが、さらに調査区西側に延びている。路面は検出面であるIV層と考えられる。北側溝の状況から、3時期(A→C期)の変遷を確認した。

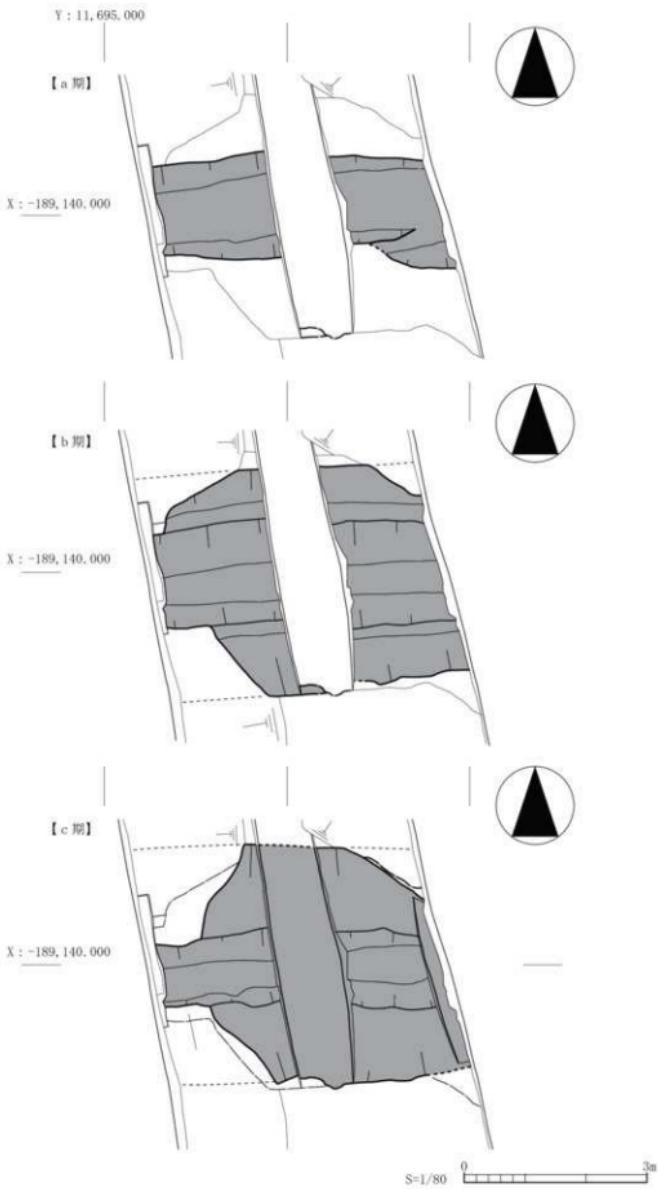
**A期:** S D 1936 aを発見した。B期側溝により大部分が破壊されており、残存状況は悪い。方向は東で約1度北に偏しており、残存する規模は上幅約1.5m、路面からの深さは約1.3mである。壁はやや凹凸が

あるものの、およそ垂直に立ち上がっている。底面は平坦であり、東西の比高はほとんどない。埋土は中央付近で3層(第7図:中央ベルト14~16)、東側で2層(第7図:東壁8・9)に分けることができる。中央ベルトでみると、14層は褐色粘土小ブロックが僅かに混入するにぶい黄橙色砂質土、15層はにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入する褐色粘土、16層は褐色粘土とにぶい黄橙色砂質土小ブロックが多量に混入する黒色粘土である。遺物は出土していない。

**B期:** SD 1936 bを発見した。A期北側溝を南側にわずかに移動して造り替えている。C期側溝により上面が破壊されており、残存状況は悪い。規模は上幅約3.7m、路面からの深さは約1.2mである。壁は緩やかに立ち上がっているが、中位付近に幅20~30cmの平坦面が確認できる。底面は凹凸が認められるものの丸く掘り窪められており、東西の比高はほとんど認められない。埋土は中央付近で5層(第7図:中央ベルト9~13)、東側で3層(第7図:東壁5~7)に分けることができる。中央ベルトでみると、9層はにぶい黄橙色砂質土粒が多く混入する黒褐色粘土質土、10層は褐色粘土小ブロックが僅かに混入するにぶい黄橙色砂質土、11層はにぶい黄橙色砂質土が僅かに混入する褐色粘土、12層はにぶい黄橙色砂質土粒が多量に混入する褐色粘土、13層は砂粒が多く混入する褐色粘土である。このうち、9・12・13層に炭化物が多く混入しており、特に12層で顕著に認められる。遺物は出土していない。



第5図 S X 1935 東西道路跡平面図



第6図 SD 1936北側溝跡変遷図

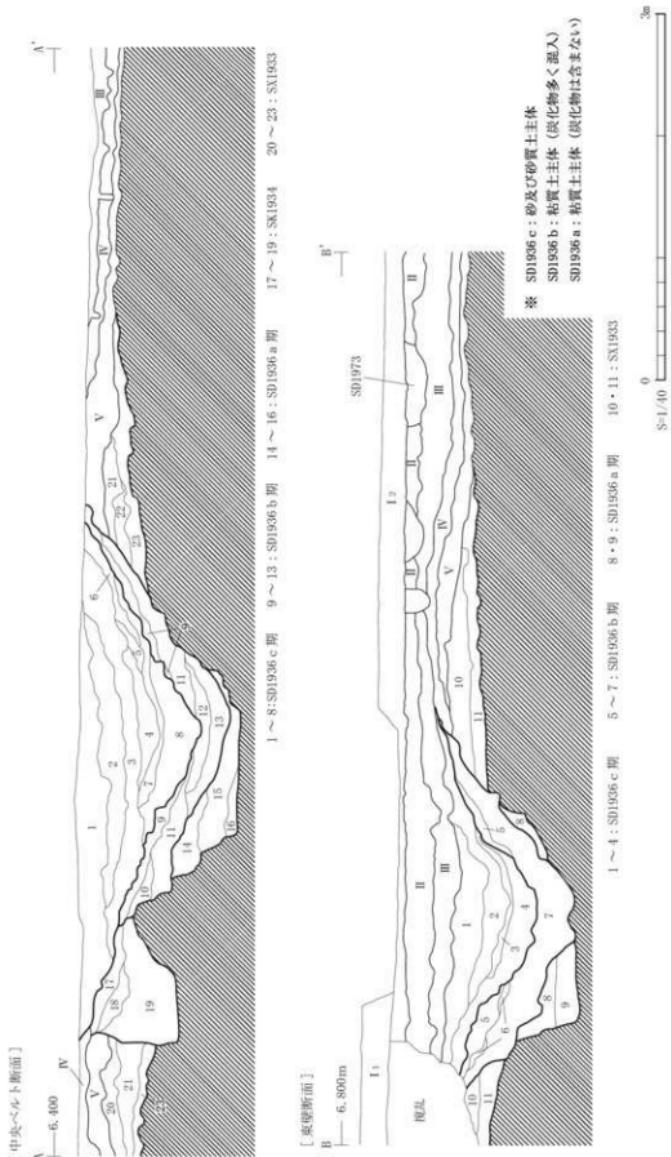


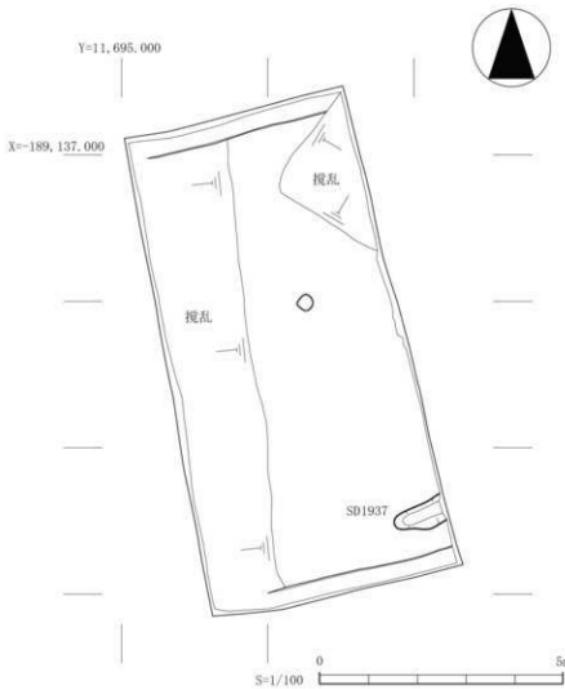
図7 中央ベルト及び東壁断面図

**C期**: S D 1936 c を発見した。B期北側溝とおよそ同位置で造り替えている。方向は東西の発掘基準線と一致しており、規模は上幅約39m、路面からの深さは約0.9mである。壁は中位付近に段が認められ、段より下方がおよそ垂直に、上方は非常に緩やかに立ち上がっている。底面は丸く窪んでおり、東西の比高はほとんどない。埋土は中央付近で8層（第7図：中央ベルト1～8）、東側で4層（第7図：東壁1～4）に分けることができる。中央ベルトでみると、1・3・4・6・8層は褐色またはにぶい黄褐色砂であり、3層底面付近では炭化物が薄層状に認められる。2・5・7層はにぶい黄橙色砂質土であり、2層に褐灰色粘質土小ブロック、5層に黄褐色砂が混入している。遺物は出土していない。

#### 〔II層上面〕

##### S D 1937溝跡（第8図）

南東端部で発見した東西方向の溝跡であり、調査区東側に延びている。規模は長さ1m以上、幅約50cm、深さ約20cmである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は概ね平坦である。埋土は、黄褐色砂質土小ブロックが多量に混入する暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。



第8図 II層検出構造平面図

## V 新田遺跡第52次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年7月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約20cm、長さ6～7.5mのコンクリート杭43本を打ち込むこと、最深11mの掘削を伴う擁壁設置等の工事内容が示されていた。近接地の調査成果では現表土下約40cmで中世の遺構が確認されていることから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、基礎工法の変更は不可能であるとの結論に達したことから、本発掘調査を実施することとなった。平成21年8月7日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、8月26日より現地調査を開始した。

はじめに、重機により表土除去を行ったところ、調査区全域で炭化物が多量に混入する黒褐色砂質土(Ⅱ層)が現れた。周辺地区で確認されている14世紀後半頃の堆積層と近似していることから上面を精査したが、遺構・遺物は発見されなかった。9月2日、再び重機によりⅡ層を掘り下げ、下層での遺構検出を行った結果、南端部で炭化物が多量に混入する灰黃褐色砂質土(Ⅲ1層)、中央から北側で灰黃褐色粘質土(Ⅲ2層)を確認し、Ⅲ1層上面でS B 1945掘立柱建物跡やS D 1955溝跡を検出した。3日より作業員を投入し、S D 1955の埋土掘り下げ及び柱穴の精査を行う。5日、調査区内に実測図作成用の基準点を設置し、隨時平面・断面図を作成する。9日、Ⅲ1・2層上面での調査を終えこれらの掘り下げを開始し、11日にはにぶい黄色砂質土(V 1・2層)上面で多数の小溝跡を確認した。直ちに埋土を掘り下げ平面図を作成し、18日には再度重機を使用しV 1・2層及びこの下層にある黒褐色粘土や褐灰色砂の堆積層を掘り下げる。19日、にぶい黄橙色砂質土(X層)上面でS D 1938溝跡を検出し、埋土掘り下げと平面図作成を行う。25日、X層下層の状況を把握する目的で調査区西壁側の一部で深掘りを行ったが、砂層と粘質土が互層状に堆積するのみであり、安定した地層は確認されなかった。26・27日、北壁を除く調査区の土層断面図を作成するとともに、調査器材の撤収を行う。10月1日、重機による調査区内の埋め戻しが完了し、現地調査の一切が終了した。



第1図 調査区位置図

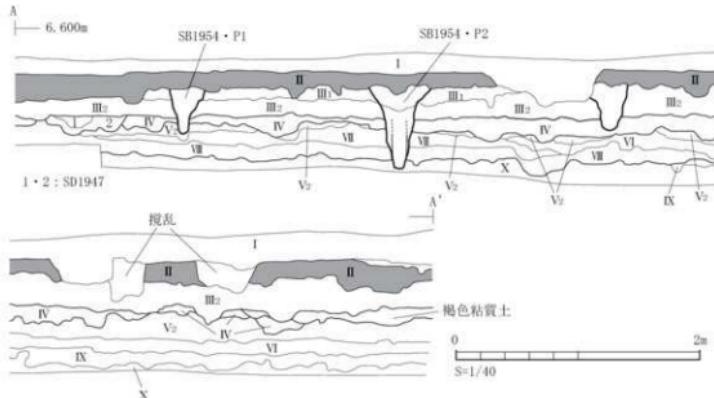


全景写真撮影準備

## 2 調査成果

### (1) 層序(第2図)

- I 層：旧耕作土であり、厚さは約30cmである。
- II 層：全域に認められる黒褐色砂質土であり、炭化物や褐色砂質土小ブロックが多量に混入している。厚さは10～20cmである。
- III 1層：南東部に認められる灰黄褐色砂質土であり、炭化物小ブロックが多量に混入している。厚さは約10cmである。中世の遺構検出面である。
- III 2層：全域で確認した灰黄褐色粘質土であり、黒褐色粘質土粒や灰白色凝灰岩粒が多く混入している。厚さは10～30cmであり、西側ほど厚く堆積している。この上面がIII 1と同じ中世の遺構検出面である。
- IV 層：全域で確認した黒褐色粘質土であり、炭化物粒やにぶい黄橙色砂質土粒が混入している。中央付近で約15cmの堆積が認められるが、西側及び東側では非常に薄く5cmに満たない箇所もある。
- V 1層：北西部に認められるにぶい黄色砂質土であり、黒色粘土ブロックが多量に混入している。非常に薄い層であるが、この上面が中世の遺構検出面である。
- V 2層：およそ全域に認められるにぶい黄色砂質土であり、黒色粘土小ブロックが僅かに混入している。厚さは5～20cmであり、西側ほど厚く堆積している。この上面がV 1と同じ中世の遺構検出面である。
- VI 層：西半部に認められる黒褐色粘質土である。厚さは約10cmである。
- VII 層：中央から東側に認められる褐灰色砂であり、黒褐色粘土小ブロックが混入している。厚さは10～20cmである。
- VIII 層：中央から東半部に認められる黒褐色砂であり、にぶい黄橙色砂質土小ブロックが僅かに混入している。厚さは10～15cmである。底面は凹凸が著しく、北東から南西に向かって緩やかに低くなっている。



第2図 調査区南壁断面図

IX 層：西半部に認められる黒褐色粘質土であり、にぶい黄色砂質土小ブロックや砂粒が多量に混入している。厚さは約10cmであり、底面には著しい凹凸が認められる。

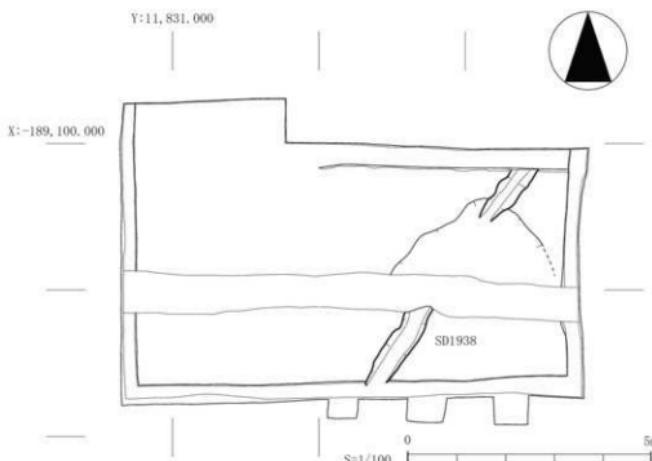
X 層：全域に認められるにぶい黄橙色砂質土である。厚さは20cm以上あり、この上面が当該区の最終遺構検出面である。

## (2) 発見した遺構と遺物

### [X層上面]

#### S D 1938溝跡(第3図)

調査区東部で発見した、南北方向の溝跡である。方向は北で約36度東に偏しており、規模は長さ5.5m以上、上幅40～50cm、深さ約10cmである。壁は南端部で垂直に立ち上がる以外は、非常に緩やかである。底面には凹凸があり、北から南に向かって僅かに低くなっている。埋土は、VII層と同一の黒褐色砂である。遺物は出土していない。



第3図 X層上面検出遺構平面図

### [V1・V2層上面]

#### S D 1939溝跡(第4・7図)

調査区南半部のV2層上面で発見した、東西方向の溝跡である。方向は東で約11度南に偏しており、規模は長さ7m以上、上幅40～50cm、深さ10～20cmである。壁にはほとんど凹凸はなく、およそ垂直に立ち上がっている。底面は、西から南に向かって約10cm

低くなっている。埋土は、2層に分けることができる

(第4図1・2)。いずれも黒褐色粘質土であり、下層にはにぶい黄橙色砂質土ブロックが多量に混入している。遺物は出土していない。



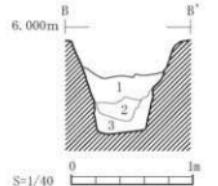
第4図 S D 1939 溝跡断面図

### S D 1940～1952溝跡(第7図)

V1・V2層上面で発見した小溝跡である。S D 1948が東西方向、それ以外はすべて南北方向のものである。規模は上幅30～60cm、深さ10～20cmである。壁は緩やかに立ち上がるものと、およそ垂直に立ち上がるものがある。底面は凹凸が著しいが、南北の比高はほとんどない。埋土は、IV層と同一または近似する黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

### S K 1953土壤(第5・7図)

調査区西側で発見した方形の土壤である。規模は、東西85cm、南北80cm、深さ約80cmである。壁は下方がおよそ垂直に、上方が緩やかに立ち上がっている。底面はおよそ平坦である。埋土3層に分けることができる(第5図1～3)。1層はにぶい黄橙色砂質土ブロックが多く混入する黒色粘土、2層は木片が多く混入する黒色粘土、3層は砂粒が多く混入する褐灰色粘土である。遺物は、土師器甕(A類)、須恵器瓶が出土している。



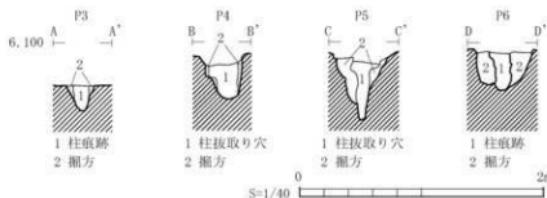
第5図 S K 1953土壤断面図

### [III 1・III 2層上面]

### S B 1954掘立柱建物跡(第6・8図)

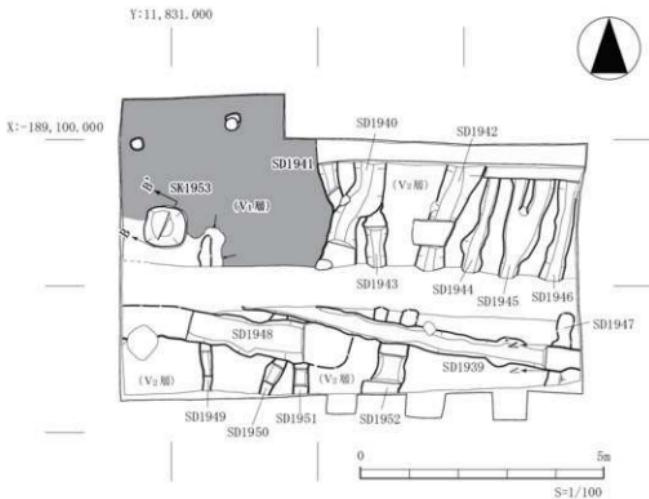
調査区東半部で発見した、桁行3間以上、梁行き2間(推定)の東西棟掘立柱建物跡である。S D 1955と重複しており、それよりも古い(註1)。柱穴は6基検出した。北西隅柱穴と北側柱列西より1間目柱穴で柱抜取穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認しており、柱抜取り穴では北側柱列西より1間目柱穴で柱のあたり痕跡が認められた。方向は、南側柱列で測ると東で5度25分南に偏している。規模は桁行が南側柱列で総長3.61m以上、柱間は西より1.77m、1.84mであり、西妻は約3.8m(2間分)である。掘方の平面形は不整形であり、規模は北側柱列西より2間目柱穴で測ると、長軸約50cm、短軸約40cm、深さ36cmである。埋土はにぶい黄褐色砂質土であり、色調が近似する粘質土小ブロックが多量に混入している。柱痕跡は、掘方のおよそ中央で確認しており、直径は12～22cmである。埋土は、炭化物粒が多く混入する黒色粘土である。柱抜取り穴は、いずれも掘方を大きく破壊している。埋土は黒色粘土が主体であり、炭化物粒やにぶい黄褐色砂質土小ブロックが多量に混入している。

遺物は、南側柱列西より2間目の柱切取穴から無釉陶器甕が出土している。

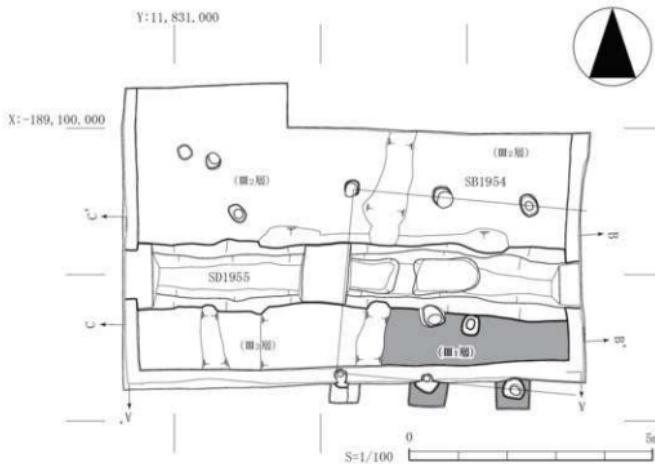


第6図 S B 1954掘立柱建物跡断面図

註1：S B 1954とS D 1955については直接の新旧関係は確認していない。しかし、S D 1955と重複する位置に想定されるS B 1954棟下柱穴がその上面で認められなかったことから、S B 1954はS D 1955よりも古い遺構であると判断した。



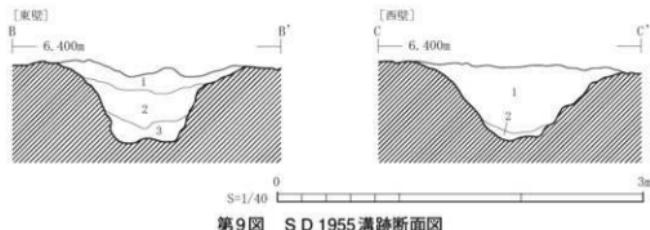
第7図 V<sub>1</sub>・V<sub>2</sub>層上面検出構造平面図



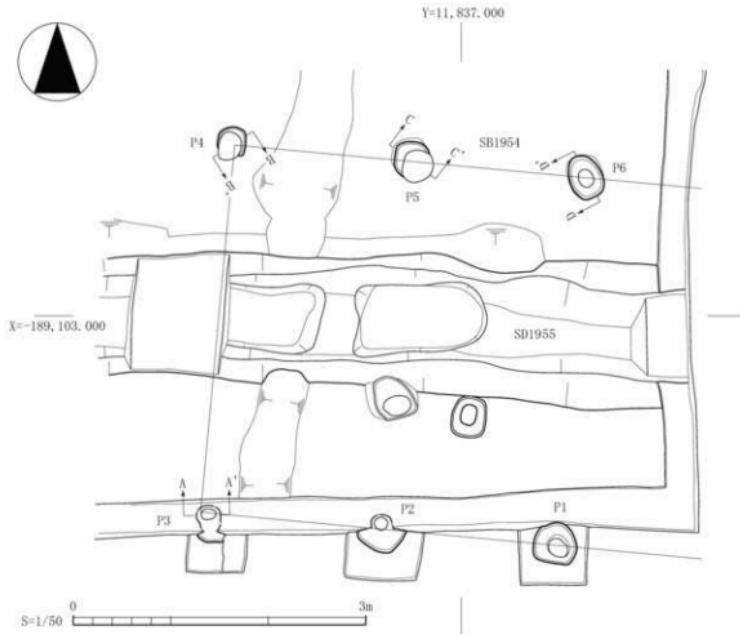
第8図 III<sub>1</sub>・III<sub>2</sub>層上面検出構造平面図

### S D 1955溝跡 (第8～11図)

調査区東半部で発見した東西方向の溝跡である。S B 1954と重複し、それよりも新しい。規模は長さ9.4m以上、上幅1.5～1.7m、深さ70cmである。壁は、概ね緩やかに立ち上がっているが、上位にある段を境に上方では傾斜がさらに緩やかとなっている。底面は凹凸が著しいものの、東西の比高はほとんどない。なお、底面には長さ1.3m、幅70cm、深さ10cmの土壤状の窪みが2カ所認められる。長軸が溝跡と一致していることや同じ埋土であることから、一連のものと判断した。埋土は東側で3層(第9図:東壁1～3)、西側で2層(第9図:西壁1・2)に分けることができる。東壁でみると、1層はにぶい黄橙色砂質土粒が多く混



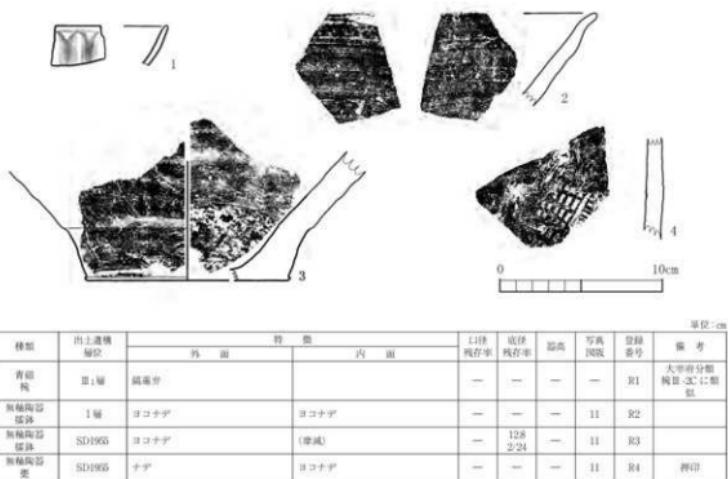
第9図 S D 1955 溝跡断面図



第10図 S B 1954 掘立柱建物跡ほか平面図

入する黒褐色砂質土であり、Ⅱ層に近似している。2・3層は炭化物粒が多く混入する黒色粘土であり、3層にはにぶい黄橙色砂質土小ブロックが混入している。

遺物は、無釉陶器擂鉢・甕のほか、古代の土器片が出土している。



第11図 SD 1955溝跡ほか出土遺物

3. 考點

新田遺跡第48～50・52次調査については、確認した層序や発見した遺構に共通するものが多く認められることから、ここではこれら調査区についてまとめて扱うこととする。

### (1) 層序の整理と時期区分の設定

はじめに、今回実施した第48～50・52次調査区と近接地で実施した第37～39・43・45次調査区の層序を整理し、それぞれ複数存在する構造検出面について比較する。この際、今回の調査区で年代決定の鍵層となるのは、以下の4層である（第12図）。

- a 層：第48次調査区V層、第49次調査区VI層、第50次調査区VI層、第52次調査区X層  
b 層：第49次調査区V層、第50次調査区IV層、第52次調査区IX層  
c 層：第49次調査区IV層、第50次調査区III層  
d 層：第48次調査区II1層、第52次調査区II層

a層はにびい黄橙色砂質土またはにびい黄褐色砂である。第37次調査区VI層、第38・39・43・45次調査区V層と同一のものと推測され、本地区周辺における最終遺構検出面である。これまでの調査成果より、古墳時代前期の遺構検出面であることが明らかとなっている。

b層は黒色または黒褐色粘質土である。第37次調査区V層、第38・39・43次調査区IV層、第45次調査区IV層と同一のものと推測され、本地区周辺では広い範囲で確認することができる。第49次調査区では古



第12図 南寿福寺地区の遺構検出面模式図

墳時代前期の遺物が出土していることから、およそこの頃に堆積したものと推測される。第37・45次調査区では、この上面が奈良時代の東西道路跡（第37次調査区S X 1777、第45次調査区S X 1855）の検出面となっている。

c層はにぶい黄橙色砂質土であり、第37次調査区IV 2層、第38・39・43・45次調査区III層と同一のものと推測される。S X 1777及びS X 1855東西道路跡を直接覆っており、道路側溝の埋土最上位にも厚く堆積している。少量ではあるが8世紀後半頃の土師器が出土していることから、この下層で検出した遺構を8世紀後半以前、上面で検出した遺構をそれ以降の年代と捉えることができよう。

d層は炭化物や明黄褐色砂質土ブロックが多く混入する黒褐色砂質土であり、第37次調査区III 1層、第38・39・43・45次調査区II 1層と同一のものと推測される。本遺跡寿福寺地区では広い範囲で確認されているものの、今回の調査では第48・52次調査区にのみ認められる。第4・11次調査の成果より14世紀後半頃に堆積したことが明らかであり（註1）、上面が15・16世紀頃、下層が12～14世紀頃の遺構検出面となっている。

以上を整理すると、a・b・c・d層との関係から、今回発見した遺構については以下のような時期区分が可能となる。

古墳時代前期：検出面がa層上面であり、b層に覆われる遺構

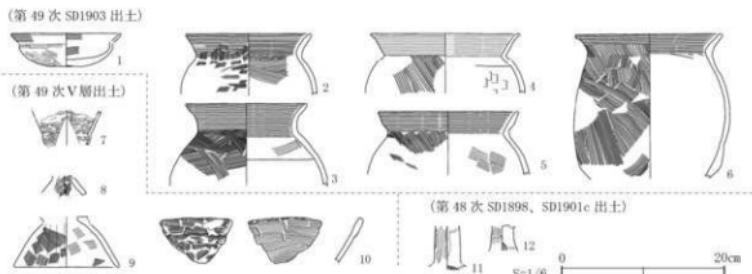
古代：検出面がb層上面でありc層に覆われる8世紀後半以前の遺構と、c層上面で確認される8世紀後半以降の遺構

中世：d層の下層で確認される12～14世紀頃の遺構と、上面で確認される15・16世紀頃の遺構

## （2） 遺構の年代と出土遺物

### ① 古墳時代前期

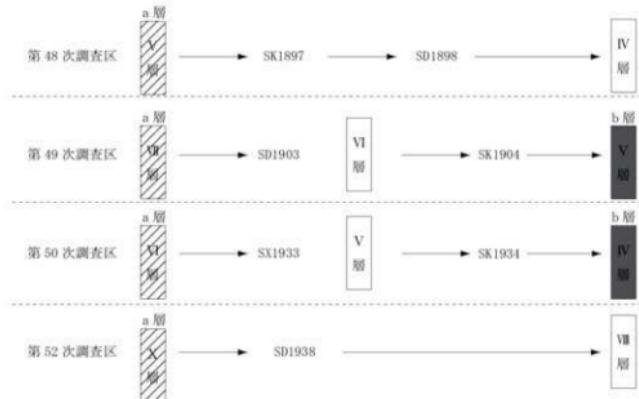
第48次調査区S D 1898、S K 1897、第49次調査区S D 1903、S K 1904、第50次調査区S X 1933、S K 1934、第52次調査区S D 1938がある。調査区ごとの遺構の変遷は、第14図のとおりである。このうち、S D 1898・1903、S K 1897及びb層から土師器鉢・高壺・器台・瓶・壺・甕・台付甕が出土している。これらの特徴をまとめると、以下のようになる。



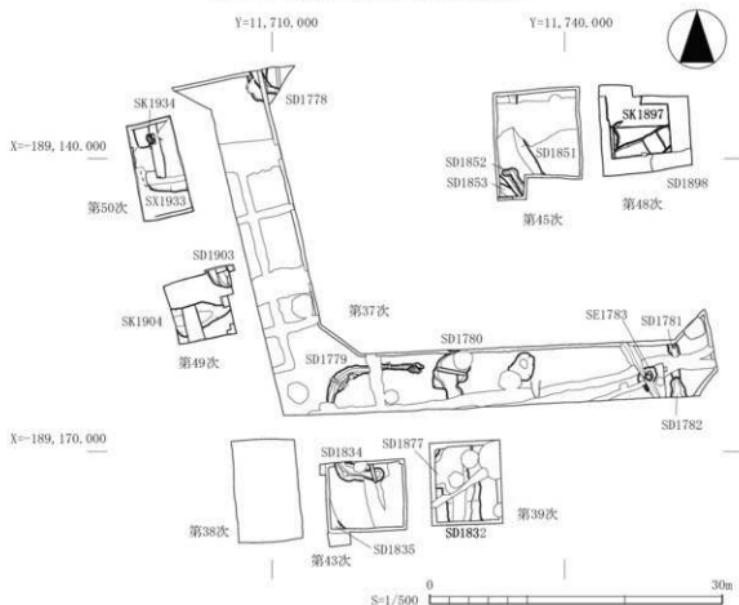
第13図 古墳時代前期の遺物

註1：多賀城市埋蔵文化財調査センター「新田遺跡（第4・11次調査報告）」多賀城市文化財調査報告書第23集 1990

鉢(第13図1・7)：口径13.2cmのものと、10cm未満と推測される小型のものが各1点ある。前者は平底のものである。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境が強く屈曲している。屈曲の位置は器高上位にあり、口縁部はおよそ直線的に短く外傾する。器面調整は、体部外面がヘラミガキ、内面がヘラナナで



第14図 遺構の重複関係(古墳時代前期)



第15図 古墳時代前期の遺構配置図

あり、口縁部は内外面ともにヨコナデである。辻編年(註1)でみると鉢Aに分類されるものであり、Ⅱ-2期とされている名取市野田山遺跡10号住居跡出土土器(註2)や塩釜式後半頃とされている佐沼城跡S D 105溝跡出土土器(註3)などに類似するものが認められる。小型のものは器高に対して口径が大きく、口縁部と体部の境に認められる屈曲点は器高下半部に位置している。体部は半球状を呈しており、口縁部は僅かに内彎しながら外傾している。内・外面ともに丁寧なヘラミガキが施されており、辻編年Ⅲ-1期とされる石巻市田道町遺跡第3号住居跡出土遺物(註4)と類似している。

高坏(第13図11・12)：中実棒状と柱状空中の脚部破片が2点あり、いずれも外面に縱方向に丁寧なヘラミガキが施されている。前者は丹羽編年Ⅲ段階、辻編年Ⅲ-4期に位置づけられている大崎市留沼遺跡第4地点出土遺物(註5)に類似するものが認められるが、本資料については裾部内面がハケメ調整である点で異なっている。後者は丹羽編年Ⅱ B段階(註6)及び辻編年Ⅲ-3期とされている美里町山前遺跡大溝(註7)や石巻市田道町遺跡第9号住居跡出土のものに認められる。しかし、それらの脚部はいずれも直線的であるのに対して、本資料は裾部に向かってやや外に広がる様子を示す点で異なっている。

器台(第13図8)：脚部の破片が1点ある。受部底面に貫通孔、脚部に円孔が認められる。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はハケメ後ナデ調整が施されている。

壺：体部の破片が1点ある。小型のものであり、およそ球形の体部であると考えられる。外面はハケメ後ヘラミガキ、内面はヘラナデである。

甕(第13図2～6)：口縁部が短く外反するものが6点、やや直立気味のものが1点である。体部の形状は、最大径の突出が弱い長胴形のものが1点認められる以外は定かでない。調整については、いずれも外面は口縁部がヨコナデ、体部がハケメ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がハケメまたはヘラナデである。辻編年でみると、口縁部が短く外反するものは甕V類、やや直立気味のものは甕T類に類似しており、ハケメを多用する点を考慮すれば丹羽編年Ⅲ段階や辻編年Ⅲ-4段階よりも古い要素が認められる。なお、これら以外の体部破片については、外面ハケメのものと、ハケメ後ヘラミガキを施すものがある。また、底部破片には、輪台充填技法を施したものも認められる。

台付甕(第13図9)：台部が1点ある。台の高さは5cm程度であり、やや内彎しながら裾に至る。外面はヘラケゼリ後ハケメ、内面は裾部がハケメ、ヘラナデである。

以上、器種ごとの特徴をみると、丹羽編年のⅡ段階、辻編年のⅢ-1～3段階と類似するものが多いものの、一部後出的な新しい要素を持つものも認められる。したがって、今回発見した遺構についても、古墳時代前期でもやや新しい時期のものと捉えることができよう。

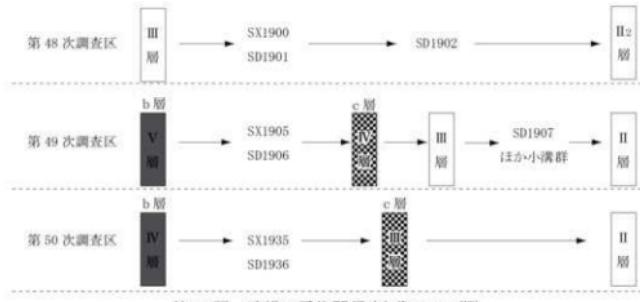
## ② 古代

- b 層との関係から8世紀後半以前のものを古代Ⅰ期、8世紀後半以降のものを古代Ⅱ期とする。調査区
- 註 1：辻秀人「東北南部における古墳出現期の土器編年—その2—」『東北学院大学論集 歴史学・地理学 第27号』東北学院大学学術研究会 1995  
註 2：宮城県教育委員会『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書第145集 1992  
註 3：追町教育委員会『佐沼城跡』追町文化財調査報告書第2集 1995  
註 4：石巻市教育委員会『田道町遺跡』石巻市文化財調査報告書第7集 1995  
註 5：宮城県教育委員会『留沼遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書一三一』宮城県文化財調査報告書第65集 1980  
註 6：宮城県教育委員会『今熊野遺跡』『今熊野遺跡 一本杉遺跡 馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集 1985  
註 7：小牛田町教育委員会『山前遺跡』1976

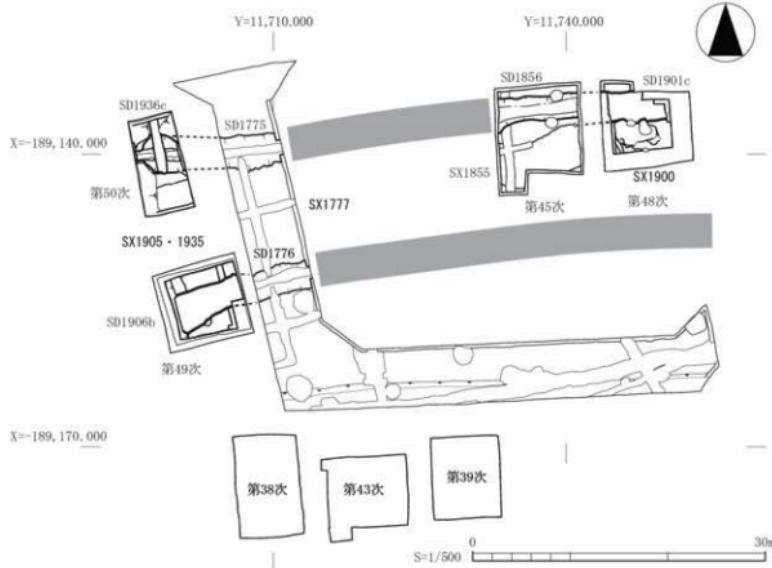
ごとの遺構の変遷は、第16図のとおりである。

#### 〔古代I期〕

第48次調査区 S X 1900東西道路跡と S D 1901北側溝跡、第49次調査区 S X 1905東西道路跡と S D 1906南側溝跡、第50次調査区 S X 1935東西道路跡と S D 1936北側溝跡がある。これら道路跡は、第37次調査区 S X 1777及び第45次調査区 S X 1855東西道路跡と同一のものであり、それらと合わせると約60m確認したことになる。道路の規模は、S D 1906とS D 1936の心々間で測ると169mである。また、今回の調査では北側溝で3時期(a→c期)、南側溝で2時期(a→b期)の変遷を確認し、道路全体では3時期の変



第16図 遺構の重複関係(古代I・II期)



第17図 古代I期の遺構配置図

遷(A→C期)があると理解することができた。残存状況の良い北側溝でみると、以下のような断面の形状及び埋土の特徴が指摘できる。

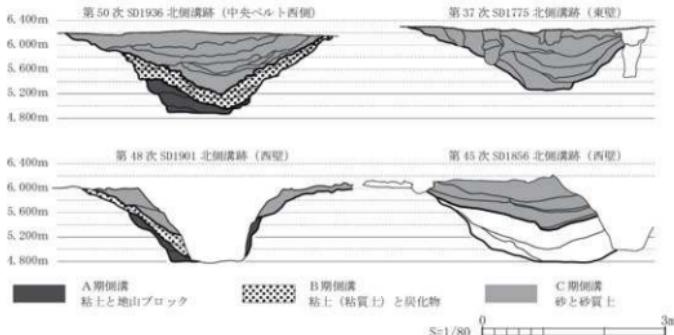
A期側溝：底面は平坦であり、壁もおよそ垂直に立ち上がっている。埋土は地山ブロックが多量に混入する粘土である。

B期側溝：底面は丸く窪んでおり、壁は非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は炭化物が多量に混入する粘土または粘質土である。

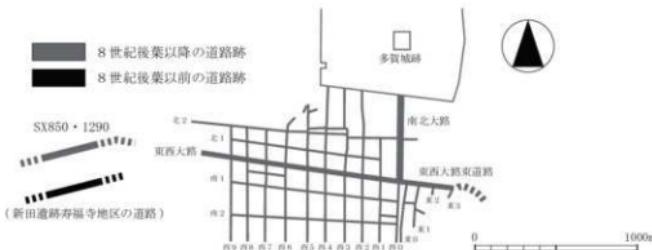
C期側溝：底面は丸く窪んでおり、壁は非常に緩やかに立ち上がっている。埋土は砂と砂質土が互層状に堆積している。

これを踏まえて、同じ北側溝であり、1時期として報告している第37次調査区SD1775と第45次調査区SD1856を改めて整理し、今回の調査成果と比較したものが第18図である。溝跡断面の形状や埋土の状況、底面の標高値などからみると、SD1775とSD1856上位の砂層がC期、SD1856下位の粘土層がA・B期に対応すると推測できる。

さて、9世紀以降の多賀城南面においては、東山道の延長である幅9～14.5mの東西大路と幅23.5～25.11mの南北大路を基準に、東西14条、南北4条の道路からなる方格地割りが段階的に整備されていったと考えられている<sup>(註1)</sup>。基準となる大路の方向は、東西大路が多賀城外郭南辺築地と、南北大路が政府中



第18図 各調査区の東西道路北側溝の断面比較



第19図 多賀城南面の方格地割りと新田寿福寺地区の道路跡模式図

註1：鈴木孝行「多賀城外の方格地割り」『第32回古代城柵官衙遺跡検討会—資料集—』2006

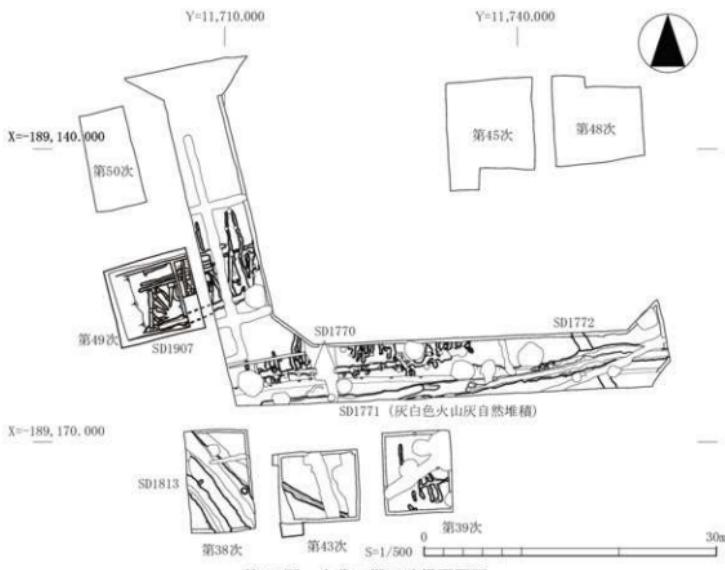
軸線と同様な傾きであり、建設時期は出土遺物より8世紀中葉を過らないものと考えられる（註1）。

本遺跡においては、第5・6・8・11次調査区でSX850東西道路、第8・11次調査でSX1290東西道路を発見しており、年代はSX1290が9～10世紀前葉頃、SX850はそれよりも古いと考えている。これらは東で僅かに北に傾いており、南に傾く東西大路とは方向が異なるものの、側溝心々間で12.5～19mと大規模な直線道路であることや機能していた年代が一致することから、自然堤防上に造られた一連の道路跡と捉えられる。

一方、第37・45・48～50調査区で確認した東西道路跡については、SX850・1290の南120～130mに位置している。側溝心々間で13.2～16.9mと規模が大きく直線的に延びていること、方向が東で北に傾くなどSX850・1290との共通性が指摘できる。8世紀後半頃には埋没していたと考えられることから、現在多賀城南面で確認されている東西大路の年代を過る可能性が極めて高く、方格地割りが施行される以前の東山道であると推測される。出土遺物が少ないため上限については不明であるが、これまで確認することのできなかった8世紀後半以前の官道のあり方を知る手がかりとなろう。

#### 〔古代Ⅱ期〕

第49次調査区Ⅲ層上面で小規模な溝跡群を発見した。これらは東側に隣接する第37次調査でも検出しており、東西方向の溝跡については一連と捉えられるものも認められる（第20図）。Ⅲ層から土師器壺B類が出土していることから、8世紀後葉以降の年代が求められる。



第20図 古代Ⅱ期の遺構配置図

註1：近年、南北大路については建設時期を8世紀中葉頃まで過らせる見解も示されている（宮城県教育委員会「市川橋遺跡」宮城県文化財報告書第184集 2001、宮城県多賀城跡調査研究所「第80次調査」「宮城県多賀城跡調査研究所年報2008」2009）

### ③ 中世

d層との関係より、12～14世紀頃の遺構を中世Ⅰ期、15・16世紀頃の遺構を中世Ⅱ期とする。調査区ごとの遺構の変遷は、第21図のとおりである。

#### 〔中世Ⅰ期〕

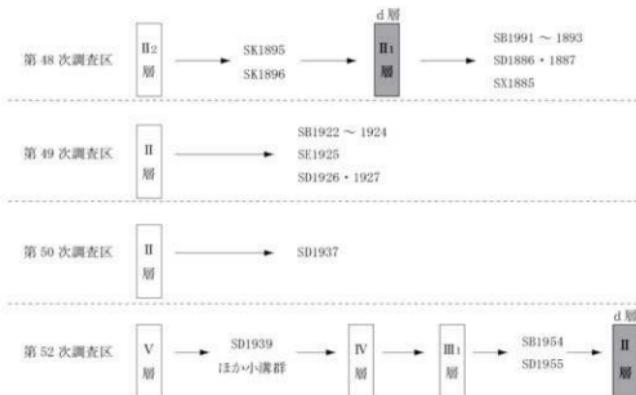
d層下層で検出した遺構であり、第48次調査区SK1895・1896、第52次調査区SB1954、SD1955・1939～1952がある。このうち、SK1896からロクロ調整のかわらけ、SB1954、SD1955の検出面であるⅢ1層から青磁碗、SD1955から無釉陶器擂鉢が出土している。

かわらけは、口径8.8cm、底径5.3cm、器高2.4cmの小型のものである。体部は内面が緩やかに内擱しながら立ち上がるが、外面はおよそ直立気味である。また、外面では底部から体部に移行する部分に僅かな段が認められる。これと類似するかわらけは、14世紀中葉頃から後半の年代が示されている仙台市南小泉遺跡SD018a層出土遺物に認められることから<sup>(註1)</sup>、SK1896もおよそこの頃のものと捉えることができる。

青磁杯は、胎土が薄く灰白色であり、釉は淡い緑色を呈している。体部外面に鷺蓮弁が陽刻されており、大宰府分類<sup>(註2)</sup>で龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2Cに分類しているものと類似している。碗Ⅲ類は13世紀中頃から14世紀初頭頃の標識とされていることから、Ⅲ1層の形成もそれ以降であると考えられる。

無釉陶器擂鉢は体部下半から底部の破片である。底部付近が直立気味に立ちあがり、体部下半で屈曲し直線的に外傾している。内外面ともにナデ調整であり、ケズリなどの痕跡は認められない。このような擂鉢は、14世紀初頭頃とされている白石市一本杉窯跡群SR02窯跡出土遺物<sup>(註3)</sup>に類似するものがあることから、SD1955についてもそれ以降の年代が推測される。このことは、SD1955の検出面であるⅢ1層が13世紀中葉から14世紀初頭以降としたこととも矛盾しない。

一方、SD1939～1952はd層下層にあるV1・2層上面で検出した遺構である。出土遺物が少なく詳細



第21図 遺構の重複関係(中世Ⅰ・Ⅱ期)

註1：仙台市教育委員会「南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集 1990

註2：太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編」太宰府市の文化財第49集 2000

註3：宮城県教育委員会「一本杉窯跡群」宮城県文化財調査報告書第172集 1996

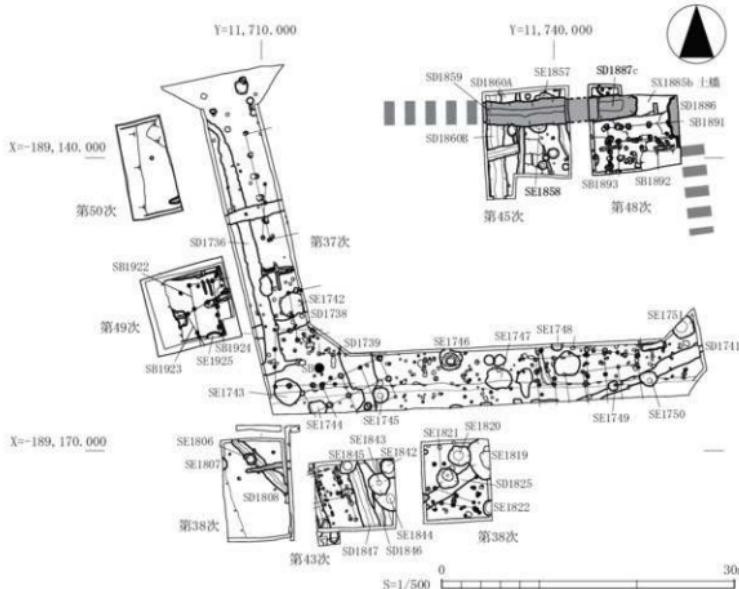
な年代は明らかでないが、溝跡と一連の埋土と捉えているIV層から無釉陶器壺が出土していることから、これら溝跡も中世の範疇で捉えておきたい。

(中世Ⅱ期)

第48次調査区 S B 1891～1893掘立柱建物跡、S D 1886南北溝跡、1887東西溝跡、S X 1885土橋跡等がある。溝跡や土橋埋土から東海系の無釉陶器擂鉢・甕、在地の無釉陶器甕・擂鉢が出土しているが、当該期の年代を決定するものは認められない。

発見した遺構のうち、S D 1886・1887、S X 1885は一連の区画施設を構成するものである。S D 1887では3時期（a → c期）、S X 1885で2時期（a → b期）の変遷が認められ、両者の重複関係より区画全体としては3時期（A → C期）の変遷があると捉えている（第23図）。これらは新しくなるにしたがい、西に移動していることが明らかである。S D 1886についてはS X 1885 aよりも新しいことから、C期と捉えることができる。なお、S D 1887は位置関係から西側に隣接する第45次調査区 S D 1859と同一の区画溝である。S D 1859は1時期として報告している溝跡であるが、断面の形状や埋土の状況、底面の標高値から判断して、最下層の黒色粘土と灰色砂の互層がS D 1887 a・b期、上位の黒色粘土や黒褐色砂質土がS D 1887 c期に対応すると推測される（第24図）。S D 1886は位置関係から第3次調査区 S D 269と一連の可能性もあるが、今回の調査でそれを明らかにすることはできなかった。

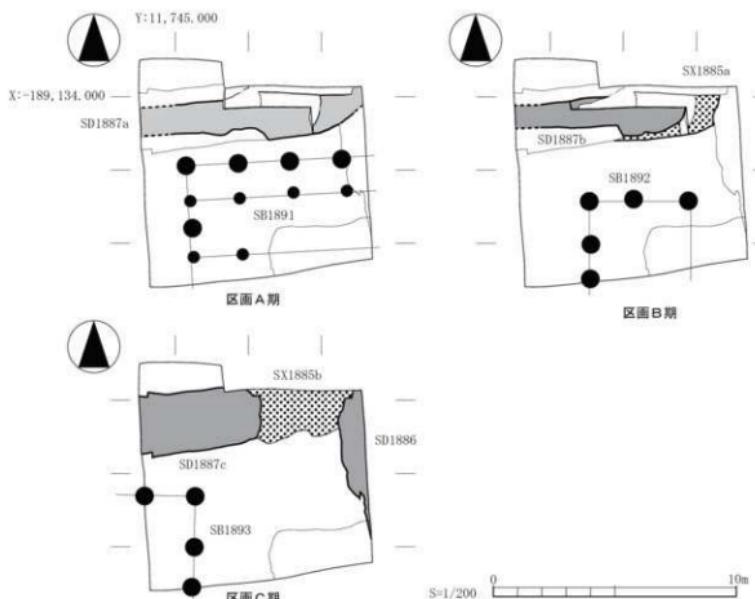
S B 1891～1893は、直接的な新旧関係は確認されなかったものの、位置関係からそれぞれ別時期の建物跡であると考えられる。このうち、S B 1891はS D 1886と重複しそれよりも古いことから、B期以前で



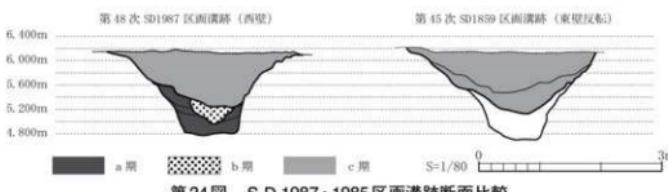
第22図 中世の遺構配置図

あることが明らかである。一方、SB1893はSB1892の西側に位置しており、SB1892についても東側柱列に限ってみればSB1891のそれよりも西に移動していると理解できる。新しくなるにしたがい区画が西に移動している状況を考慮すれば、SB1891(A期)→SB1892(B期)→SB1893(C期)の変遷が推測される(第23図)。

ところで、中世Ⅱ期は寿福寺地区において南北310m、東西200m以上の範囲にわたり、大溝を巡らせた屋敷群が機能した時期のものである。大溝の内部は幅3m前後の溝跡により複数に区画されており、区画内ではそれぞれ主屋、副屋、井戸などが発見されている。各区画内で確認される遺構の構成要素は概ね一致しており機能的な分化は確認されていないことから、「在官官人の居館群」と推測されている(註1)。今



第23図 第48次調査区Ⅰ層上面遺構変遷模式図



第24図 S D 1987・1985区画溝跡断面比較

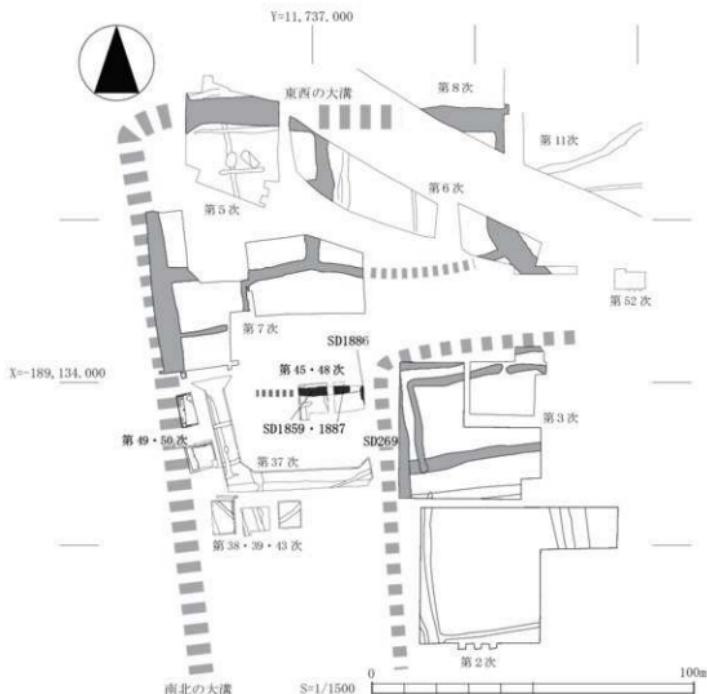
註1：齊藤利男「多賀国府の都市プラン」「よみがえる中世7」1992

回の調査区はこの大溝を巡らせた屋敷群の中央部西側の区画にあたり、区画の北東隅部分を確認したことになる（第25図）。西の区画溝が南北の大溝、北の区画溝がSD 1859・1887、東の区画溝がSD 1886であり、SD 1887が新しくなるにしたがい西に移動している様子は西辺の南北大溝の変遷とも一致している。SD 1859を区画溝とすることについては、西側延長部が第37次調査区で認められないことから疑問を残していた。しかし、今回の調査で、これと一連であるSD 1887が、SD 1886やSX 1885とともに屋敷北東側の出入り口を構成していることから、SD 1859・1887についても屋敷北側の区画溝と捉えることが妥当であると判断した。南辺は未確認である。今回の調査により推定される当該区画の範囲は、東西約60m、南北50m以上である。

#### 【その他中世の遺構】

第49次調査区II層上面検出遺構、第52次V1層上面検出のSK 1953がある。

第49次調査区ではSB 1922～1924、SE 1925、SD 1926～1931、SK 1932がある。いずれも14世紀後半頃に堆積したd層との関係が不明なものである。出土遺物がほとんどないため、中世I・II期のどの段階に位置するか明らかにすることはできなかった。



第25図 寿福寺地区の区画溝模式図(15・16世紀頃)

第52次調査区S K 1953は、d層下層で検出したものであるが、出土遺物がないため中世の範疇で収まるものか、古代にまで遡るものかを判断することができなかった。

#### 4まとめ

- (1) 山王寿福寺地区において、古墳時代前期、奈良・平安時代、中世の遺構を発見した。
- (2) 第49・50次調査では、古墳時代前期の遺構検出面が2面あることが明らかとなった。
- (3) 第48～50次調査で確認した東西道路は奈良時代の東山道の可能性が極めて高く、8世紀後半以前の官道のあり方を知る上で注目すべき遺構である。
- (4) 中世の屋敷跡の一部を確認した。第48次調査区では土橋跡を確認し、当該区北辺の区画溝に3時期の変遷があることを確認した。

#### 【参考文献】

- ・齊藤利男「多賀国府の都市プラン」「よみがえる中世7」1992
- ・鈴木孝行「多賀城外の方格地割」「第32回古代城柵官衙遺跡検討会―資料集―」2006
- ・田中剛と「陸奥国「国府城」の考古学的様相」「鎌倉・室町時代の奥州」2002
- ・辻秀人「東北南部における古墳出現期の土器編年―その2―」『東北学院大学論集 历史学・地理学 第27号』東北学院大学学術研究会 1995
- ・吉田智治「新田遺跡」「平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」宮城県考古学会 2007
- ・石巻市教育委員会「田道町遺跡」石巻市文化財調査報告書第7集 1995
- ・小牛田町教育委員会「山前遺跡」1976
- ・追町教育委員会「佐沼城跡」追町文化財調査報告書第2集 1995
- ・仙台市教育委員会「南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集 1990
- ・多賀城市埋蔵文化財調査センター「新田遺跡(第4・11次調査報告)」多賀城市文化財調査報告書第23集 1990
- ・多賀城市教育委員会「多賀市の文化財―平成20年度発掘調査報告書―」多賀城市文化財調査報告書第95集 2009
- ・染館町教育委員会「維持城跡―平成3年度発掘調査報告書―」染館町文化財調査報告書第5集 1992
- ・宮城県教育委員会「今熊野遺跡」「今熊野遺跡 一本杉遺跡 馬越石塚」宮城県文化財調査報告書第104集 1985
- ・宮城県教育委員会「野田山遺跡」宮城県文化財調査報告書第145集 1992
- ・宮城県教育委員会「一本杉窓跡群」宮城県文化財調査報告書第172集 1996
- ・宮城県教育委員会「市川橋遺跡」宮城県文化財報告書第184集 2001
- ・宮城県多賀城跡調査研究所「第80次調査」「宮城県多賀城跡調査研究所年報2008」2009

写真図版1 (新田遺跡第48次調査)



1 古墳時代の遺構全景(北東より)



2 SK 1897 土壌断面(北より)



1 S X 1900 東西道路跡全景 (北東より)



2 S D 1901 東西道路北側溝跡 (東より)



3 S D 1901 東西道路北側溝跡  
東壁部分断面拡大 (東より)

写真図版3 (新田遺跡第48次調査)



1 中世の遺構全景(北より)



2 S X 1885 土橋跡断面(南より)



1 SK 1895 土壌断面 (北より)



2 SK 1896 土壌断面 (西より)



3 II 2層須恵系土器出土状況  
(西より)

写真図版5 (新田遺跡第48次調査)



1 出土遺物(無釉陶器)



2 出土遺物(無釉陶器)



1 古墳時代の遺構全景(南西より)



2 SD 1903溝跡 土師器甕出土状況

写真図版7 (新田遺跡第49次調査)



1 SX 1905 東西道路跡全景 (南西より)



2 SD 1906 東西道路北側溝跡断面 (北西より)



1 III層上面検出遺構全景 (南より)



2 II層上面検出遺構全景 (南より)

写真図版9 (新田遺跡第50次調査)



1 調査区全景 (北西より)



2 SD 1936 東西道路北側溝跡 (西より)



1 III層上面検出遺構全景(東より)



2 V層上面検出遺構全景(東より)



1 出土遺物(無釉陶器)



2 出土遺物(無釉陶器)

## VI 新田遺跡第51次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、新田字北関合地内における宅地造成に伴う道路拡幅・延長工事を調査原因とする。平成21年5月に申請者より新田遺跡の南端部における道路建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は、幅約3m、長さ約60mの既存道路を、幅約4m、長さ約110mに拡幅・延長するというものである。新田遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、特に中世では溝で区画された屋敷群が発見されている。しかし、これらの遺構は遺跡の北半部に集中し、当該地が位置する南半部についてはこれまでのところ調査例はごくわずかであった。そのため、当該地での遺構の有無の確認と旧地形の状況の把握を目的とした確認調査が必要であることを申請者に対し回答した。これについて、申請者から協力が得られたことから、6月3日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、6月10日に現地調査を実施した。

調査においては、既存上・下水管の埋設位置と既存住宅への出入口の確保を考慮しながら、対象地内に3箇所の調査区（トレンチ）を設定した。はじめに、鉤形に屈曲する道路予定地の北

辺で東西方向に1.5m×7.5mと1.5m×4mの2本を設定して、西側から順に1トレンチと2トレンチとした。ついで、東辺で南北方向に1.5m×6mのものを設定して3トレンチとした。調査は、重機によって遺構の有無を確認しながら堆積土を掘り下げた。各トレンチとも現地盤から深さ約1mまでは、現代の盛土の下に近似した土色の粘質土と砂質土が交互に堆積し、これらの厚さが0.5～0.6mになることがわかった。統いて、1トレンチ西端と3トレンチ北端で深掘りを行い、前者では砂質土、後者では粘質土の堆積が約2m下まで続き、その下は粗い砂層になることを確認した。この後、各トレンチの掘り下げ状況の写真撮影、土層堆積状況の柱状図作成、トレンチ配置図作成などを行い、最後に埋め戻しを行って調査を終了した。

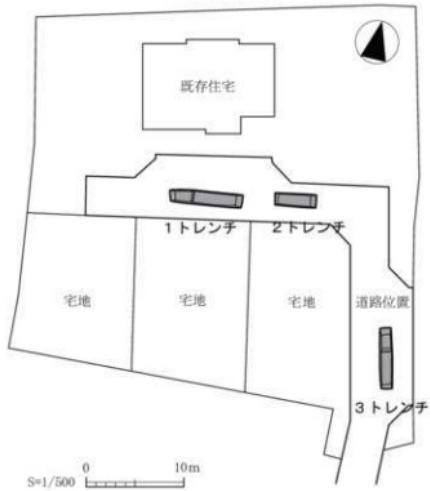
### 2 調査成果

- （1） 調査の結果、遺構・遺物は発見されなかった。
- （2） 調査区における土層の堆積状況をみると、3箇所のトレンチとも厚さ約50cmの現代の盛土の下に、



第1図 調査区位置図

グライ化した粘質土、砂質土、砂が幾層にも重なって厚く堆積することから、調査区周辺は湿地もしくは河川であったと推定される。



第2図 調査区(トレンチ)配置図



1トレンチ(東より)



2トレンチ(南より)



3トレンチ北側(西より)

## VII 新田遺跡第53・54次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王字北寿福寺地内の同一地割内における2棟の個人住宅建設に伴うものである。南側を第53次調査、北側を第54次調査とした。前者が平成21年8月5日に、後者が平成21年9月1日にそれぞれの地権者より住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、前者が基礎工事の際に建物範囲全面で最深57cmの掘削を行い、一方後者は直径60cm、長さ6mの柱状改良杭を15本打ち込むことから、いずれも地下の遺構への影響が懸念された。このため、盛土や工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行った。しかし、両者とも対象地の現況や地盤の強度等から考慮して現計画での実施が最も望ましいとの理由により、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。平成21年9月17日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を両者から受け、9月25日から同時に現地調査を開始した。はじめに重機により現代の盛土等の除去を並行して行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。

統いて第53次調査区の遺構検出作業に着手

し、堆積土のⅢ層上面においてS B 1956建物跡や比較的大きいS D 1959溝跡等を検出した。これらの遺構については、順次埋土の掘り下げ、写真撮影、実測図作成等の一連の作業を行い、10月14日までに終了した。なお、S D 1959溝跡から無釉陶器が出土したことなどからⅢ層上面検出の遺構は中世及びそれ以降のものと判断した。これと並行して、10月1日から第54次調査区においても遺構検出作業を開始した。その結果、第53次調査区から続くS D 1959溝跡を検出し、さらに調査区内において西側に屈曲することも確認した。その後、複数の変遷が認められたS D 1959溝跡の掘り下げを行ふとともに、調査区西半部を中心に遺構検出作業を継続した結果、堆積土のⅣ層とⅤ層の上面で畦畔状の高まりを確認した。また、同様の高まりを第53次調査区でもⅣ層上面で検出した。これらのことから、水田跡の存在の可能性を考えられたため、プラント・オバール分析を行うことにし、両調査区のⅢ・Ⅳ・Ⅴ層から土壤サンプルを採取した。第53次調査区においては、調査区東側のⅥ層上面で検出したS D 1963溝跡等の掘り下げをもって遺構の調査を終了し、10月20日に重機による埋め戻しを行った。第54次調査区では、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の掘り下げを



第1図 調査区位置図

経て、最後にVI層上面で検出したSK 1964土壤の掘り下げを行って遺構の調査を終了した。そして、11月17日に行った重機による埋め戻しをもって、すべての調査を完了した。

## 2 調査成果

### (1) 層序

今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである。

I 層：現代の盛土で、厚さは40～60cmである。

II 1層：暗灰黄色土で、厚さは10～15cmである。

II 2層：暗灰黄色土で、厚さは10～20cmである。黄褐色砂質土を斑状に含んでいる。

III 層：黄灰色土で、厚さは10～15cmである。第53次・第54次調査区ともSD 1959溝跡の西側に分布する。

黄褐色砂質土を斑状に若干含んでいる。上面は中世以降の遺構検出面である。

IV 層：黒褐色粘質土で、厚さは約10cmである。III層と同様にSD 1959溝跡の西側に分布するが、第54次調査区の北側では認められない。黄褐色粘質土を斑状に若干含んでいる。

V 1層：黒褐色粘質土で、厚さは10cm以上である。第53次調査区のSD 1959溝跡の西側に分布するが、調査区西壁付近では薄くなり、いたん途切れる箇所がみられる。黄褐色粘質土を斑状に含んでいる。

V 2層：黒褐色粘質土で、厚さは約20cmである。第54次調査区の南西部に分布する。黒色粘質土、黄褐色粘質土を斑状及びブロック状に含んでいる。また、灰白色火山灰を小ブロック状に若干含んでいる。

VI 層：黄褐色粘質土で、古代以降の遺構検出面である。

### (2) 発見遺構と遺物

#### S B 1956建物跡(第3・5図)

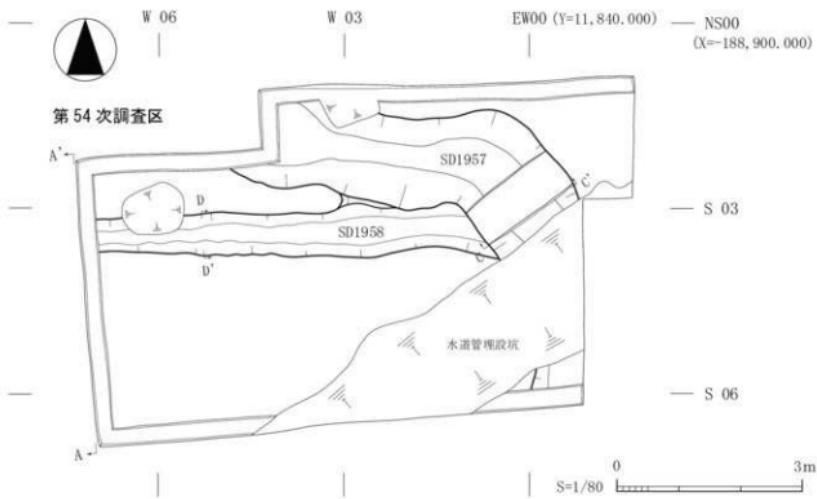
第53次調査区南西部のIII層上面で検出した建物跡である。調査区西壁際で南北に並ぶ2間分の柱穴から推定したもので、大部分は調査区外にかかる。方向は、北で約3度30分東に偏している。柱間は、北から1.65m、1.44mである。柱穴の掘り方平面形は、ほぼ円形である。規模は直径20～35cmで、検出面からの深さは15～25cmである。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。埋土は、柱痕跡が黄褐色土を斑状に若干含む黒褐色土、掘り方が黄褐色土と黒褐色土を斑状に含む黄灰色土である。遺物は出土していない。

#### S D 1957溝跡(第2・6図)

第54次調査区東半部のIII層上面で検出した溝跡である。後述するSD 1959溝跡と同位置にあり、また同様の形態をとる。SD 1958・1959溝跡と重複し、これらより新しい。規模は、上幅1.4～1.7m、下幅0.4～0.8m、深さは検出面から約0.3mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。上層は暗オリーブ灰色砂、下層は炭化物を若干含むオリーブ灰色砂質土であり、いずれも全体的にグライ化している。遺物は、平瓦の破片が1点出土している。

#### S D 1958溝跡(第2・4・6図)

第54次調査区北半部のIII層上面で検出した東西方向の溝跡である。重複関係からSD 1957溝跡より古く、SD 1959溝跡より新しい。確認できた長さは約6.6mである。方向は、東で約2度北に偏している。規模は、



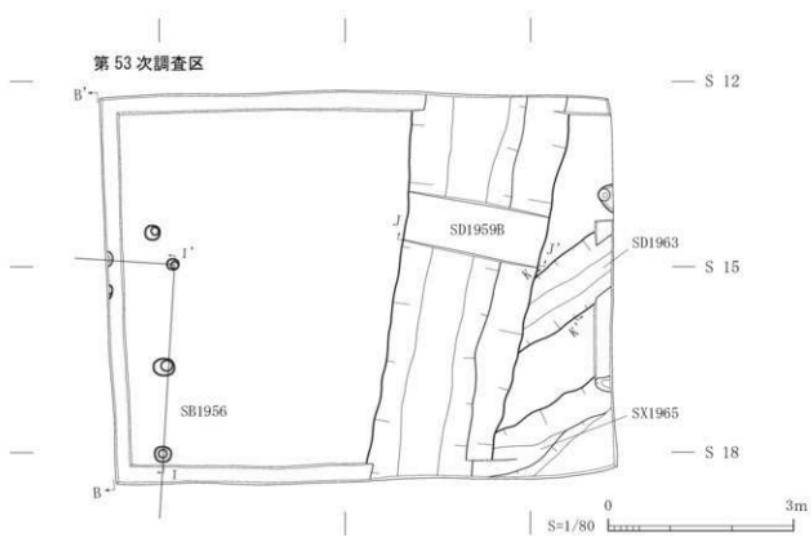
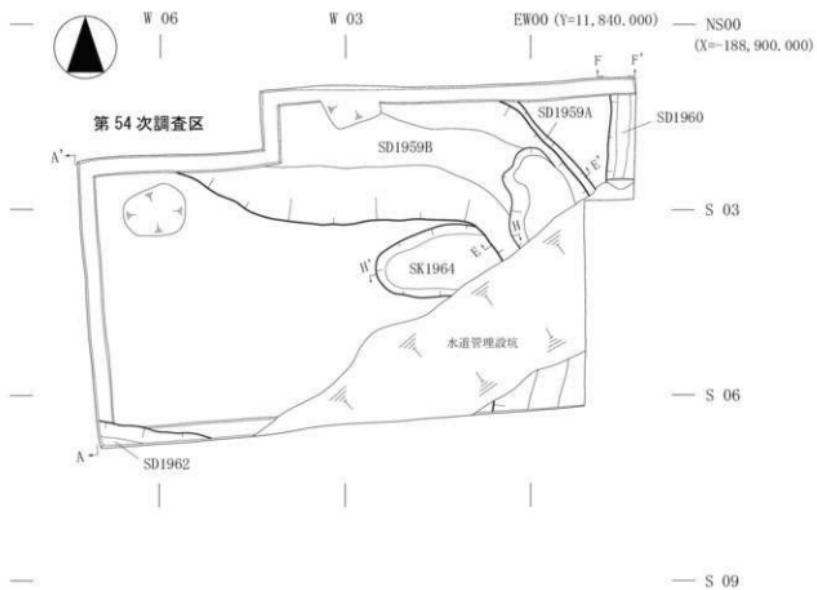
第2図 Ⅲ層上面検出遺構

上幅50～88cm、下幅20～46cmである。深さは検出面からは約10cmであるが、調査区西壁の断面観察では約30cmを測る。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は基本的に2層に分けられるが、上層と下層の境に炭化物を多く含む薄い灰色土層がみられる箇所がある。上層は黄灰色土、下層は炭化物を含む黄灰色土である。また、東側では重複するSD 1957溝跡と同様にグライ化している。遺物は、土師器壺の破片が若干出土している。

#### S D 1959溝跡（第3・5・6図）

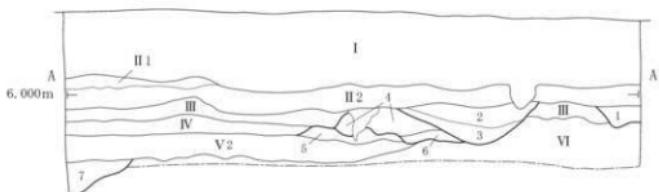
両調査区の東半部のⅢ層上面で検出した溝跡である。第53次調査区では南北方向に直線的に延びるが、第54次調査区で西側に屈曲する。さらに、屈曲部の西側からは幅を徐々に増し、北側に向かってやや湾曲する様相をみせながら調査区外に至る。重複関係からSD 1957・1958溝跡より古く、SD 1963溝跡、SK 1964土壤、SX 1965より新しい。また、2時期の変遷（A→B期）が確認できた。

**SD 1959 A溝跡：**後続するB期と同位置にあるため、検出面での平面プランでは第54次調査区における屈曲部で東壁ラインを確認したにすぎない。これは、B期の東壁ラインに対し8～14cm外側に位置する。規模は、下幅が第53次調査区（以下前者とする）では0.45～0.6m、第54次調査区（以下後者とする）では南側が0.5m、幅が広くなる北側が1.1m以上である。検出面からの深さは前者で約0.8m、後者で約0.7mである。なお、底面の比高については、後者の屈曲部では前者の中央部に比べわずかに低い程度であるが、幅が広くなる北端部では約15cm低くなる。底面の形態は前者が丸みをもつたに対し、後者では平坦に近い。壁はいずれも湾曲気味に立ち上がる。また、後者では屈曲部の底面で深さ15～20cmの不正形の落ち込みがみられる。埋土はいずれも1層のみの確認で、前者がにぶい黄色と黒褐色の粘質土を斑状及びブロック状に多く含む黄灰色粘質土、後者が黄灰色砂質土を斑状及びブロック状に含む黒褐色粘質土である。なお、

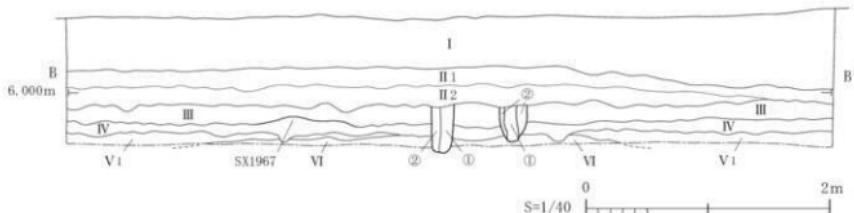


第3図 III層及びVI層上面検出遺構

### 第54次調査区



### 第53次調査区



#### 土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考		
SD1957埋土					SD1961埋土		
1	暗灰黄色土	黒褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。	6	黄灰色土	粘性ややあり。黒褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。		
SD1958埋土					SD1962埋土		
2	黄灰色土	酸化鉄斑を含む。	7	黄灰色土	粘性ややあり。黒褐色砂質土を斑状に若干含む。		
3	黄灰色土	色調は上層よりやや濃い。酸化鉄斑を含む。また炭化物を含む。	ピット埋土				
SX1966盛土			①	黒褐色土	柱痕跡。炭化物を多く含む。黒褐色砂質土を斑状に若干含む。		
4	暗灰黄色土	黄灰色土を斑状及びブロック状に多く含む。	②	黄灰色土	掘り方。黄褐色砂質土を斑状に含む。		
SX1968盛土							
5	黒褐色土	黒色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含む。					

第4図 第53・54次調査区断面図

後者の屈曲部から西側の底面付近には、植物遺存体を含む黒褐色粘土と黄灰色砂が互層に堆積している。遺物は、土器部壺の破片が若干出土している。

**S D 1959 B溝跡**: 第54次調査区の屈曲部から第53次調査区の南端まで約17mにわたって確認した。方向は第53次調査区でみると、北で約9度東に偏している。規模は、上幅が第53次調査区(以下前者とする)で2.0~2.6m、第54次調査区(以下後者とする)の屈曲部で約1.8m、幅が広くなる北側で2.3m以上である。下幅は前者で0.7~0.9mである。後者の屈曲部で約0.8m、幅が広くなる北側で1.2m以上である。検出面からの深さは前者で約0.5m、後者で約0.6mである。なお、底面の比高については、後者の屈曲部では前

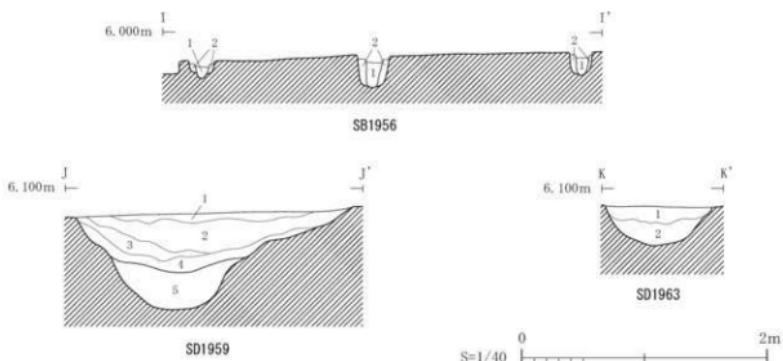
者の中央部に比べ約20cm低くなる。底面の形態はいずれも平坦に近く、壁は湾曲気味に立ち上がる。前者では東壁中頃で緩やかな段を有する。また、後者では屈曲部の底面でA期と同様に不正形の落ち込みがみられる。深さは約10cmである。埋土は、前者で4層、後者で3層に分けられるが、いずれも黄灰色土が主体になっている。また、前者では底面近くに砂質土が堆積している。遺物は、土師器甕、須恵器瓶、須恵系土器杯、無軸陶器甕が出土しているが、いずれも破片である。

#### S D 1960溝跡(第3・6図)

第54次調査区北東隅のVI層上面で検出した南北方向の溝跡である。確認できた長さは約15mである。方向は、北で約3度東に偏している。東壁ラインが調査区外にわずかにかかるため上幅の詳細は不明であるが、約50cmと推定される。下幅は16~20cmである。深さは調査区北壁でみると約20cmである。底面は丸みをもち、壁は湾曲気味に立ち上がる。埋土は、にぶい黄褐色砂質土を斑状に含む黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

#### S D 1962溝跡(第3・4図)

第54次調査区南西隅のVI層上面で検出した東西方向の溝跡で、堆積土のV層に覆われる。調査区南西隅にわずかにかかる程度の検出であり、確認できた長さは北壁ラインで約1.9mである。方向は、東で約8度南に偏している。幅は不明であるが、深さは調査区西壁でみると25cm以上である。壁は比較的緩やかに立



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SB1956埋土			3	黄灰色 砂質土	B期。
1 黒褐色土	柱痕跡。黄褐色土を斑状に若干含む。		4	暗灰黄色 砂質土	B期。
2 黄灰色土	掘り方。黄褐色土と黒褐色土を斑状に含む。		5	黄灰色 粘質土	A期。にぶい黄色粘質土と黒褐色粘質土を斑状及びブロック状に多く含む。
SD1959埋土			SD1963埋土		
1 暗灰黄色土	B期。黄褐色砂質土を斑状に含む。		1	暗褐色土	にぶい黄褐色砂質土を斑状に含む。
2 黄灰色土	B期。黄褐色砂質土を斑状及び小ブロック状に若干含む。		2	褐灰色土	にぶい黄褐色砂質土を斑状及び小ブロック状に含む。

第5図 SB1956・SD1959・SD1963断面図(第53次調査区)

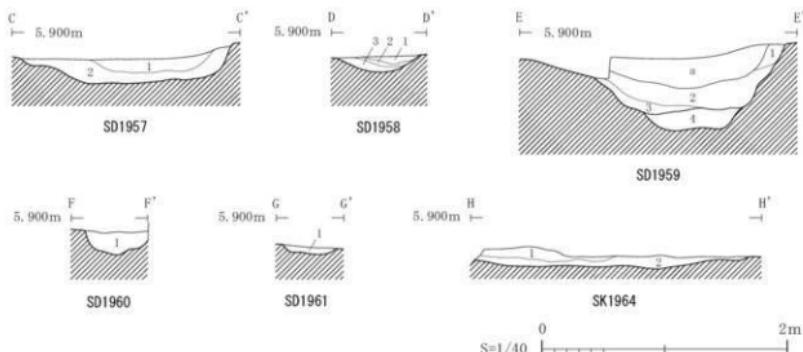
ち上がる。埋土は、黄褐色砂質土を斑状に若干含む黄灰色土の単層である。遺物は出土していない。

#### S D 1963溝跡 (第3・5図)

第53次調査区東側のVI層上面で検出した東西方向に斜行する溝跡である。S D 1959溝跡と重複し、これより古い。確認できた長さは約1.9mである。方向は、東で約33度北に偏している。規模は、上幅90~96cm、下幅24~30cm、深さは検出面から約30cmである。底面は丸みをもち、壁は湾曲気味に立ち上がる。埋土は、暗褐色土と褐灰色土の2層に分けられ、いずれもにぶい黄褐色砂質土を含んでいる。遺物は、土師器甕、須恵器甕の破片が出土している。なお、土師器甕には底部に回転糸切りの切り離し痕がみられるものが1点出土している。

#### S K 1964土壤 (第3・6図)

第54次調査区中央部のVI層上面で検出した土壤で、堆積土のIV層に覆われる。S D 1959溝跡と重複し、これより古い。東側が他の遺構等に壊されているため形態は不明であるが、西側残存部でみると東西に細長い楕円形状を呈する。規模は、東西2.2m以上、南北1.2m以上、深さは検出面から約0.1mである。底面



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD1957埋土			2	黄灰色土	B期。同色の砂質土を混入。炭化物を若干含む。
1 暗オリーブ 灰色砂 オリーブ灰 色砂質土	酸化鉄斑を含む。全体的にグライ化。		3	黄灰色 粘質土	B期。同色の砂質土を混入。
2	酸化鉄斑を含む。全体的にグライ化。 炭化物を含む。		4	黒褐色 粘質土	A期。 黄灰色砂質土を斑状及びブロック状に若干含む。
SD1958埋土			SD1960埋土		
1	黄灰色土	酸化鉄斑を含む。	1	黒褐色土	にぶい黄褐色砂質土を斑状に含む。
2	灰色土	酸化鉄斑を含む。炭化物を多く含む。	SD1961埋土		
3	黄灰色土	酸化鉄斑を含む。	1	黄灰色土	粘性ややあり。黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含む。
SD1959埋土			SK1964埋土		
1	暗灰黄土	SD1958埋土	1	黒褐色 砂質土	黄灰色砂を混入。遺物片を含む。
1	B期。黄褐色土を斑状に若干含む。		2	黄灰色 砂質土	黄褐色砂を混入。灰白色火山灰を斑状に若干含む。

第6図 SD1957 ~ SD1961 · SK1964 断面図 (第54次調査区)

は平坦に近く、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。上層は黄灰色砂を混入する黒褐色砂質土である。下層は黄褐色砂を混入する黄灰色砂質土で、灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器瓶が出土している。

#### S X 1965(第3図)

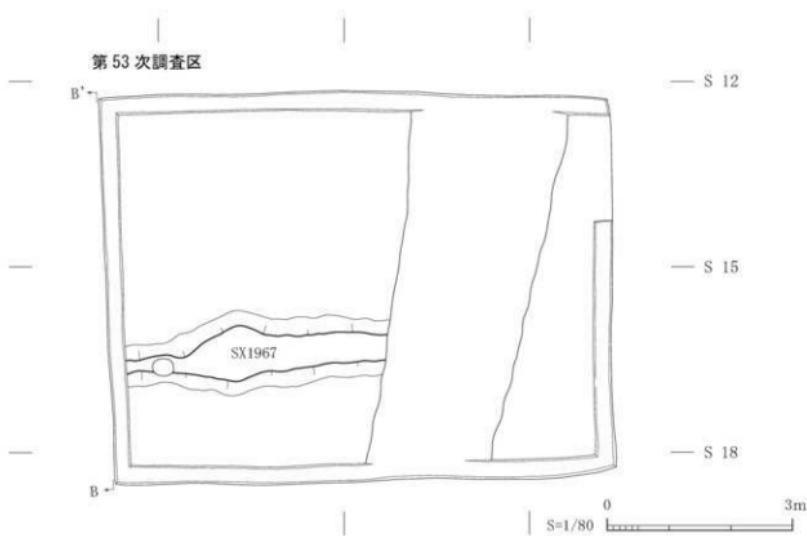
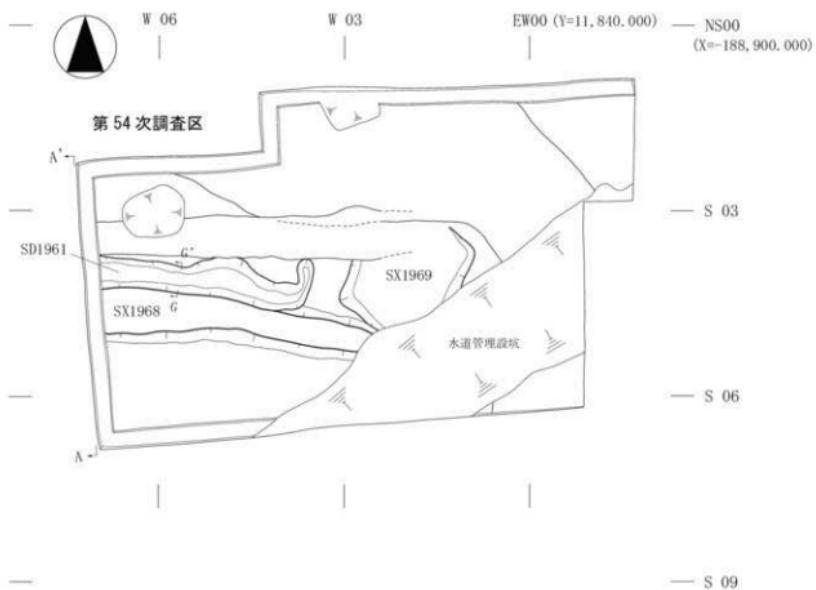
第53次調査区南東隅のVI層上面で検出した溝状を呈する落ち込みである。大部分が調査区外にかかるため規模等は不明である。S D 1959溝跡と重複し、これより古い。方向は、比較的直線的な北端ラインでみると、東で約28度北に偏している。深さは調査区東壁でみると約20cmである。底面には凹凸がみられ、壁の立ち上がりも一様ではない。埋土は3層に分けられるが、黄褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含む黄灰色粘質土が主体を占める。遺物は、須恵系土器杯、平瓦の破片が出土している。

#### Ⅲ層水田跡(第4図)

第53次調査区で水田耕作土(Ⅲ層)、第54次調査区で水田耕作土(Ⅲ層)と畦畔(S X 1966)を検出した。なお、耕作土の分布はS D 1959溝跡の西側に限られる。耕作土は、黄褐色砂質土を斑状に若干含む黄灰色土で、厚さは10~15cmである。S X 1966は、第54次調査区中央部を東西方向に延びる畦畔で、後述するS D 1961溝跡(IV層水田跡)とほぼ同じ位置に重複する。このほか、北端部が方向を同じくするS D 1958溝跡と重複し、これによって壊されている。確認できた長さは、約3.5mである。方向は、東で約1度南に偏している。上幅は50cm以上で、高さは調査区西壁でみると約20cmである。盛土は暗紅黃色土からなり、黄灰色土を斑状及びブロック状に多く含んでいる。また、水田跡底面の標高は第53次調査区南側が5.75m、第54次調査区北側が5.80mで、南側が若干低くなっている。なお、第53次調査区南側と第54次調査区中央部の2箇所で採取したⅢ層を分析した結果、両調査区とも高い密度でプラント・オバールが検出された(別稿参照)。

#### Ⅳ層水田跡(第4・6・7図)

第53次調査区で水田耕作土(IV層)と畦畔(S X 1967)、第54次調査区で水田耕作土(IV層)と畦畔(S X 1968)、溝跡(S D 1961溝跡)を検出した。なお、耕作土の分布はS D 1959溝跡の西側に限られ、さらに第54調査区ではS D 1961溝跡の北側では認められない。耕作土は、黄褐色粘質土を斑状に若干含む黒褐色粘質土で、厚さは約10cmである。S X 1967は、第53次調査区南側を東西方向に延びる畦畔で、東側がS D 1959溝跡によって壊されている。確認できた長さは、約4.6mである。方向は、東で約5度北に偏している。上幅は50~80cmで、高さは調査区西壁でみると約10cmである。耕作土を盛り上げて形作っている。S X 1968は、第54次調査区中央部を東西方向に延びる畦畔で、東側が後世の搅乱坑によって壊されている。確認できた長さは、約4.4mである。やや湾曲しながら延びるため比較的直線的な東側で方向をみると、東で約7度南に偏している。上幅は45~70cmで、高さは調査区西壁でみると8cmである。盛土は黒褐色土からなり、黒色土と黄褐色土を斑状及びブロック状に多く含んでいる。S D 1961溝跡は、S X 1968の北側を境を接するようにして同方向に延びる溝跡である。この位置関係やS X 1966(Ⅲ層水田跡)の下層で検出されたことから、Ⅳ層水田跡に伴うものと考えられる。確認できた長さは約3.4mで、東端で北側にわずかに屈曲する。規模は、上幅45~70cm、下幅20~30cm、深さは調査区西壁でみると8cmである。底面はやや平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は黄灰色土の単層で、黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。S X 1967とS X 1968によって水田跡の1つの区画が形成されるが、その規模は南北約11mである。また、水田跡底面の標高は第53次調査区南側が5.65m、第54次調査区が5.70mで、南側が若干低くなっている。



第7図 N層水田跡

このほか、S D 1961溝跡の東側で周縁より一段低くなる方形状の箇所（S X 1969）を確認した。埋土は、IV層と同じとみることができる。北側と南側が壊されているため、詳細な形態や規模は不明であるが、東西約1.8m、南北2.1m以上のやや細長い方形を呈し、検出面からの深さは約10cmである。埋土の状況やS X 1968とS D 1961溝跡との位置関係から、IV層水田跡に関連する可能性が考えられる。なお、両調査区で採取したIV層を分析した結果、双方ともプラント・オバールが検出されたものの、その密度はやや低い値であった（別稿参照）。しかし、畦畔を伴うことや上層（Ⅲ層）と下層（V層）において高い密度でプラント・オバールが検出されたことより、IV層も水田耕作土と判断した。

#### V層水田跡（第4図）

両調査区とも水田耕作土（V1層とV2層）を検出した。なお、V層に伴う畦畔は検出されなかった。

V1層（以下前者とする）は第53次調査区のS D 1959溝跡の西側に分布する。一方、V2層（以下後者とする）は第54次調査区の南西部に分布し、北端ラインはS X 1968（IV層水田跡）のそれとほぼ一致する。いずれも黒褐色粘質土で、前者が黄褐色粘質土を斑状に含むのに対し、後者は黒色粘質土と黄褐色粘質土を斑状及びブロック状に含んでいる。厚さは前者が10cm以上、後者が約20cmである。また、水田跡底面の標高は第54次調査区で5.50mである。なお、両調査区で採取したV層（V1層とV2層）を分析した結果、双方ともプラント・オバールが比較的高い密度で検出されたが、V2層の方がやや高い値を示した（別稿参照）。

### 3 まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡1棟、溝跡6条、土壙1基、水田跡等を発見した。いずれの遺構も出土遺物が少なく、またすべて破片であるため図示できるものはない。このうち、Ⅲ層上面で検出したS D 1959溝跡については、中世の無軸陶器窯が出土している。しかし、体部の破片であるため詳細な年代は導き出せない。また、これ以外に中世の遺物が出土していないことから、S D 1959溝跡の年代は大きく中世というだけにとどまる。本調査区周辺では12世紀後半から16世紀にかけての屋敷跡が多数発見されているが、これらは掘立柱建物や井戸等から構成される屋敷地を大小の溝で方形に囲むものである。したがって、本調査区発見のS B 1956建物跡とS D 1959溝跡も、形態や配置状況から同様の遺構と推測される。なお、屋敷地を囲む溝跡のうち規模の大きなものは、15・16世紀に集中する傾向がみられる。このほかの遺構の年代については、Ⅲ層上面検出のS D 1957・1958溝跡は、S D 1959溝跡より新しかった中世以降のものといえる。下限は不明である。VI層上面検出の遺構は、S D 1962溝跡が灰白色火山灰を含むV層に覆われているため下限は10世紀前葉と考えられる。上限は遺物が出土していないため不明である。S D 1963溝跡とS K 1964土壙は、上限がロクロ使用の土師器が出土していることから8世紀後葉。下限は前者が中世、後者は不明である。また水田跡の年代については、下層のV層中に灰白色火山灰が含まれることから上限は10世紀前葉、上層のⅢ層上面から中世の遺構が掘り込まれていることから下限は中世と考えられる。



調査区全景(北東より)



SB1956建物跡(東より)



SD1959B溝跡(西より)



SD1959B溝跡(北より)



SD1959A溝跡(南より)



SD1959溝跡堆積状況(南より)



SD1963溝跡(南西より)



三層水田跡(東より)

写真図版1(第53次調査)



SD1957・1958溝跡(西より)



SD1959B 溝跡(西より)



SD1959A 溝跡(西より)



SD1959A 溝跡(東より)



SD1960 溝跡(南より)



SK1964 土壌(東より)



IV層水田跡(東より)



V層水田跡(東より)

写真図版2(第54次調査)

## 附章 新田遺跡第53・54次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

新田遺跡第53次調査と第54次調査は、約5mの距離で隣接する調査区である。両調査区の発掘調査では、中世とされるⅢ層とその直下のⅣ層において珪片状の高まりが確認された。そこで、両層およびさらに下位のV層における稲作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を行うことになった。

### 2. 試料

分析試料は、第53次調査区では、上位よりⅢ層（黄灰色土）、Ⅳ層（黒褐色粘質土）、V層（V1層 黄褐色粘質土を含む黒褐色土）、V2層（V2層 黒色粘質土および黄褐色粘質土を含む黒褐色土）の3点、第54次調査区では、上位よりⅢ層、Ⅳ層、V層の計6点である。なお、発掘調査の所見では、Ⅲ層上面は中世の遺構検出面、V層は10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が含まれることから、平安時代から中世にかけての堆積層と考えられている。

試料はいずれも調査担当者により採取され、当社に送付されたものである。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順を行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μ m のガラスピースを約0.02g 添加
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μ m 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}g$ ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

### 4. 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、スキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針も検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1と図1、図2に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物

種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

## 1) 第53次調査区

イネは、Ⅲ層、Ⅳ層およびV1層で検出されている。プラント・オパール密度は、Ⅲ層では高い値であるが、Ⅳ層とV1層ではやや低い。ヨシ属もすべての試料で検出されている。Ⅳ層では比較的高い密度であるが、Ⅲ層とV1層は低い密度である。スキ属型もすべての試料で検出されている。Ⅳ層とV1層では比較的高い密度であるが、Ⅲ層は低い密度である。メダケ節型、ネササ節型、チマキザサ節型さらにミヤコザサ節型もすべての試料で検出されている。チマキザサ節型がV1層で高い密度である以外は、いずれも低い密度である。なお、低密度であるがすべての試料より海綿骨針が検出されている。

## 2) 第54次調査区

イネは、ここでもⅢ層、Ⅳ層およびV2層で検出されている。プラント・オパール密度は、Ⅲ層とV2層で高い値であるが、Ⅳ層ではやや低い。ヨシ属とスキ属型もすべての試料で検出されている。ヨシ属はいずれも低い密度である。スキ属型はⅣ層で比較的高い密度であるが、Ⅲ層とV2層はやや低い密度である。メダケ節型、ネササ節型、チマキザサ節型さらにミヤコザサ節型もすべての試料で検出されている。Ⅲ層でチマキザサ節型が高い以外は、いずれも低い密度である。ここでもすべての試料より海綿骨針が低密度で検出されている。

## 5. 考察

稲作跡の可能性を判断するにあたっては、試料1 gあたりおよそ5,000個/g以上の密度でイネ機動細胞プラント・オパールが検出された場合とされている。ただし、近年の仙台平野における調査例では2,000～3,000個/gの密度でも水田遺構が検出されている例が多々あることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

畦畔状の高まりが検出されたⅢ層とⅣ層では、両調査区でイネのプラント・オパールが検出された。このうちⅢ層では、第53次調査区で4,800個/g、第54次調査区で3,000個/gのプラント・オパール密度である。いずれも稲作跡の可能性を判断する際の基準値である3,000個/gを超過していることから、両調査区ではⅢ層において稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。Ⅳ層では、両調査区ともにプラント・オパール密度は1,200個/gとやや低い値である。当該層において稲作が行われていた可能性は考えられるものの、直上層が高い密度であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

V層では、第53次調査区(V1層)で1,800個/g、第54次調査区(V2層)で3,000個/gの密度でイネのプラント・オパールが検出された。後者は、稲作跡の可能性を判断する際の基準値に達しており、さらにプラント・オパール密度のピークが認められることから、上層からの混入の危険性は考えにくい。こうしたことから、第54次調査区ではV層において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。第53次調査区については、稲作跡である可能性は考えられるが、プラント・オパール密度がやや低いことから、北隣の第54次調査区等からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

おもな分類群の推定生産量(結果図の右側)をみると、イネ以外の分類群では、第53次調査区のIV層でヨシ属が優勢となっている。ただし、生産量自体はそれほど高くはない。このことから、調査地の周辺にヨシ属の生育する湿地があったと推定される。また、スキ属型が両調査区のIV層とV層で比較的多く、チマキザサ節型がⅢ層とV層で多い状況である。こうしたことから、これらの層では調査地周辺の乾いたところにスキ属やチマキザサ節などが生育していたと推定される。

## 6. まとめ

新田遺跡第53次調査および第54次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討した。その結果、中世の柱群状遺構が検出されたⅢ層では、両調査区においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、当該層で稻作が営まれていた可能性が高いと判断された。同じくⅣ層については、稻作が行われた可能性は考えられたが、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性も残された。V層では、第54次調査区（V2層）において稻作が行われていた可能性が認められた。一方、第53次調査区（V1層）では稻作が行われた可能性は考えられたが、第54次調査区等からの混入の危険性が認められた。

## 文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、31、p.70-83。  
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213。  
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として一、考古学と自然科学、20、p.81-92。  
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一、考古学と自然科学、9、p.15-29。  
 藤原宏志（1998）稻作の起源を探る、岩波新書。

検出密度（単位：×100個/g）

分類群(和名・学名)＼層位	第53次調査			第54次調査		
	Ⅲ層	Ⅳ層	V1層	Ⅲ層	Ⅳ層	V2層
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	48	12	18	30	12
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6	18	6	6	6
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	12	24	30	12	30
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
メダケ節型	<i>Pleiothlas</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	18	24	18	6	12
ネザサ節型	<i>Pleiothlas</i> sect. <i>Nezasa</i>	12	18	30	18	18
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	36	18	72	54	24
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	12	12	12	6	12
その他	Others	6	6	6	6	6
未分類等	Unknown	103	139	108	109	131
(海綿骨針)	Sponge	6	6	6	6	6
プラント・オパール総数	Total	253	271	300	253	245

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m<sup>2</sup>・cm）

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.42	0.35	0.53	0.89	0.35	0.89
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	1.14	0.38	0.38	0.38	0.38
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.15	0.30	0.37	0.15	0.37	0.22
メダケ節型	<i>Pleiothlas</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.21	0.28	0.21	0.07	0.14	0.14
ネザサ節型	<i>Pleiothlas</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.06	0.09	0.14	0.09	0.09	0.06
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.27	0.14	0.54	0.41	0.18	0.27
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.04	0.04	0.04	0.04	0.02	0.04

表1 新田遺跡第53・54次調査のプラント・オパール分析結果

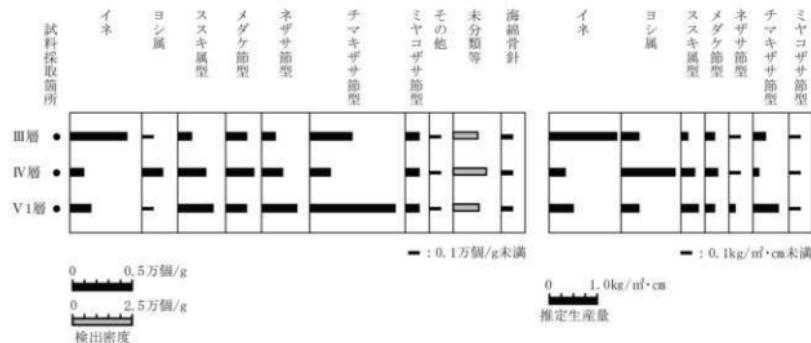


図1 新田遺跡第53次調査のプラント・オバール分析結果

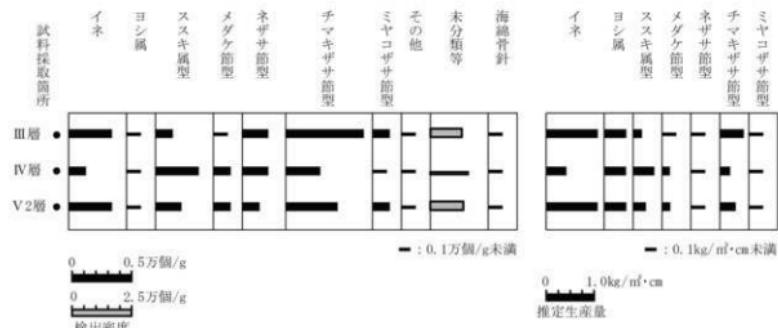
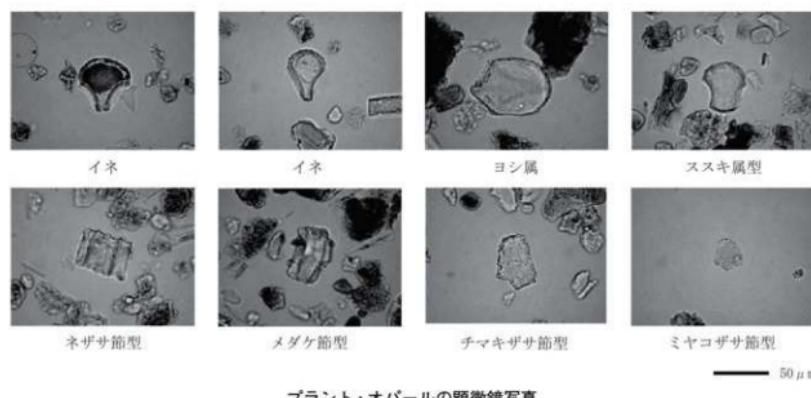


図2 新田遺跡第54次調査のプラント・オバール分析結果



プラント・オバールの顕微鏡写真

## VIII 新田遺跡第58次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字北関合地内における個人住宅建築計画に伴う確認調査である。平成21年11月、地権者より個人住宅建築計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、住宅基礎工事に際し、直径600mm、長さ6.5mの柱状改良を行い、給排水工事においても最深62cmの掘削を行うというものであった。本年10月、北側隣接地において実施した確認調査では、現地盤より約1.0mの深さまでが造成時の盛土であり、その下に約20cmの厚さで造成前の表土、更にその下には河川の堆積土と見られる砂層があり、顯著な遺構は確認できなかった。隣接する本調査区においても同様な状況と考えられたが、造成前の砂層の広がりを確認する必要があると判断し、確認調査の実施に至ったものである。



第1図 調査区位置図

12月10日、対象地区の中央に幅約1.9m、長さ約7.0mのトレンチを設定し、重機によつて現地表下約1.3mまで掘り下げた。北側隣接地と同様造成による盛土の下には北側に向かって落ち込む砂層の堆積があり、年代は不明であるが、東西方向に延びる河川跡の堆積層と考えられた。本遺跡の南半部では、類似した砂層の堆積が各地点で確認されているが明確な中世以前の遺構は確認できない状況にある。詳細は不明であるが中世以降新しい時期の河川堆積層と考えてそれ以上の掘削を止

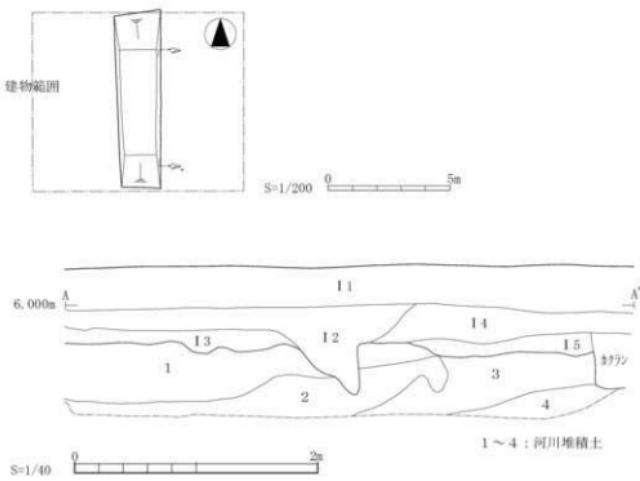


調査風景（北より）

め、調査を終了した。

## 2 調査成果

中世以降とみられる河川の堆積層を確認した。基盤層の確認には至らず、遺構・遺物は発見できなかった。



調査区全景(北より)

## IX 新田遺跡第59次調査

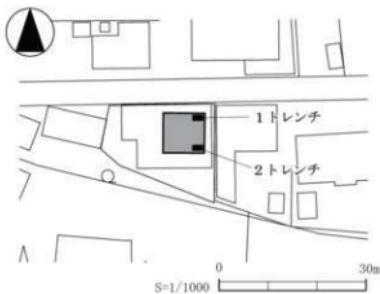
### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年12月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約40cm、長さ6.5mのコンクリート杭36本を打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。しかし、当該地周辺については調査実績が少ないことから直ちに確認調査を実施し、遺構が確認された時点で再度調査時期についての協議を行うこととした。平成21年12月16日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、12月22日に現地調査を開始した。

重機により対象地北東部(1トレンチ)及び南東部(2トレンチ)の表土除去を行ったところ、現表土下約2.2mまで砂が厚く堆積している状況を確認した。当該区は、西側近接地に七北田川が南流していることから、古い河川またはその氾濫源であったものと推測された。年代については、遺物が出土していないため明らかでない。地盤が弱く崩落の危険があることからそれ以上の掘削は行わず、写真撮影及び平面図を作成し、調査的一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図



重機による掘削状況(東より)

## X 山王遺跡第69次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王字東町浦地内における個人住宅建設に伴うものである。平成20年12月9日に地権者より山王遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、基礎工事の際に直径60cm、長さ8mの柱状改良杭を25本打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、基礎構造の強度を得るために必要不可欠であるとの理由から、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。平成21年3月27日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、4月9日から現地調査を開始した。はじめに重機により現代の盛土及び水田耕作土の除去を行い、掘削した土砂は場外へ搬出した。その後、遺構検出作業を行い、堆積土のⅢ層上面においてSD 1411溝跡、Ⅳ層上面においてSK 1413・1414土壙、SX 1415・1416を検出した。これらの遺構については、順次埋土の掘り下げ、写真撮影、実測図作成等の一連の

作業を行い、4月28日までに終了した。なお、調査区西壁際で検出したSK 1413土壙については、埋土の掘り下げ途中で涌水等のため西壁が大きく崩落しそうになったことから、掘り下げを中止し急遽埋め戻しを行った。この後、Ⅳ層を掘り下げて遺構検出作業を行ったが、古墳時代の土師器の小破片がわずかに出土したものの遺構は検出されなかった。5月8日に発掘器材の撤収、翌9日に重機による埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。

### 2 調査成果

#### (1) 層序

今回の調査区で確認した層序は、以下のとおりである。

I 1層：現代の盛土で、厚さは15～35cmである。

I 2層：現代の盛土で、厚さは15～20cmである。

I 3層：現代の盛土で、厚さは10～20cmである。



第1図 調査区位置図

II 1層：現代の水田耕作土で、厚さは15～25cmである。

II 2層：現代の水田床土で、厚さは約5cmである。

III 層：黒褐色土で、厚さは15～20cmである。調査区南東部のみに分布する。上面はS D 1411溝跡の遺構検出面である。

IV 層：灰黄褐色～にぶい黄褐色砂で、厚さは30cm以上である。上面はS K 1413・1414土壤、S X 1415・1416の遺構検出面である。

## (2) 発見遺構と遺物

### S D 1411溝跡 (第2・3図)

中央部のIII層上面で検出した東西方向に斜行する溝跡である。S K 1413・1414土壤、S X 1415と重複し、これらより新しい。確認できた長さは約6mである。平面でみると、中央付近からわずかに湾曲しながら西側に延びる様相をみせる。方向は、直線的に延びる東半部でみると、東で約23度南に偏している。規模は、上幅70～90cm、下幅30～40cmである。深さは検出面から約25cmで、東側と西側での底面の比高はほとんどみられない。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は基本的には3層に分けられる。1層は暗灰褐色土、2層は黒褐色土、3層は黒色粘質土である。いずれも黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・高台付杯・壺、須恵系土器杯、丸・平瓦、砥石が出土している。

### S D 1412溝跡 (第2図)

中央部のIII層上面で検出した東西方向に斜行する溝跡である。重複関係から、S D 1411溝跡より古く、S X 1415より新しい。確認できた長さは約3.2mである。方向は、東で約26度南に偏している。規模は、上幅約35～55cm、下幅15～25cmを測る。深さは検出面からは約10cmであるが、上部がかなり削平されていることが東壁の断面観察からわかる。底面はやや平坦で、壁は湾曲しながら立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は黒褐色土、2層は暗灰黄色土で、いずれも黄褐色砂質土等を斑状に含んでいる。遺物は、土師器壺、須恵器瓶・壺、平瓦が出土している。

### S K 1413土壤 (第2図)

西側のIV層上面で検出した土壤である。重複関係から、S D 1411溝跡より古く、S K 1414土壤、S X 1416より新しい。平面でみると、西側が調査区外にかかるため、調査区内では半円形の部分のみが確認できる。そのため、井戸跡や規模の大きな溝跡の端部である可能性も考えられるが、平面形や配置状況、さらに埋土の状況等から土壤とした。規模は、東西2.6m以上、南北3.3m以上、深さは約1.3mである。底面は丸みをもち、壁の立ち上がりは急である。中頃に段を有し、その上部はすり鉢状に開く。詳細な断面観察の前に崩落が始まったため、埋土については堆積状況の概略的な記載である。上層は黒色土で、酸化鉄斑を多く含み、厚さは約60cmである。中位の層は黒色粘質土で、植物遺存体を含む。下層は青灰色砂質土で、黒色粘質土をブロック状に含んでいる。遺物は、土師器杯・壺、須恵器杯・高台付杯・蓋・壺、須恵系土器杯、丸・平瓦、砥石が出土している。

### S K 1414土壤 (第2・3図)

中央部南側のIV層上面で検出した土壤である。重複関係から、S D 1411溝跡、S K 1413土壤より古く、S X 1415より新しい。平面でみると、東西に細長い形態をとり、壁にはわずかではあるが出入りがみられる。規模は、東西2.65m以上、南北0.95m、深さは検出面から約0.15mである。底面はやや凹凸があり、壁は比

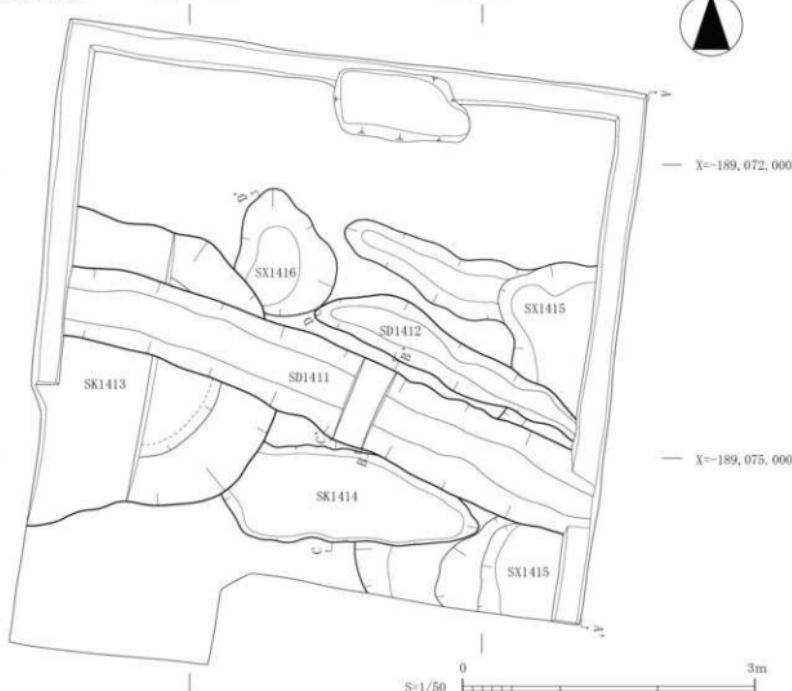
調査区平面図

Y=12,820,000

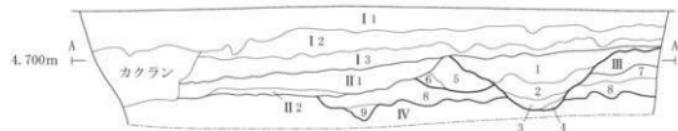
Y=12,823,000



X=-189,072,000



調査区東壁断面図



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD1411埋土			SD1412埋土		
1	暗灰褐色土 黒褐色土	黄灰色砂質土と黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に含む。 黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物を含む。	5	黒褐色土	黄灰色砂質土と黄褐色砂質土を斑状に含む。
2	黑色粘質土 黒褐色 砂質土	黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に含む。 黑色粘質土と黄褐色砂質土を混入。	6	暗灰褐色土	黄褐色砂質土を斑状に若干含む。
SX1415埋土			SX1415埋土		
7	褐灰色土	やや砂質。灰白色火山灰を斑状に含む。	7	褐灰色土	やや砂質。にぶい黄褐色砂を斑状に若干含む。
8	暗灰褐色土		8	暗灰褐色土	やや砂質。にぶい黄褐色砂を斑状に若干含む。
9	にぶい黄褐色 砂質土		9	にぶい黄褐色 砂質土	黒褐色土を混入。

第2図 調査区平面図・断面図

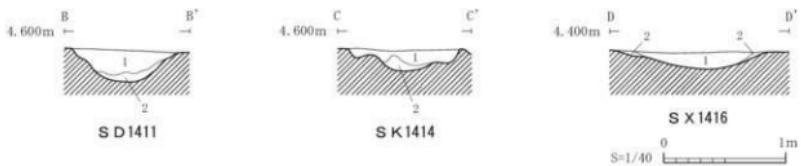
較的急に立ち上がる。埋土は2層に分けられる。1層は灰黄褐色砂質土、2層は灰黃褐色砂で、いずれも黒褐色土を斑状及びブロック状に含んでいる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、須恵系土器杯が出土している。

#### S X 1415(第2図)

南東部のIV層上面で検出したものである。S D 1411・1412溝跡、S K 1414土壤と重複し、これらより古い。平面でみると、形態は不正形で、壁の出入りも著しい。また、北側には溝状の部分が取り付いている。確認できる範囲は、東西24m以上、南北3.6m以上である。底面は全体的にはほぼ平坦といえるが、小さな凹凸が多くみられる。深さは検出面から5~20cmである。埋土は基本的には2層に分けられる。上層は褐灰色土で、灰白色火山灰を斑状に含んでいる。下層は暗灰黄色土で、にぶい黄褐色砂を斑状に若干含んでいる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶・甕、須恵系土器杯が出土している。

#### S X 1416(第2・3図)

中央付近のIV層上面で検出したものである。S K 1413土壤と重複し、これより古い。平面でみると、かなり形の崩れた円形を呈する。規模は、長径約1.3m、短径約1.05mである。深さは検出面から約15cmである。底面は丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は基本的には褐灰色土の単層である。遺物は、土師器甕が出土している。



土層観察表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
SD1411埋土			2	灰黃褐色砂	黒褐色土を斑状に多く含む。また、炭化物を若干含む。
1 黒褐色土	黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物を含む。		SX1416埋土		
2 黒色粘質土	黄褐色砂質土を斑状及びブロック状に含む。		1	褐灰色土	やや砂質。
SK1414埋土			2	褐灰色土	やや砂質。にぶい黄褐色土を斑状に含む。
1 灰黃褐色 砂質土	黒褐色土を斑状及びブロック状に含む。また、炭化物を若干含む。				

第3図 各遺構断面図

### 3 まとめ

今回の調査では、溝跡2条、土壤2基、性格不明遺構2基を発見した。いずれの遺構も土師器と須恵器を中心とした遺物が出土しているが、すべて破片であり図示できるものはない。重複関係から一番古い時期のS X 1415は、埋土に灰白色火山灰が含まれ、須恵系土器が出土していることから10世紀前葉を中心としたものと考えられる。よって、他の遺構の年代はこれ以降と考えられるが、その下限については根拠となる資料がないことから不明といわざるをえない。なお、S X 1415と重複関係がないS X 1416については、形態や位置関係、さらに埋土の状況等から同様の遺構と考えられ、これと同時期のものと推定される。



SD1411・1412溝跡  
掘り下げ状況  
(東より)



各遺構掘り下げ状況  
(東より)



各遺構掘り下げ状況  
(西より)

写真図版1



SK1414 土壌掘り下げ状況(西より)



SX1415 掘り下げ状況(南より)



SX1416 掘り下げ状況(東より)

写真図版2



IV層掘り下げ状況(西より)



調査区東壁土層堆積状況(西より)

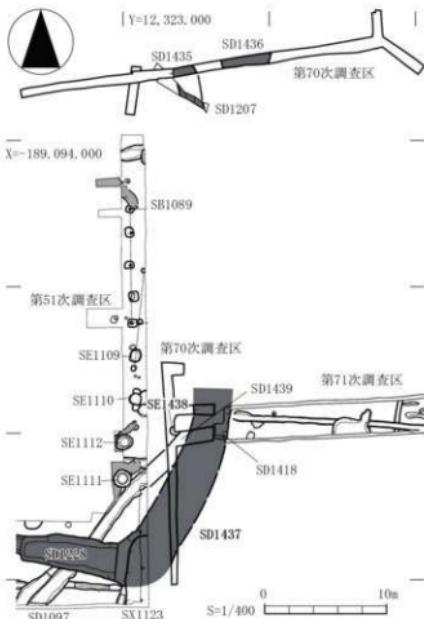
写真図版3

## XI 山王遺跡第70次調査

### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、給排水管付設工事に伴う発掘調査である。平成21年3月、地権者より当該区における宅地造成と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、造成地内に専用通路を設けるとともに、給排水管の付設工事を行なうことが示されていた。専用通路部分については本発掘調査を実施することで協議を進めていたが、給排水管付設部分についても狭い範囲ではあったものの、近接地で旧水田耕作土下約20cmの深さで中世の屋敷跡が発見されていたことから、本計画による遺跡への影響が懸念された。このため、工事立会を行った際に遺構が発見された場合は、確認調査を実施することで地権者の了解を得た。平成21年4月23日、地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、4月28日に給排水管付設工事に伴う工事立会を実施した。

工事に先立ち、現表土及び旧水田耕作土を除去したところ、南端部で大規模なSD1437溝跡やSE1438井戸跡、SD1437よりも古いSD1439溝跡を発見した。SD1437は位置関係から中世の区画溝である第51次調査区SD1228溝跡と一連であることが明らかであり、同じくSD1439もSD1097と同一のものと推測された。掘削される深さがこれらの遺構構造面で収まることから、直ちにこれらの写真撮影及び平面・断面図を作成し、調査の一切を終了した。



## XII 山王遺跡第72次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

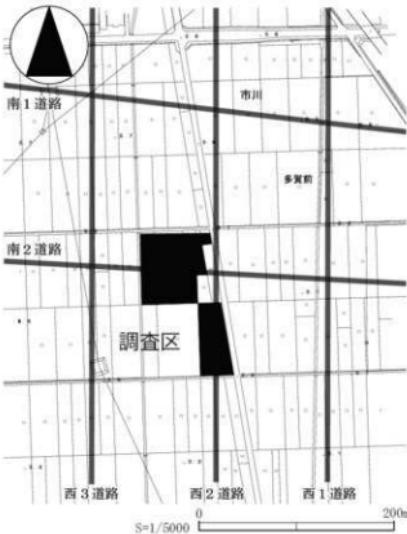
本件は、市川字多賀前地内における農地整備計画に伴う確認調査である。対象地は二人の地権者が所有するもので、平成21年2月、それぞれの地権者から当該地における農地整備計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画は、対象地区全体の水田上に最大90cmの盛土を施し、貸農園と駐車場整備を行おうとするもので、掘削は伴わず、駐車場についても簡易な舗装であることから、遺跡に与える影響は軽微であると考えられた。しかし、計画地の対象面積は両地権者分を合わせると3,663m<sup>2</sup>と広大であることによれば、当該地は古代のまち並みを構成する道路網の内、西2南北道路と南2東西道路の推定線上にあることから（第1図）、造成前に確認調査を実施したいという意向を伝えて協議を行ったところ、地権者の了解を得ることができ、5月13日から調査を開始した。

5月13日、T1～T4トレンチを設定し、重機によって表土の除去を行う。遺構検出作業のち平面図作成を行うが、調査期間が田植えの時期と重なったため調査区には周囲の水田から水が浸み込み、排水を繰り返しながらの作業となった（～19日）。5月20日、T3とT4の間にT5・T6を設定し、重機によって表土の除去を行う。T5の南側では第60次調査で発見した東西道路を検出。5月26日、T3・T4・T6で検出した南北溝と東西道路の関係をみるとT5を西側に拡張してT7を設定。東西道路に南北溝が合流することについては確認できたが、当初の目的であった西2南北道路の検出には至らなかった。5月27日、喝水期における調査再開も視野にいれ、一先ず野外調査を終了した。

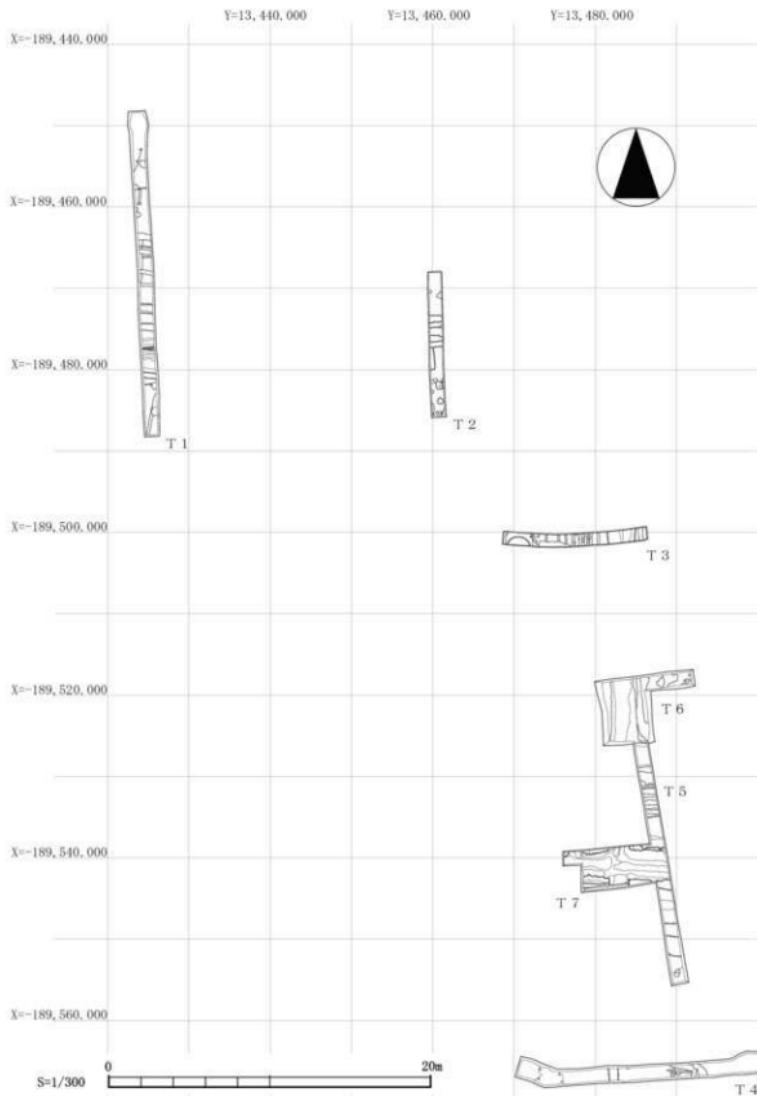
### 2 調査成果

#### （1）層序

T5～7トレンチでは表土である現代の水田（I層）の下は直ちに古代の遺構面となっているが、T1～3トレンチでは暗褐色土（II層）の堆積があり、現在平坦に見える対象地区も、古代においては起伏のある地形であったことが知られる。遺構面となっている基盤層についても、対象地区的南側に位置するT4トレンチでは砂に近い脆弱な地盤となっている。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区全体図

## (2) 発見した遺構と遺物

本調査では、各調査区において古代の遺構を発見した。今回の調査の目的は、遺構の分布状況の把握に主眼を置いたため、個々の遺構については精査を行っていない。以下、調査区ごとに、遺構の分布状況について簡単に説明する。

### ① T1トレンチ

調査区北側では埋土(暗灰黄色粘土)に地山ブロックを多く含むS X 1470を発見し、その上面でS K 1471土壤を発見した。S K 1471は直径約90cmの円形の土壤であり、暗褐色粘土の埋土には地山ブロックや炭化物粒を多数含んでいる。外面にハケメが施された非クロ調整の土師器壺が出土している。南側ではS D 1472・1473・1474などの東西溝を発見し、S D 1474の最上層には灰白色火山灰が自然堆積している状況を確認した。S D 1472・1473の埋土はいずれも黒褐色粘土が主体となっている。

### ② T2トレンチ

中央部でS D 1487・1488・1489を発見した。いずれも東西溝であり、S D 1487・1488の埋土には炭化物が多く含まれている。S D 1487・1488からはクロ調整を行った土師器壺が出土しており、S D 1487から出土したものにはクロ調整前の叩き成形の痕跡が確認できる。南側ではS A 1475を発見した。南北に並ぶ2基の柱穴から推定したものであり、北側の柱穴は長辺1.0m、短辺0.7mで直径20cmの柱痕跡が確認できる。南側の柱穴の中央に柱位置を想定すると、柱間は約18mである。

### ③ T3トレンチ

南西隅でS E 1483を発見した。直径28m以上の円形を呈しており、埋土最上層に灰白色火山灰の大きなブロックが確認でき、底部がヘラ切りの須恵器杯が出土している(第6図3)。その東側では南北方向に延びるS X 1484小溝群、調査区東側ではS D 1485南北溝を発見した。S D 1485は上幅35mの南北溝であり、方向は北でわずかに西に偏している。埋土中に灰白色火山灰層の堆積が認められる。

### ④ T4トレンチ

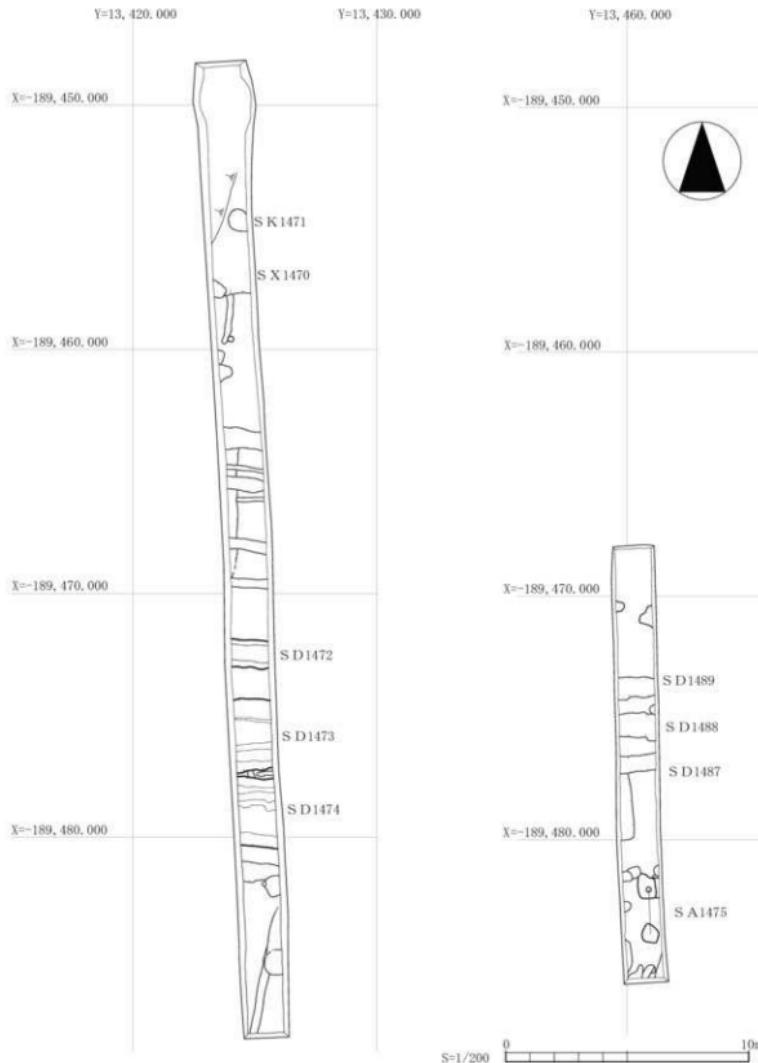
中央部でS D 1486南北溝を発見した。規模は上幅1.2mであり、方向は北で約4度西に偏している。

### ⑤ T5・6・7トレンチ

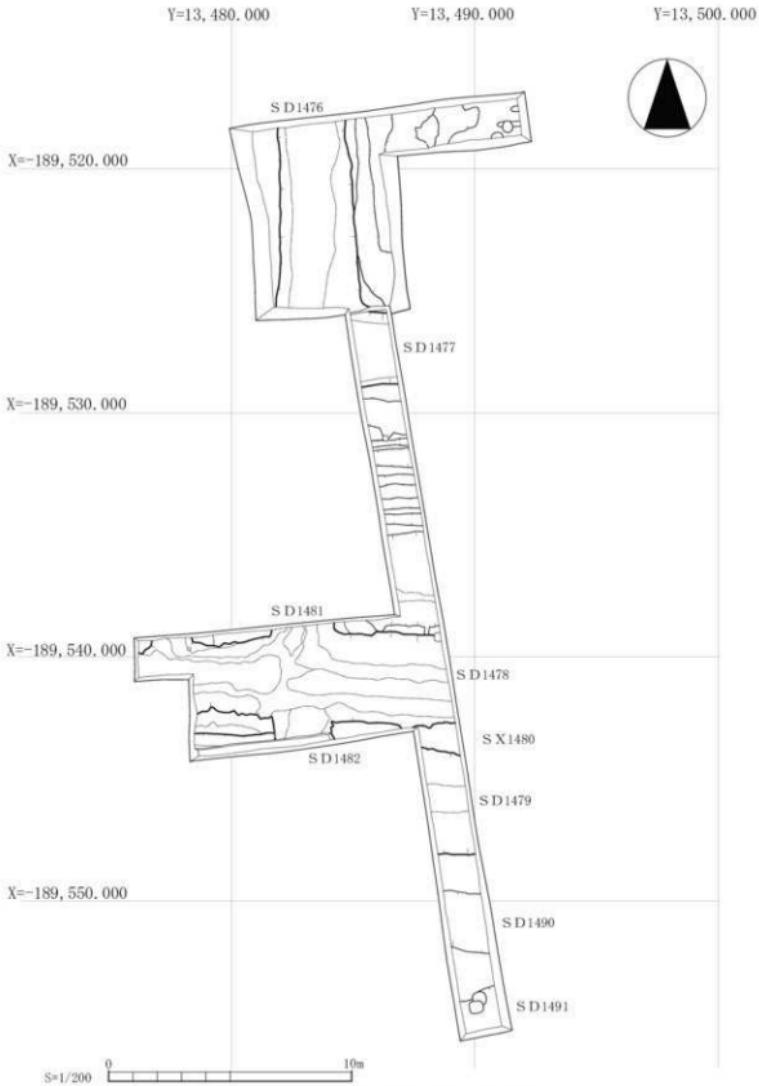
T 6トレンチ西半部でS D 1476南北溝を発見した。方向はおおよそ南北基準線と一致している。規模は、上幅2.5~3.5mであり、その南側のT 5トレンチ北端部で発見したS D 1477東西溝とL字状またはT字状につながるものと考えられる。S D 1476の上層には灰白色火山灰層の堆積が確認できる。T 7からT 5中央部にかけては、北側溝S D 1478と南側溝S D 1479を伴ったS X 1480東西道路を発見した。側溝埋土が路面を覆っている状態でとどめたため、規模や改修の状況については明らかにできなかった。

### ⑥ 出土遺物

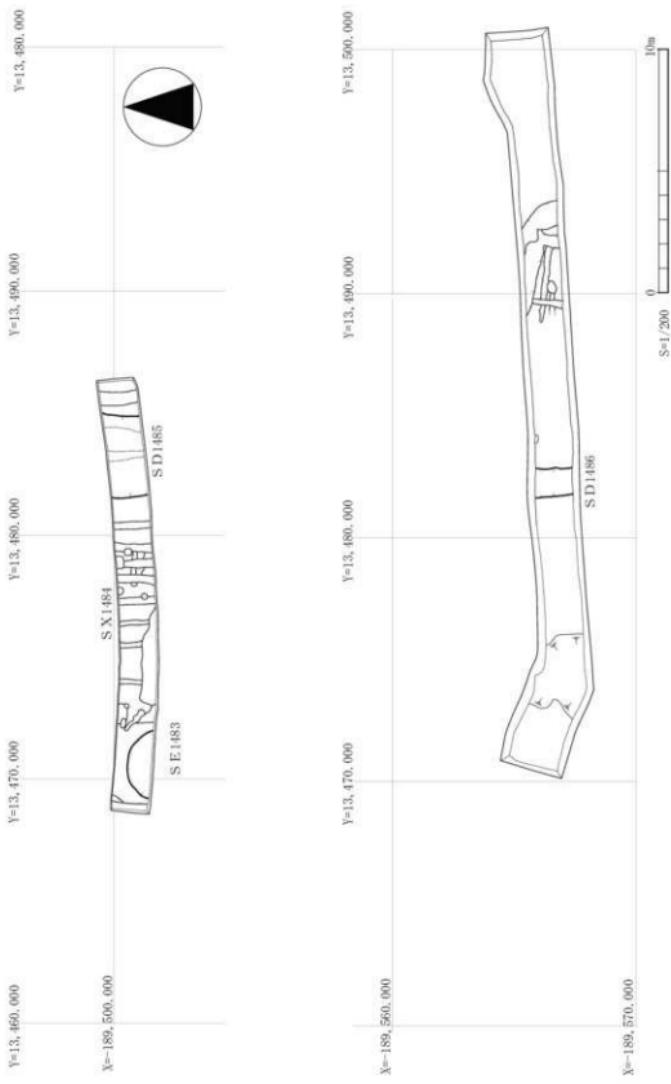
いくつかの特徴的な遺物について説明しておきたい。第6図4は須恵系土器高台付杯である。高台の形状が特徴的であり、縁釉陶器等に類似するものがある。内面底部の調整についても、中央にクロ調整による螺旋状の凹凸が残り、10世紀前葉の須恵系土器の内面に通常みられる「コテ」の痕跡は確認できない。第6図5は瓦器質土器短頸壺である(註1)。口縁部から肩部にかけての破片であり、クロ調整を施し、ヘラミガキを行って内外両面を黒色処理している。胎土は水窯された精良な灰白色土であり、中世以降の瓦器に質感が類似している。第6図7は細身の須恵器長頸瓶である。体部を絞って成形した痕跡が明瞭であり、平城宮分類の「壺G」に相当する。長岡京期を中心とした遺物として知られ、東北地方では払田柵跡(大仙



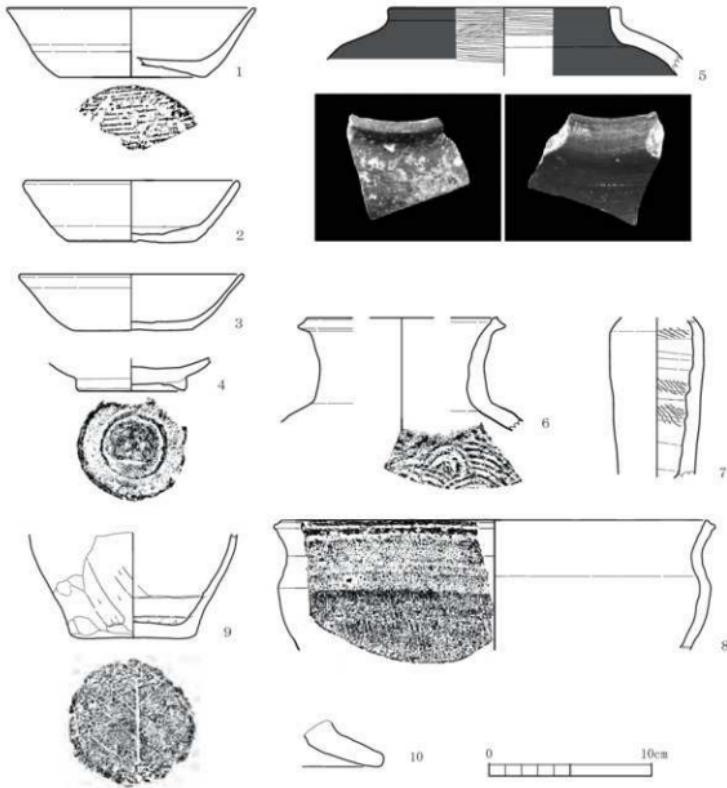
第3図 T1・T2トレンチ平面図



第4図 T5・T6・T7トレーンチ平面図



第5図 T3・T4 トレーンチ平面図



番号	種類	出土地区 層位	特徴		L3体 残存率	成体 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	環状器 杯	T2 II層	L3・底部：ロクロナデ 底部：勝手切り	口～底部：ロクロナデ	(15.3) 5/24	(8.6) 8/24	43		R 13	
2	環状器 杯	T2 II層	L3・外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	口～底部：ロクロナデ	(13.4) 3/24	(7.7) 9/24	38		R 7	
3	環状器 杯	T7 K4	L3・外部：ロクロナデ 底部：ヘラ切り	口～底部：ロクロナデ	(13.9) 4/24	(7.4) 11/24	35		R 3	
4	環状系土器 高台付杯	T6 I層	体部：ロクロナデ 底部：糸切り→高台貼付、ロクロナデ	体部：ロクロナデ 底部：ロクロナデ(コチ根跡なし)	(6.8) 11/24				R 10	
5	瓦形質土器 短脚壺	T7 D6	L3縁部：ロクロナデ→ヘラミガキ・黑色処理 体部：ロクロナデ→ヘラミガキ・黑色処理	L3縁部：ヘラミガキ・黑色処理 体部：ロクロナデ→黑色処理	(14.0) 3/24				R 4	
6	環状器 壺	T3 II層	口縁部：ロクロナデ 体部：ロクロナデ	L3縁部：ロクロナデ 体部：ロクロナデ(青海波)	(12.8) 2/24				R 11	大口壺
7	環状器 長脚壺	T6 D9	体部：殺り→ロクロナデ	体部：殺り→ロクロナデ					R 1	
8	環状器 壺	T1 I層	L3縁部：ロクロナデ 体部：平行凹き→ロクロナデ	L3縁部：ロクロナデ 体部：ロクロナデ	(2.2) 3/24				R 6	
9	玉ねぎ 壺	T1 I層	体部：手持ちカラヌシリ 底部：木支柱	体部：粘土練巻き上げ→指で押注 底部：細い骨柱		7.6 23/24			R 5	
10	玉ねぎ 壺	T5 D6	脚部：ヨコナデ	脚部：ヨコナデ					R 9	

第6図 出土遺物

表1 出土遺物集計表

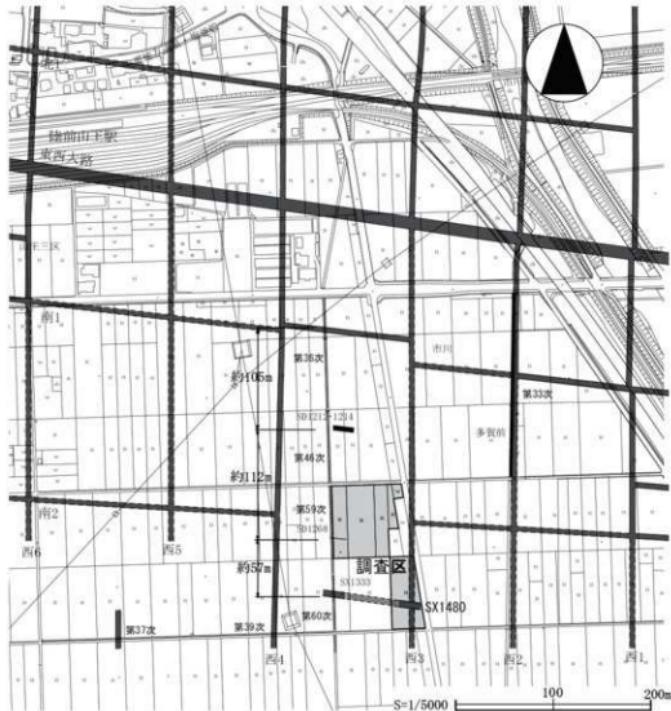
種別	器種	分類	部位	成形・調整手法	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	Z
					141/S	14/S	881/S	14/S	14/S	821/S	821/S	821/S
土器	杯	A類	口									
			底									
		B類	口		2				3		4	2
			底		2							
			回転ヘラケズリ						1			
			手持ちヘラケズリ						1		1	1
			ヘラ切り									
			静止系切り									
			回転系切り	1			1			1		
			(系切り)	1							1	1
			(不明)					1	3		1	1
土器	高台付杯	底	口									
			底		1							
		A類	口									
			体	ハケヌ	4	14					2	
		B類	底	ヘラケズリ		1						
			底	木型痕		2					1	
		底	底	不明		1						
			底	不明		1						
			口		1						1	
			体	叩き	1	1						
			底	ヘラケズリ							1	
土器	瓶	脚部	口		14		1		6	1	9	2
			脚部						1			
		A類	口		1	1	1				4	1
			体					1	1			
		B類	口	回転ヘラケズリ								
			体	手持ちヘラケズリ								
		底	底	ヘラ切り	1		1		5	1	1	
			底	静止系切り				1				
		底	底	回転系切り							1	
			底	(系切り)								
			(不明)		1	14	1					
須恵器	高台付杯	高台付杯	口									
			底		1	1	1					
		反耳杯	口								4	1
			底	回転ヘラケズリ								
		反耳杯	口	手持ちヘラケズリ								
			底	ヘラ切り	1		1					
		高台付杯	口	静止系切り								
			底	回転系切り								
		高台付杯	口	(系切り)								
			底									
須恵器	杯	高台付杯	口									
			底		1	6		4	2	6	9	3
		高台付杯	口								1	
			底		1					1	2	
		高台付杯	口								1	
			底									
		高台付杯	口								1	
			底									
		高台付杯	口									
			底									
須恵器	瓦器質土器	輪(底)	口									
			底									
		瓶	口									
			底									
		丸瓦	口	1 A類								
			底	II B類								
		九瓦	口									
			底		1			2		2		
		製土器	口									
			底									
		鋳型	口									
			底									
		砥石	口									
			底								1	
		磨石	口									
			底									
		鉄貨	口									
			底									

市)、伊治城跡(栗原市)からそれぞれ1点出土しているが、多賀城跡南面の市川橋遺跡からはしばしば出土が報告されている。

### 3 遺構の分布状況

今回の調査では、設定した各調査区において遺構を確認することができた。それらについては、いずれも平面的な確認にとどめたため年代を明らかにできなかったものが多いが、埋土中に灰白色火山灰の堆積が確認されたものや、古代の遺物が出土したものなどからみると、おおよそ奈良・平安時代の遺構群と考えができる。表土(1層)から出土したものを含めても、古墳時代あるいは中世以降の遺物が全く見られないことも、その考えを裏付けるものといえよう。

本調査区は、西2南北道路、南2東西道路の推定線上にあることから、本地区における道路遺構の在り方を探ることは当初の目的の一つであった。調査区西側に接する加瀬用排水路改修工事に伴う継続的な発掘調査により、東西大路の南側における東西道路の実態は次第に明らかになってきているが、その工事に伴



第7図 調査区の位置と道路遺構

う第59・60次調査の成果が示すとおり、南2道路推定線上において東西道路を発見することができず、それより約80m南側で発見したSX1333東西道路の延長線上において、SX1480を確認することができた(第7図)。第60次調査では明らかではなかったこの東西道路の方向は、SX1480の発見により東で約8度南に偏するという数値を得ることができ、多賀城外の区画道路が基準線の一つにしている多賀城南辺築地の方向に一致していることが明らかになった。多賀城外の方格地割りを構成する東西方向の小路については、北1と南1が東西大路に平行し、北2と南2については南北大路に直交するという推定図が提示されているが、今回の調査結果は南2道路の位置及び方向について新しい見解を提示する結果となった(註2)。

今回の調査では各調査区において東西・南北方向の溝跡を発見した。それら相互の関係については明らかではないが、T3トレンチのSD1486、T6トレンチのSD1476、T7トレンチのSD1481は位置関係からみて同一の溝であろうし、その延長線上にあるSD1482とT4トレンチのSD1486についても一連の遺構である可能性が高い。T4トレンチではSD1486のはか、その東側で溝跡数条を確認しているが、全体的に遺構の分布状況は希薄であった。

#### 4まとめ

- (1) 調査区全体から古代の遺構を多数発見した。
- (2) 南2道路推定線の約80m南側においてSX1480東西道路を発見し、方向は多賀城南辺築地に平行していることが明らかになった。
- (3) 遺構の年代は9・10世紀頃を中心とするとみられるが、8世紀頃の遺物も出土しており、その時期の遺構の存在も考えられる。

(註1) 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅷ』宮城県多賀城跡調査研究所 1980

(註2) 西2道路については手がかりが得られなかったが、本調査区の北側の農業用排水路改修工事に伴って実施した第76次調査において検出した。それを直線で延ばすと本調査区のT1・2の間に位置しており、従来の推定線からは15m以上西側に存在したことになる(平成22年度報告書作成予定)。

### XIII 山王遺跡第73次調査

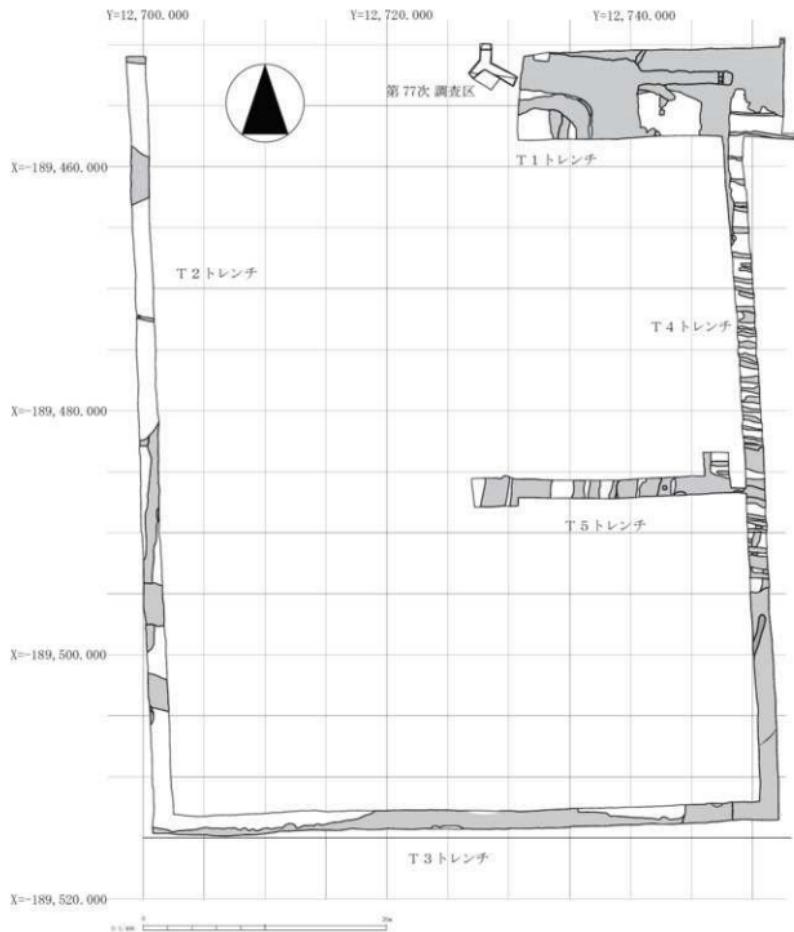
#### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内における農地整備計画に伴う確認調査である。平成21年3月、地権者より依頼を受けた開発業者より、当該地における農地整備計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、対象地区全体の水田上に60~70cmの盛土を施し、南端部には61.2mにわたって擁壁を設置するというものであったが、現況の水田には掘削を及ぼさないことから遺跡への影響は軽微であると考えられた。しかし、計画地の対象面積が4,189m<sup>2</sup>と広大であることに加え、当該地は古代のまち並みを構成する道路網の内、西9南北道路と南2東西道路の推定線上にあることから、造成前に確認調査を実施する方向で協議を行ったところ、地権者の了解を得ることができ、5月29日から調査を開始した。

はじめに、道路遺構の存在を確認するため北東部にT1トレンチを設定した。重機を使用して表土である水田層を除去したところ、中世頃のものと見られるSD1450溝跡や古代のSD1440溝跡・土壌が現れた。2日、対象地区全体の状況を把握すべく、外周に沿って西辺にT2トレンチ、南辺にT3トレンチ、東辺にT4トレンチを設定し、重機によって表土を除去した。T2トレンチでは北端部や中央部付近で中世頃の溝跡を発見し、北半部ではそれらの検出面となっている黄褐色砂層に古代の土器片や動物遺存体が含まれることから、河川跡の存在も考えられた。T3トレンチでは東西方向に延びるSX1459河川跡が検出され、T4トレンチでは北半部全体に東西方向の小溝群SX1446が現れた。3日、T4トレンチの遺構検出作業を続行し、T1・T3トレンチ間にはT5トレンチを設定して重機によって表土を除去した。T3・T5の東端部付近では南北方向に延びるSD1445溝跡を検出し、それはT1トレンチでも確認していたことから西9道路西側溝の可能性が考えられ、T4トレンチの小溝群はそれに伴う波板条压痕とも考えられた。T1トレンチを北・南・東方向に拡張し、西9南北道路と南2東西道路の確認に努めたが、SD1445と対になる南北溝は検出できなかった。4日、T1トレンチの南2東西道路の推定線上で発見したSD1440について検討すべく、東端部の断ち割りを開始した。また、SD1441についても南端部の断ち割りを行った。同日、遺構検出作業がおおよそ終了したことから、業者に委託して測量基準点を設置し、遺構実測の準備を行った。5日、午前中は雨のため作



第1図 調査区位置図



第2図 調査区全体図

業はできなかつたが、午後から実測のための測量点を設置し、遺構が希薄なT2・3トレンチから1/100の縮尺で平面図を作成を行つた。平行してSD1440・1441の断ち割りを続行した。6日、終日の雨により調査区は水没。7日午後から8日午前中にかけて排水作業を行う。9日から10日にかけてT1・2・4・5トレンチの平面図とSD1440・1441の断面図を作成。器材を撤収する。12日、補足調査を行い、T2トレンチ北端部のSD1453の一部を断ち割る。検出面は地山ではなく、その上面に堆積した古代の遺物を含む堆積層であることを確認。T1トレンチではSD1440の北東隅を拡張し、その北壁を検出。これをもって野外調査を終了する。

## 2 調査成果

### (1) 層序

現代の水田層下は直ちに古代・中世の遺構検出面であるにぶい黄色土(Ⅱ層)となっており、T1トレンチの西側に近接する第77次調査区では、その下層に褐色粘質土、さらにその下層にはにぶい黄橙色砂質土の堆積を確認している(註1)。T4トレンチの南側は北側で確認した小溝群を覆う灰黃褐色粘質土や暗灰黄色粘質土の堆積が確認できるが、T3トレンチで発見した河川跡の一部である可能性もある。

### (2) 発見した遺構と遺物

今回の調査では、各トレンチにおいて遺構を検出することができた。T1トレンチについては遺構の構成等を検討するため比較的広い調査区を設定したが、T2～4トレンチでは遺構の分布状況の把握を目的としたため、詳細については不明なものが多い。以下、T1トレンチについては主な遺構ごとに、T2～5トレンチについてそれぞれまとめて概要を説明する。

#### ① T1トレンチ

##### SD1440溝跡

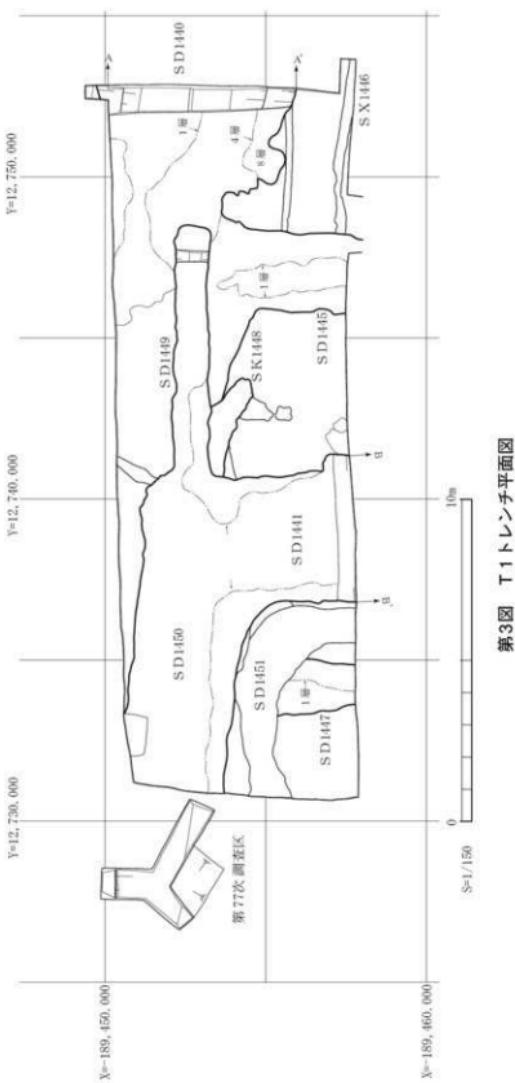
東西方向に延びる大溝跡である。約39mにわたって検出した。調査区西半部ではそれより新しいSD1450(SD1441・1449)、SK1450によって切られているが、東半部では南壁を検出し、SD1445南北溝が合流している。また調査区東部では小範囲ながら北壁も確認した。調査区東端部と第77次調査区で確認したそれぞれの南壁を結んだラインで計測すると、方向は東で約13度南に偏している。規模は上幅約6.0m、深さは約1.4mである。断面形は逆台形を呈し、壁はおおよそ直線的に立ち上がっている。埋土は10層に区分することができ、中ごろに灰白色火山

灰が自然堆積している(第4図7)。

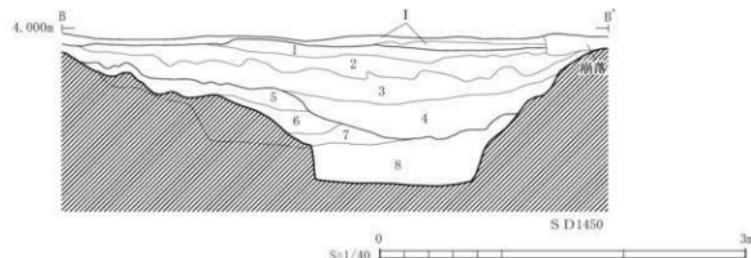
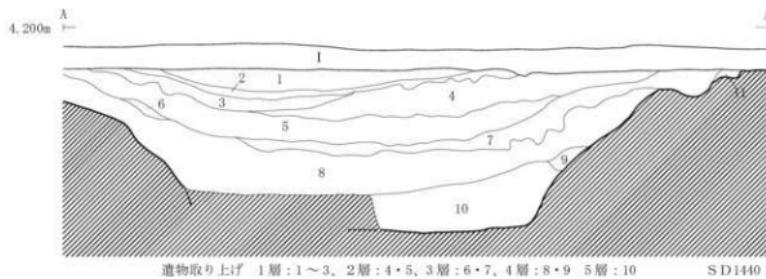
遺物は1層(第4図1～3)から土師器杯・甕、須恵器杯・双耳杯・甕、須恵系土器杯・高台付杯、平瓦(ⅡB類)、2層(4・5)から土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕、須恵系土器杯・高台付杯、灰釉陶器瓶、平瓦(I A・ⅡB類)、丸瓦、製塙土器が出土している。4層(8・9)からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕、5層(10)からはわずかに鉄型と砥石が各1点出土している(表1)。出土状況についてみると、1・2層か



SD1440灰白色大山灰層検出状況(西より)



第3図 T1トレンチ平面図



第4図 溝跡断面図

らは破片資料がほとんどであり、4層からは少ないながら体部に「丸」の墨書がある土師器杯（第7図1）、須恵器杯（3）、土師器壺（6）などが完全な形で出土している。

#### S D 1441・1450溝跡

調査区中ごろから西側にかけて発見した「一」状に屈曲する大溝跡である。東西（S D 1450）約5.0m、南北（S D 1441）約3.0mにわたって検出した。規模は、S D 1441が上幅約3.0m、深さ1.2mであり、S D 1450は上幅約3.5mである。方向は、S D 1441はおおよそ南北基準線と一致しており、S D 1450は東で約5度南に偏している。S D 1441の一部を断ち割ったところ、埋土は大きく上層（第4図1～4）と下層（5～8）に区分でき、上層の1層は白色の軽石粒を多く含む黒褐色土、2層は地山ブロックを多く含む黒褐色土、3層は粘性が強い黒色粘土、4層は灰色砂質土である。2層は3層が堆積した後の窪みを人為的に整地したよう見受けられる。下層は5・6層がグライ化した暗オリーブ褐色土やオリーブ黒色砂、7・8層は灰色砂が自然に堆積した様相を呈している。S D 1450は第77次調査でもその一部を調査しており、確認した底面までの深さはおおよそ同様であった（註2）。

遺物は6層から礫石器（磨石）が1点出土している。

### S D 1449溝跡

S D 1441・1450の北東隅から約7.5m延びる東西溝である。古代の溝跡であるS D 1440の埋土上で検出した。方向は東西基準線とおおよそ一致しており、規模は、上幅1.0～1.3m、深さ35cmである。埋土はS D 1441・1450の上層と同様である。

### S K 1448土壤

調査区中央部で発見した細長い土壤である。S D 1440より新しく、S D 1441・1450より古い。規模は上幅約1.0m、確認できた長さは約3.0mである。灰白色火山灰ブロックを多量に含んでおり、その上層の灰黄褐色土には炭化物が多く含まれている。

### S D 1447溝跡

調査区南西部で発見した南北溝である。規模は上幅1.2～1.7mであり、確認したのは南北約2.5mである。埋土は西壁寄りに灰白色火山灰の自然堆積層が確認できる。

#### ②T 2トレンチ

北端部の灰黄色粘質土上面で東西溝S D 1453、S K 1452を発見した。灰黄色粘質土は古代の土器片や動物遺存体など少数含む古代以降の堆積層とみられる。中ごろから南側にかけては地山上で東西溝S D 1455・1456、南北溝S D 1454などを発見した。S D 1455は上幅が約3.5m、埋土は褐灰色粘質土であり、S D 1456は上幅が約2.6m、埋土は黒褐色粘質土である。

#### ③T 3トレンチ

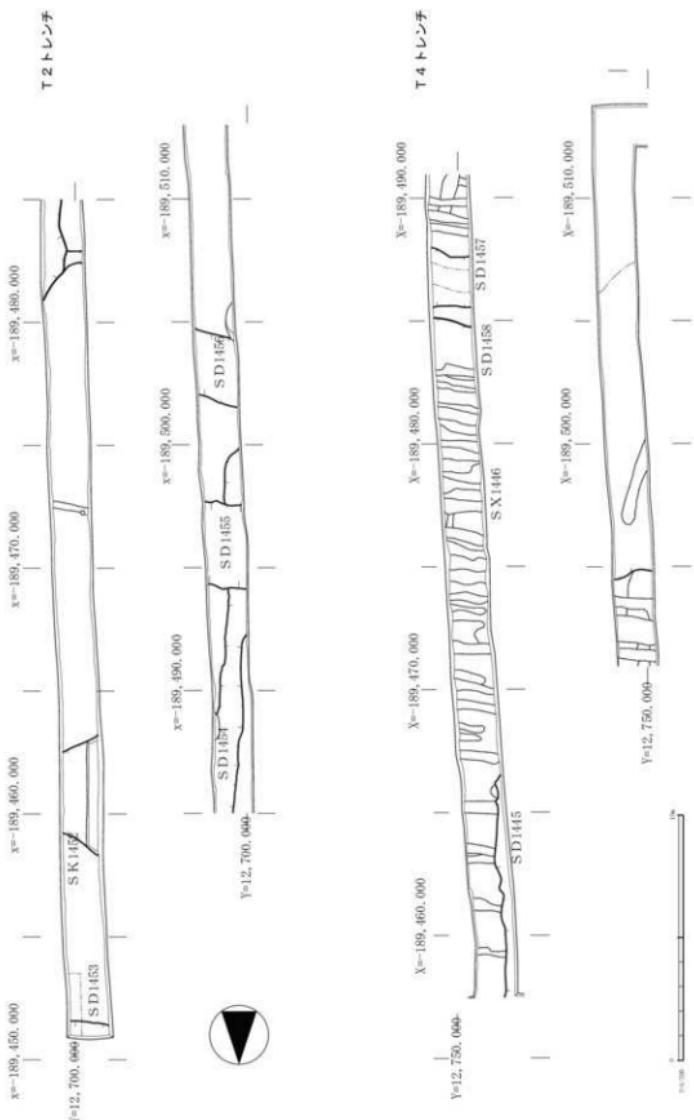
西壁から東壁にかけて、地山上でS X 1459を検出した。S X 1459は東西方向に延びる小河川状の遺構であり、蛇行し、平面的な輪郭も屈曲が著しい。規模は上幅3.0～9.0mである。埋土上層に灰白色火山灰が自然堆積している。

#### ④T 4トレンチ

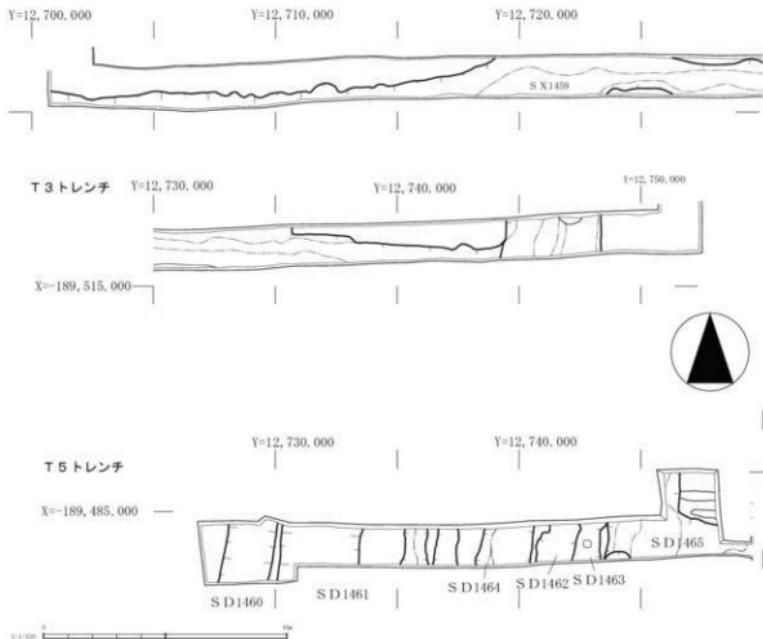
南側から中ごろにかけての地山上では、T 1トレンチから延びているS D 1445南北溝やS X 1446小溝群を発見した。S X 1446は幅50cm前後の小溝群であり、方向はほとんどのものが東西方向である。S D 1445とS X 1446は平面的に接しており、それぞれの埋土の重複状況ではS D 1445が新しい。S X 1446の南側ではそれより古いS D 1458東西溝や、その南側でS D 1457東西溝などを発見した。小溝はS D 1457の南側でも検出しており、それらの一部はトレンチ南側に分布する灰黄褐色粘質土や暗灰黄色粘質土によって覆われている。

#### ⑤T 5トレンチ

西側では地山上でS D 1460・1461南北溝を発見した。S D 1460は上幅2.0m、埋土は黒褐色砂質土、でありS D 1461は上幅3.2m、埋土は黒褐色粘質土である。その西側には灰黄褐色砂質土があり、その上面でS D 1462～1464南北溝を発見した。東側では南北溝とそれに連結するS D 1465を発見し、その南北溝は位置的にみてT 1・T 4トレンチで発見したS D 1445と同一の溝と考えられる。



第5図 T2・T4トレンチ平面図

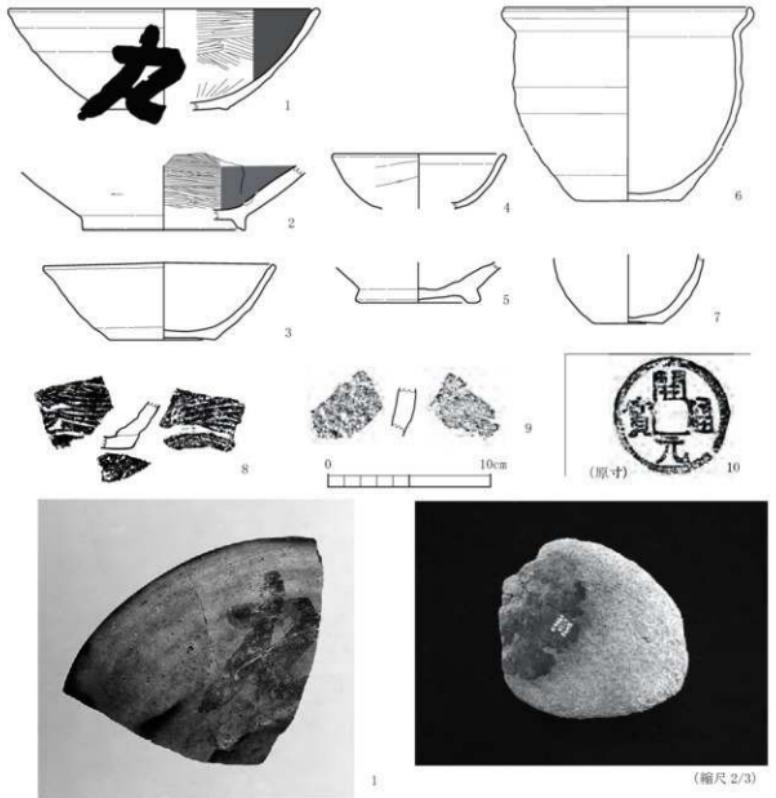


第6図 T3・T5トレンチ平面図

#### ⑥出土遺物

出土遺物については表1出土遺物集計表に示したとおりである。土師器では非ロクロ調整のA類が少なく、しかも杯類については皆無である。須恵器杯についても再調整を施したもののは少なく、ヘラ切りや糸切りが主体となっている。また須恵系土器が各トレンチから出土している状況が明らかである。

次に特徴的な出土遺物について説明しておきたい。S X 1440・1層から出土した土師器高台付杯(第7図2)は体部が直線的に外傾するもので、内面のヘラミガキは細い工具によって入念に施されている。高台は内側の端部に段を有しており、近江系縄釉陶器に特徴的にみられるものにきわめて類似した形態となっている(註3)。T1トレンチI層から出土した土師器壺(第7図8)は非ロクロで全体にハケメ調整が施されたものである。ハケメ調整された土師器壺は東北地方では古墳時代後期に一般的にみられるものであるが、一部表杉ノ入式に伴うものも明らかになっており、東北地方北部との交流を指摘する見解も示されている(註4)。表杉ノ入式に伴うものは底部に縫状の圧痕を有し、ハケメの単位が古墳時代のものと比較して粗い傾向がある。このようなハケメ調整された壺は県内では青木遺跡(白石市)などで確認されているが、数量的に多いのは市川橋遺跡であり、第19次調査では9世紀代の道路側溝から良好な資料が出土している(註5)。表1の中で非ロクロ調整の土師器壺としてカウントしたものについてもハケメ調整であることをもって8世紀及びそれ以前の資料とは断じがたい側面を持っている。



(縮尺 2/3)

11

番号	種類	出土地区 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	高さ	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土器器 杯	T 1 SD 1440・4層	口・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	口: 体部: ハラミガキ・黒色処理	(192) 7/24	(79) 5/24	63		R29	体部に墨書き 〔丸〕
2	土器器 高台付杯	T 1 SD 1440・3層	体部: 回転系タケナリ 底部: 高台付付・ロクロナデ	体: 回転系	(101) 2/24				R6	
3	土器器 杯	T 1 SD 1440・4層	口・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	口: 体部: ロクロナデ 底部: ロクロナデ	14.4 23/24	6.4 24/24	4.8		R18	
4	埴生土器 杯	T 3 SX 1459・1層	口部: ロヨリナデ 体部: ロヨリナデ	口部: ロヨリナデ (コテ鉈跡) 体部: ロヨリナデ	(108) 7/24				R7	
5	灰陶陶器 瓶	T 1 SD 1440・2層	体部: 回転系タケナリ→高台付付・ロクロナデ	体部: ロクロナデ 底部: ロクロナデ	(77) 7/24				R14	底部に ハラガキ [x]
6	土器器 壺	T 1 SD 1440・4層	口・体部: ロクロナデ 底部: 回転系切り	口: 体部: ロクロナデ 底部: ロクロナデ	(155) 4/24	(64) 12/12	120		R12	
7	土器器 壺	T 1 1層	体部: ロヨリナデ 底部: 回転系切り	体部: ロヨリナデ 底部: ロヨリナデ	(430) 11/24				R16	
8	土器器 壺	T 1 1層	体部: ハラメ 底部: 高台付付	体部: ハラメ 底部: ハラメ					R17	
9	灰陶土器	T 1 SD 1440・2層	体部: 不明	体部: ナデ					R2	
10	鏡	T 1 1層	「開元通寶」(初唐年代: 845年)						R9	
11	鏡	T 1 SD 1440・5層							R5	

第7図 出土遺物

表1 出土遺物集計表

種類	器種	分類	部位	成形・調整手法	S X 1440					IH/S	69/S	18/S	58/S	149/S	T-1	T-2/3-1	T-3/4-1	T-4/5-1	T-5/6-1	不明
					1 周	2 周	3 周	4 周	5 周											
土器	杯	A類	口																	
			体																	
			底		15										2	19		3	2	3
		B類	口		5	13										13	1	1	1	1
			体																	
			底	回転ヘラケズリ																
		C類	口	手持ちヘラケズリ																
			体	ヘラ切り																
			底	静止系切り																
		(不明)	回転系切り	1	2		1							1	5		1	1		
			(系切り)	1	6									1	6		3	13	1	
		高台付杯	(不明)	2										1	3	28	1	2	2	
			底		3													2		
漆器	碗	A類	口																	
			体	ハラケズリ	1	1										6				
			底	不明											1					
		B類	口		4	1									7		3	1		
			体	明き											1					
			底	ヘラケズリ	6	7	1							1	1	13	1	5	1	6
		C類	口	ロクロナデ	3	10	1							1	1					
			体	不明																
			底	回転系切り	1	1									1		2	1		
		(不明)	(系切り)	14	8									1	95	12	5	40	7	8
			高台付杯												3	1	1	1		2
漆器	豆皿	A類	口		2	4	1								3		1	1		
			体		1										3					
			底	回転ヘラケズリ																
		B類	口	手持ちヘラケズリ			1											1		
			体	ヘラ切り											1	2	2			
			底	静止系切り											1			1		
		C類	口	回転系切り	1	1	1							1			1			
			体	(系切り)	1										1					
			底	高台付杯																
漆器	豆皿	A類	口		1										1	1		1		2
			体		1		1								12	3	1	5		2
			底	不明																
		B類	口		2										2	1			2	
			体																	
			底	不明																
		C類(直)	口		7	9							1		1	3		1		
			体		8										2					
		C類(曲)	口		3											2			3	
			底	高台付杯	1	1														
漆器	平瓦	A類	口		1															
			体																	
			底	不明																
		B類	口		2	1												1		
			体																	
			底	不明																
漆器上部	丸瓦	I A類	口		1															
			体																	
		II B類	口		2	1														
			体																	
			底	不明																
漆器	筒瓦	I A類	口		1															
			体																	
		II B類	口		1															
			体																	

### 3 遺構の分布状況と年代

今回の調査では、古代の遺構と、それより新しくおおよそ中世頃とみられる遺構を確認した。

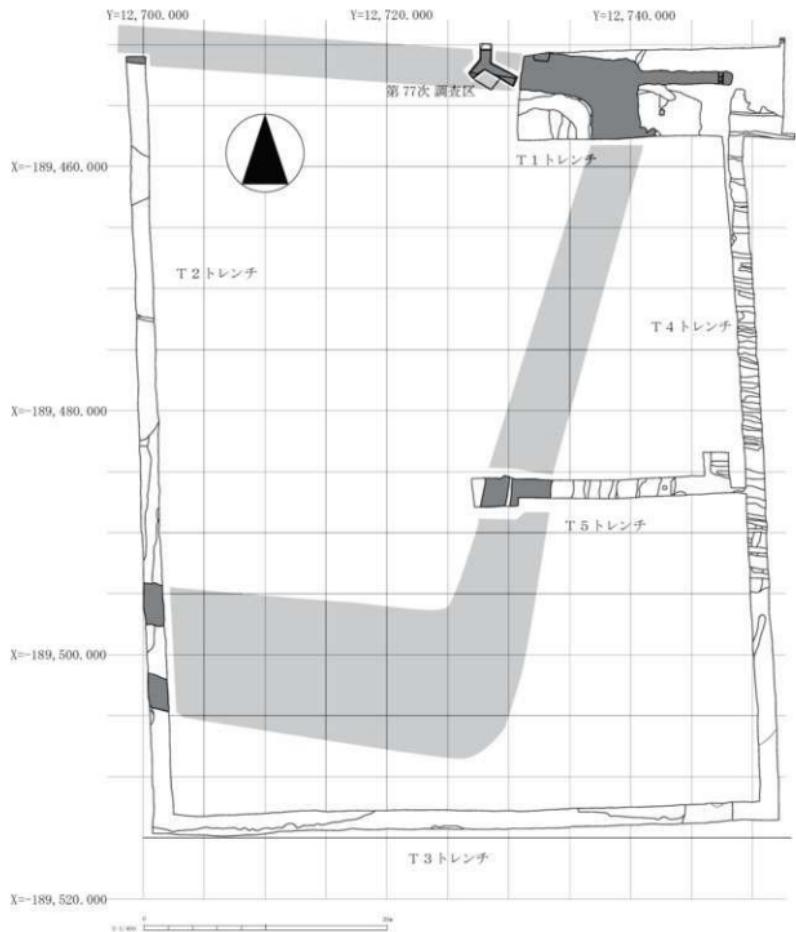
古代の遺構としてはT1トレンチで発見したSD1440東西溝がある。中ごろに灰白色火山灰の自然堆積層があり、10前葉以降は次第に埋没していった状況が観察される。その灰白色火山灰層の下層からは土師器杯・甕、須恵器杯が各1点おおよそ完全な状態で出土しており、この溝の年代を考える手がかりとなる。土師器杯と須恵器杯はいずれもロクロからの切り離しが回転糸切りでその後再調整はおこなわれないものであり、土師器甕はロクロ調整されたものである。このような組み合わせは白鳥良一による「多賀城跡出土土器の変遷」(註6)では9世紀後半に位置付けられたものである。多賀城跡第62次調査(註7)では、土師器杯・須恵器杯とともにロクロからの切り離しが回転糸切りであり、その後再調整はおこなわれないものや、再調整がおこなわれたものを含む土器群に対して9世紀中葉という年代を与えているが、SD1440・4層出土土器はその中の新しい要素によって構成されており、それより新しい年代を想定することができよう。また多賀城跡61次調査(註8)では、灰白色火山灰に覆われる10層の土器群に対して9世紀後半の年代を考えているが、その土器群には須恵器杯が僅かしか含まれないという点はSD1440・4層出土土器より新しい要素と見られる。したがってSD1440・4層出土土器は、9世紀中葉のものより新しく、9世紀後半のものより古く位置付けることができ、9世紀後葉頃の年代を想定することが可能であろう。

さて、この溝跡については、多賀城南面のまち並みを構成する区画道路の内、南2道路の推定線上にあることが注目される(第1図)。しかし、この溝跡を東西道路の南側溝に比定した場合、それに対応する北側溝の位置が調査区外にあることから、可能性の指摘にとどめざるを得ない。まち並みを構成する道路の側溝についてみると、上幅が6mに及ぶものは東西道路東道路の北側溝があるのみであり、これは北側の湿地帯からの湧水に対応するため、路面を著しく減じてまで大規模にした特殊な例とみられることから、5mを超える規模のものは通常の道路側溝とは考え難い。規模が大きいことに注目するならば、運河状の大溝であった可能性も考慮すべきかもしれない。

SD1440に連結するSD1445東西溝はT3～5トレンチにおいても確認しており、南北約60mにわたって直線的に伸びている状況が明らかになった。その東側で検出したSX1446との関係では、SD1445の埋土上層がSX1446を覆っている状況を確認している。またSD1445の西側までは伸びていない状況を考えれば、SD1445の東側に耕作域が広がっていた状況を想定することが可能であろう。

T3トレンチで発見したSX1459は東西方向に延びる小河川と考えたものであるが、現在のところ埋蔵文化財調査包蔵地としての山王遺跡の範囲は本調査区の南端部までとなっており、それより南側における遺構の有無については今後確認すべき問題となろう。

中世頃と考えられる遺構としては、T1トレンチのSD1441・1550、T2トレンチのSD1455・1456、T5トレンチのSD1460・1461などがある。それらの関係について詳細は不明であるが、SD1441の埋土の状況が上下2層に大きく区分され、下層の5～8層を埋土とする深いものと、上層の1～4層を埋土とする浅いものの新旧2時期に区分できると仮定するならば、T2・T5トレンチにおける2条の溝跡は、SD1441の上層と下層それぞれの時期に対応する区画溝の可能性があろう。年代については不明であるが、T1トレンチでは中世に流通した中国銭「開元通寶」(初鋤年代:845年)が1点、I層から出土している。



第8図 中世の遺構推定図

#### 4 まとめ

- (1) 調査区全体から古代及びそれ以降の遺構を多数発見した。
- (2) 南2道路の推定線上で9世紀から10世紀にかけての東西方向の大溝を発見した。
- (3) 中世頃とみられる大溝を発見し、屋敷の区画の可能性が考えられた。

(註1) 平成22年3月 報告書刊行予定

(註2) 註1と同じ

(註3) 高橋照彦「近江産縁軸陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集 1994

(註4) 福島県文化財調査報告書第353集『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書2 小又遺跡 下宮崎A遺跡』1998

(註5) 多賀城市文化財調査報告書第41集『市川橋遺跡－第19次調査報告書－』1996

(註6) 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅵ』宮城県多賀城跡調査研究所 1980

(註7) 宮城県多賀城跡調査研究年報1992「Ⅱ 第62・63次調査」「多賀城跡」1993

(註8) 宮城県多賀城跡調査研究年報1991「Ⅲ 第61次調査」「多賀城跡」1992

写真図版1(山王遺跡第73次調査)



1 T1トレンチ(西より)



2 同上(南より)



3 同上(南より)

山王遺跡第73次調査

写真図版2(山王遺跡第73次調査)



1 T1・4トレンチ(北より)



2 T1トレンチ  
(東より)

山王遺跡第73次調査

## XIV 山王遺跡第74次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、南宮宇伊勢地内における店舗建設に伴うものである。平成21年5月8日に申請者より山王遺跡の北端部における店舗建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。当該地周辺では、東側と北側を画する県道「泉一塩釜線」の道路改良工事に伴い、平成8年度と平成14年度に宮城県教育委員会によって発掘調査が実施され、主に古代と近世の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡等の数多くの遺構が発見されている（註1）。今回の工事計画では、建築物の基礎工事の掘削の深さは盛土内に収まるが、対象面積が2,119m<sup>2</sup>と広いことから遺構の分布状況や構成を把握するために確認調査を実施したものである。6月23日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、6月24日から現地調査を開始した。

調査においては、対象地の現況と隣接する道路部分での遺構分布状況を考慮して、幅15m、長さ5.8～20.7mの調査区（トレンチ）を8箇所に設定した。これらについては、東端部と中央部に設定した南北方向のものを1・2

トレンチとし、東西方向のものは東側から順に3～8トレンチとした。対象地内では、現代の盛土が非常に厚いことが予想されたため、2台の重機を使って掘り下げを行った。その結果、遺構検出面までの深さは1.8～2.3mであった。北西部の6トレンチから順に遺構検出作業を行い、すべてのトレンチで遺構を検出したことから、トレンチごとに写真撮影と1/20の縮尺で平面図作成を行った。調査は、7月3日に東端部の1トレンチでの作業を終え、7月7日に器材の撤収を行って終了した。

### 2 調査成果

#### (1) 発見遺構と遺物

##### 1トレンチ

東端部に設定した幅1.5m、長さ11.8mの南北方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.2～4.3mである。北半部では、直径15～25cmの小柱穴のまとまりがみられる。いずれも、埋土の土色はオリーブ黒色土で



第1図 調査区位置図

共通しているが、北端部付近では灰白色火山灰を斑状に若干含むものが半数程度認められる。また、トレンチ中央部付近では約40cmの方形に近い平面形を持つ3基の柱穴が、ほぼ等間隔で南北方向に並ぶことが確認できる。南側では溝跡と土壤が重複するが、このうち新しいものは埋土が黒色粘質土で共通する。特に南端部の東西方向に延びる溝跡は、その配置状況からみて東側で実施した宮城県教育委員会の平成8年度調査Ⅺ区で検出した近世の区画溝であるS D 3396溝跡に接続する可能性が強い。

## 2 トレンチ

中央部に設定した幅1.5m、長さ9.3mの南北方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.3m前後である。南半部では平面形が方形を呈する遺構を3基検出した。このうち、中央のものは一辺約30cmと他に比べ小規模であり、埋土中に灰白色火山灰を斑状に若干含んでいる。トレンチ中央部から北側にかけては幅1.15m以上の南北方向に斜行する溝跡を検出した。重複関係から他の遺構より新しく、埋土は黒色粘質土である。その配置状況や規模からみて北側で実施した宮城県教育委員会の平成14年度調査1区で検出した近世のS D 3766溝跡の延長部である可能性が強い。

## 3 トレンチ

東側中央部に設定した幅1.5m、長さ7.2mの東西方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.2m前後である。溝跡や柱穴を検出したが、分布状況は他のトレンチに比べやや希薄である。溝跡は、東西方向に延びるものと南北方向に斜行するものがある。

## 4 トレンチ

南東部に設定した幅1.5m、長さ5.8mの東西方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.1～4.3mである。東半部を中心に規模の大きな東西方向の溝跡と考えられる遺構等を検出した。これらは、埋土が黒色粘質土で共通する。一方、西半部で検出した小規模な溝跡の埋土はオリーブ黒色土である。なお、トレンチ北東部にかかる溝跡は、1トレンチ南端部で検出した溝跡の延長部である可能性が強い。

## 5 トレンチ

中央部南側に設定した幅1.5m、長さ9.3mの東西方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.2～4.3mである。溝跡を中心とした遺構を検出した。溝跡は、方向、埋土の状況とも様々である。トレンチ東側では、一辺70～80cmの方形の遺構を検出した。柱穴もしくは土壤と考えられる。

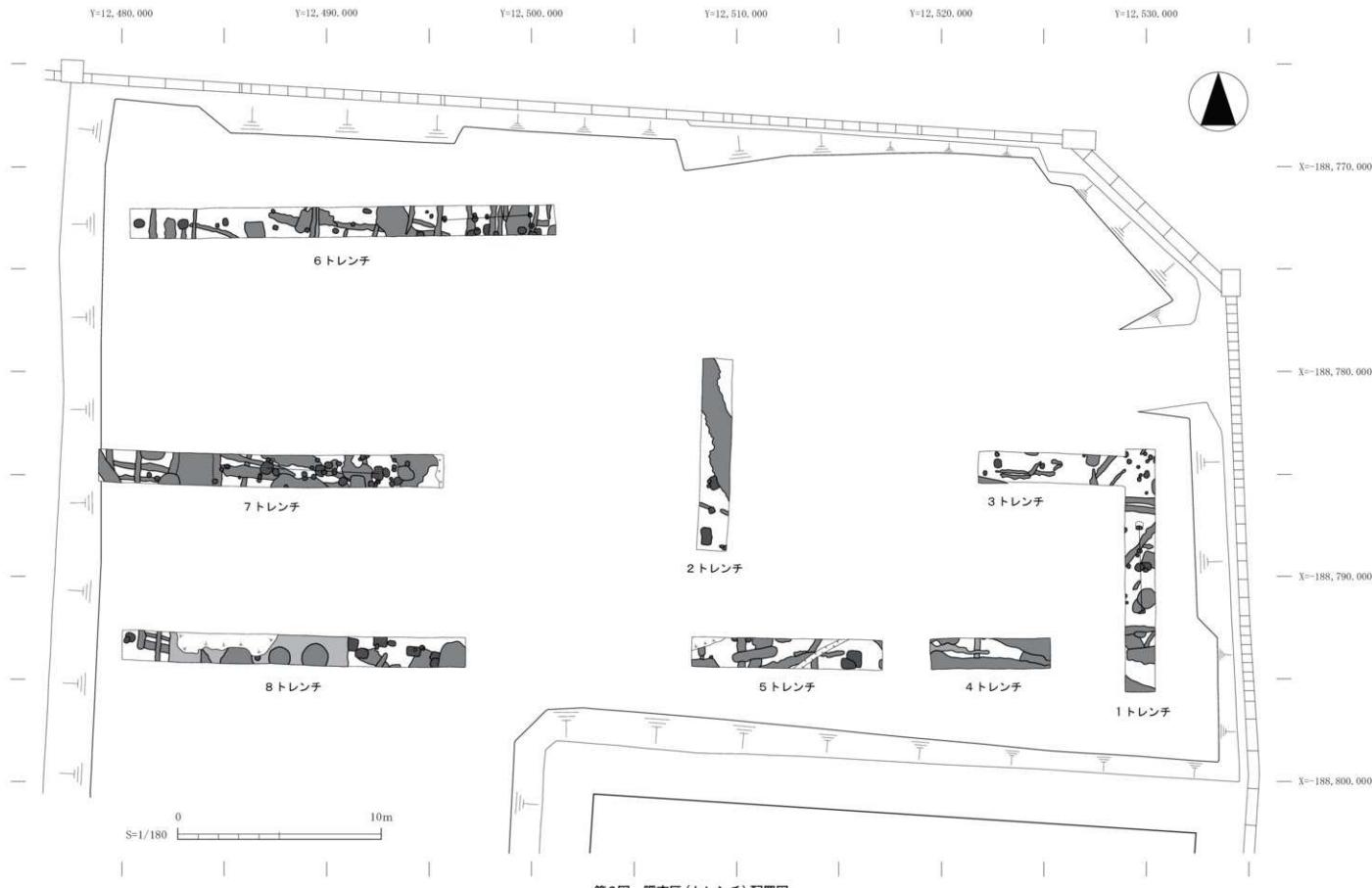
## 6 トレンチ

北西部に設定した幅1.5m、長さ20.7mの東西方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.3～4.4mである。全域にわたって柱穴が多く認められる。これらは、直径15～30cmの円形を呈するものと、一辺35～50cmの方形に近い形を呈するものとに分けられる。前者では、トレンチ東側で検出した東西方向に等間隔で並ぶ、柱材が残存した3基の柱穴がある。このほかの遺構では、東半部において南北方向に平行して延びる小溝群を検出した。

## 7 トレンチ

西側中央部に設定した幅1.5m、長さ16.8mの東西方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.5m前後である。東半部を中心に柱穴が密集する。このなかには、一辺40～70cmのほぼ方形を呈し、東西方向には等間隔で並ぶ3基の柱穴がある。

西半部では、方向、規模の異なる多くの溝跡と土壤等を検出した。



## 8 トレンチ

南西部に設定した幅1.5m、長さ16.7mの東西方向のトレンチで、遺構検出面の標高は4.5～4.6mである。中央部で井戸跡と考えられる円形を呈する遺構を2基検出した。規模は、直径1.05mと1.2mである。また、これらより古いと考えられる柱穴を、トレンチ東半部を中心に検出した。多くは一辺45～70cmの方形を呈するものである。なお、トレンチ中央付近から西側にかけては、井戸跡と考えられる遺構の検出面であり、かつ柱穴を覆っている堆積土が広く分布している。このことから、柱穴の分布がさらに西側に広がることも考えられる。

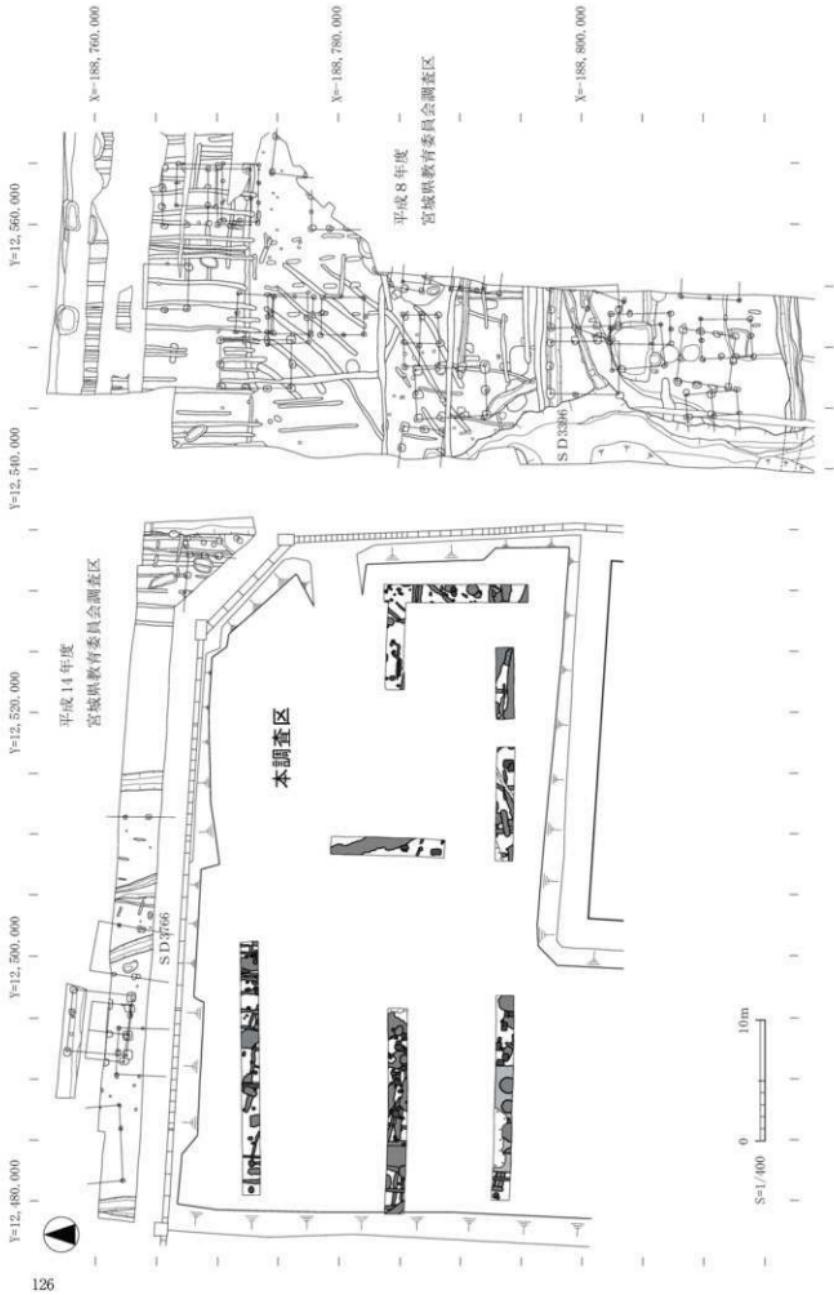
## 3まとめ

本調査では、遺構の掘り下げを行っていないため、各遺構の年代等の詳細は把握していない。よって、分布状況や構成から調査成果をまとめる以下のようなになる。

- (1) 調査対象地の東側と西半部において、建物等を構成するとみられる柱穴を多く検出した。
- (2) 中央部から南東部にかけては、比較的規模の大きな溝跡が多く分布する。これらの中には、宮城県教育委員会の調査において検出した近世の溝跡の延長部と考えられるものもある。
- (3) 北東部については、現況等からトレンチを設定できなかったが、本調査の周辺トレンチと宮城県教育委員会調査の成果からみて、遺構の分布はやや希薄であると推定される。

（註1）宮城県教育委員会・宮城県土木部『山王遺跡町地区の調査—県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ—』宮城県文化財調査報告書第175集 1998

宮城県教育委員会・宮城県土木部『山王遺跡伊勢地区の調査—県道「泉—塩釜線」関連調査報告書Ⅴ—』宮城県文化財調査報告書第198集 2004



第3図 本調査区及び周辺の調査区



調査前状況（西より）



1 レンチ（北より）



2 レンチ（南より）

写真図版1



3 トレンチ（西より）



4 トレンチ（東より）



5 トレンチ（西より）



7 トレンチ（東より）

写真図版2



6トレンチ（東より）



6トレンチ西側（西より）



8トレンチ（東より）

写真図版3

## XV 山王遺跡第75次調査

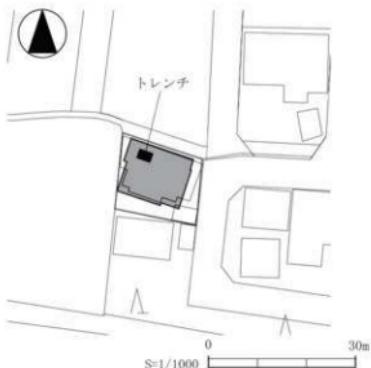
### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年6月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に現表土から約60cmの掘削を行うことが示されており、周辺の調査成果より中世の遺構面が確認されることが予想された。基礎工法の変更は不可能であるとのことから、事前に遺構検出面の深さを探る目的で試掘調査を実施し、遺構が確認された時点での本発掘調査に係る協議を行うこととなった。平成21年7月8日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、7月16日に現地調査を行った。

はじめに、重機により対象地南西部の表土除去を行ったところ、基礎工事の際に掘削する深さについては盛土内で取まることが明らかとなった。一部、遺構検出面の深さを探るために掘り下げたところ、現表土下約13mの深さで黒褐色土層が現れた。調査範囲が狭く出土遺物もないことから詳細は明らかでないものの、周辺の調査成果から判断して中世もしくは近世の堆積層である可能性が考えられた。写真撮影及び調査範囲の記録を作成し、現地調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図



黒褐色土検出状況写真

## ⅩⅢ 高崎遺跡第76次調査

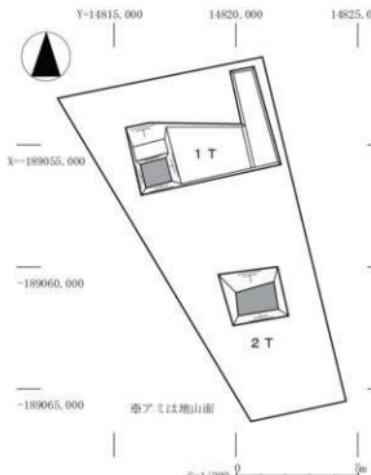
### 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成21年5月23日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事、水道・污水管理設の際に一部地山面まで掘削が及ぶことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、それ以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、7月3日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は7月15日に実施した。対象地の北端に設定した1トレンチでは、盛土と現代の自然堆積層の除去を行ったところ、深さ約1.6mで直接地山面に達した。中央付近の2トレンチでは、1トレンチと同様の層序であり、深さ約2mで地山面に達した。いずれのトレンチも地形の改変を受けており遺構・遺物は発見されなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査地近景(北より)



1トレンチ調査状況(北東より)

## XII 高崎遺跡第78次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅の擁壁設置工事に伴うものである。平成21年6月2日に高崎遺跡内における擁壁工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が、地権者から提出された。計画は、宅地北辺の東半部において延長35m、掘削幅1.3m、最深2.15mの土留擁壁を設置するものである。当該地では、平成18年に宅地造成に伴う確認調査(高崎遺跡第57次調査)を実施しており、古代の竪穴住居跡等を発見している。また、平成19年には東側において道路改良工事に伴う発掘調査(高崎遺跡第65次調査)を実施し、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡等の遺構を発見している。本調査区と同じく宅地内で実施した前者の場合、遺構検出面までの深さが現地盤から約1.8m下であったことから、今回の工事における掘削が遺構面に影響を及ぼすおそれがあったため、今回の調査に至ったものである。7月14日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、7月22日に現地調査を行った。

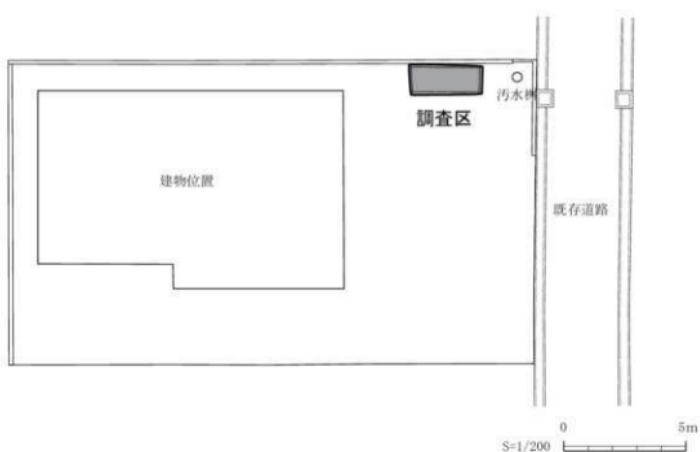
調査は、重機によって現代の盛土等を掘り下げ、現地盤から1.5~1.6m下の地山面で遺構検出作業を行った。調査区の土層堆積状況は、現地盤から約1.2m下までは現代の盛土で、その下には厚さ15~30cmでしよりの弱い黒褐色土がみられる。次に、灰黄褐色土が10~15cmの厚さで堆積し、その下が地山となる。なお、地山面は北側に向かって緩やかに傾斜し、調査区内での比高は約15cmである。

### 2 調査成果

調査の結果、遺構・遺物は発見されなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景(南より)



掘り下げ状況(南より)

### Ⅷ 高崎遺跡第79次調査

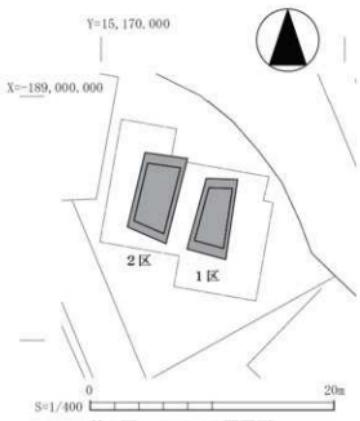
#### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年9月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径約60cm、長さ3.5mの柱状改良杭35本を施すことが示されていた。当該地については、西側から東側に向かって急激に低くなっている。宅内の地盤と東側擁壁底面の比高は3.5mにも達していた。このため、遺構の有無を探るために直ちに確認調査を実施し、確認された時点で再度調査時期についての協議を行うこととした。平成21年9月18日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、9月25日に現地調査を開始した。

はじめに、重機により対象地東側(1区)の表土除去を行ったところ、現表土下約28mで岩盤の基盤層を確認し、西側(2区)でも約24m掘り下げたところ同様の基盤層を確認した。平面の精査を行ったが、いずれの調査区からも遺構遺物は見られなかった。写真撮影及び掘削箇所の平面図を作成し、調査的一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図



2区全景写真

## XIX 高崎遺跡第80次調査

### 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、個人住宅の擁壁設置工事に伴う発掘調査である。平成21年10月7日に地権者より当該地区における擁壁工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は現在斜面となっている現地盤を長さ約25mにわたり、幅2~3m、深さ0.35~2.25m掘削し法面を造るというものであった。埋蔵文化財への影響が懸念されたことから確認調査を実施する方向で協議を進め10月23日に地権者より調査に関する承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は10月29日に実施した。対象地区内に3ヶ所のトレンチを設定した。1・2トレンチでは、表土下1~2cmで地山面が現れたが、3トレンチでは現代の盛土が約60cmあり、それを除去したところ直接地山面に達した。いずれからも遺構・遺物は発見されなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



1・2トレンチ調査状況(北西より)



3トレンチ調査状況(西より)

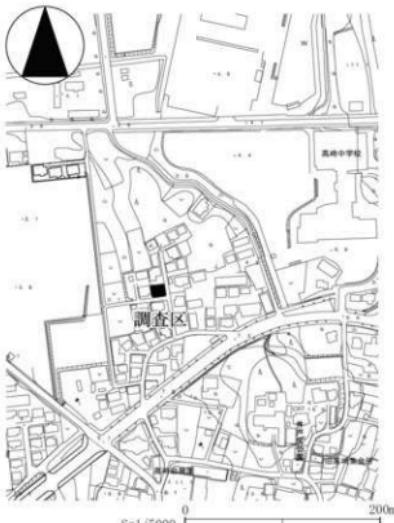
## XX 高崎遺跡第81次調査

### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

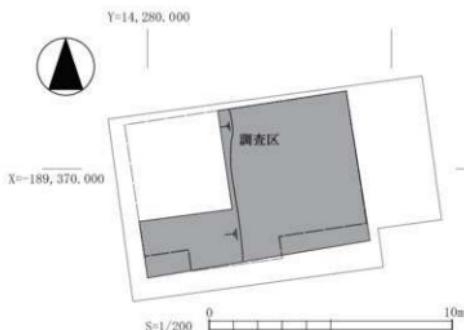
本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年12月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に約40cmの掘削工事を行うことと、最深60cmの給排水工事を行うことが示されていた。本遺跡内では現表土下30cm前後で古代の遺構が確認されることが多く埋蔵文化財への影響が懸念される一方で、当該地周辺についてみれば調査実績が少なく、遺構の有無及び分布状況を把握することが困難であった。施工業者との協議の中で調査期間の提示を求められたこともあり、早急に確認調査を実施し遺構が確認された時点で再度調査時期についての協議を行うこととした。平成22年1月5日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、1月8日に現地調査を実施した。

重機により表土除去を行ったところ、対象区内は中央付近から西側に向かって地形的に急激に低くなっていることを確認した。一方、東半部については周辺の遺構検出面と近似する褐色粘質土が現れたが、

遺構・遺物は発見できなかった。調査区の全景写真と平面図を作成し、調査の一覧を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



調査区全景写真(西より)

## XII 高崎古墳群第6次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、高崎二丁目地内における賃貸住宅新築工事計画に伴う確認調査である。平成21年9月、地権者より当該地における賃貸住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、対象地を現状のまま利用して3棟の賃貸住宅を新築し、住宅基礎工事に際しては掘削の浅いベタ基礎を採用するというものであった。また給排水工事や土留設置工事ではそれぞれ最深135cm、70cmの掘削を施すというものであった。当該地の南側には既に2棟の賃貸住宅が建設されており、平成19年度にはその住宅に至る通路建設に伴って確認調査を実施し（第4次調査）、東西大路東道路に関わると見られる古代の整地層を発見している。また、表土の厚さが約50cmであったことから、今回の工事による掘削が遺構面に達する可能性がきわめて高いと判断された。地権者側では極力遺構面を掘削しない工法

を検討するとしていたが、給排水工事や土留設置工事については計画変更が不可能であったことから、工事によって遺構が破壊される部分の特定を行うこと、及び東西大路東道路に関わる古代の遺構の分布状況を確認することを目的として造成前に確認調査を実施する方向で協議を行ったところ、地権者の了解を得ることができた。

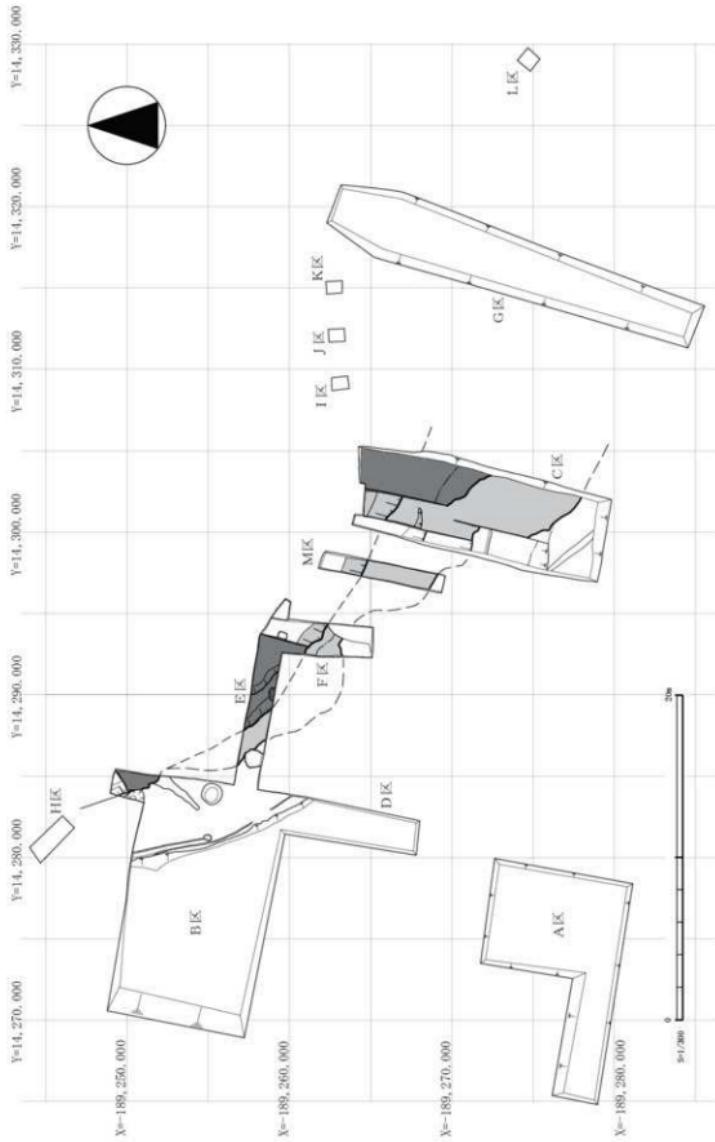
調査区の西側はかつて南側から延びる狭い尾根状地形であり、城南地区区画整理事業に伴って確認調査を行っており、終了後に削平されていた場所であったが、その周辺において東西大路東道路の存在を確認できなくなっていたことから、敢えて調査区を設定した。

調査は11月5日から調査を開始し、はじめに対象地区西側にA・B区を設定した。重機によって表土の除去を行ったところ、A区全体とB区西半部は凝灰岩質の岩盤まで完全に削平されていた。11月6日、A・B区を繋ぐ南北トレンチ（D区）を設定し、道路遺構に關わる側溝の確認を行ったが、遺構は一切確認でき



第1図 調査区位置図

第2図 調査区全体図



なかった。対象地区の中央部には南北方向の通路によって東西に区分されており、東側が西側より一段高い平場状の地形を呈していたため、通路に近い部分にC区を設定して掘り下げたところ、現代の盛土が高く堆積しており、平場全体が比較的新しい時期の造成によるものであることが判明。11月7日、C区をさらに掘り下げたところ、古代の遺物を含む黄褐色土層を確認し、第4次調査で発見した整地層と同一のものであると考えられた。11月17日、B区から東側に延びるE区を設定。C区と同様の整地層とそれを覆う黒褐色土を検出。11月19日、C区の東側に南北方向のG区を設定。地山まで完全に掘削が及んでおり、遺構・遺物は一切確認できなかつたが、地山面に残された重機の爪痕に灰白色火山灰が混じつておらず、この近辺にもかつては火山灰が堆積していた可能性が考えられた。11月27日より平面図・断面図の作成を行い、29日に野外調査を終了した。

なお、この確認調査により、土留設置工事等によって遺構が破壊される範囲については、対象地区中央を南北に延びる通路に面した僅かな部分であることが判明し、その部分の記録保存については、基本的に原因者の負担として12月17～22日に調査を行つた（第8次調査）。調査に際しては原因者側から重機と作業員の提供を受け、時間的には実動わずか1日の小規模なものであった。その成果は第6次調査と併せて報告することが望ましいと考え、本報告に収録した。

## 2 調査成果

### （1）層序

今回の調査では、地山面に施された整地層（S X 11）と、それを覆う黒褐色土（II層）を確認した。C・M区では地山上に堆積した旧表土も認められ、特にM区では低地に移行する部分において、有機質の旧表土を明瞭な状況で確認することができた。なお、II層は第4次調査においてSD 12溝跡の埋土と捉えたものであるが（註1）、今回の調査によって湿地側に溝の北壁の存在は想定できないと考えられたことから、整地層より新しい堆積層であると訂正しておきたい。

### （2）発見した遺構と遺物

今回の調査によって発見した遺構は古代の整地層と溝跡1条である。

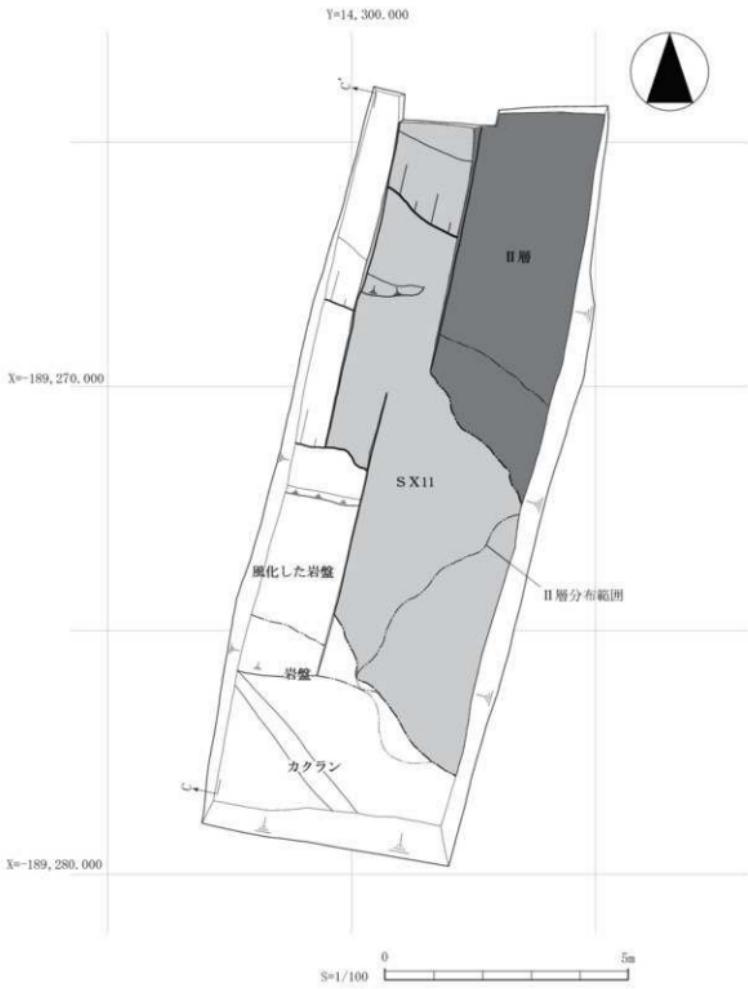
#### S X 11

B区北東部、C・E・F区及びM区で発見した古代の整地層である。南側から北側の低湿地に向かって傾斜する丘陵の縁辺部に対して行った整地であり、基盤層まで掘り下げたC・M区では旧表土上に施した状況を確認している。その分布範囲は、B区北東部からC区まで断続的ではあるが約30mにわたって検出しており、丘陵部からの整地面はC区で最も広く、10.5mを計る。いずれの調査区においても、低湿地に面した側は急な傾斜面となっており、その整地が平坦面を造成したものであったことを窺わせる。他の遺構とは重複していない。整地層は上下2層に大別され、上層は固く締まっているが、下層は上層ほどの締まりではなく、全体として版築状に突き固められたものではない。厚さは15～70cmである。

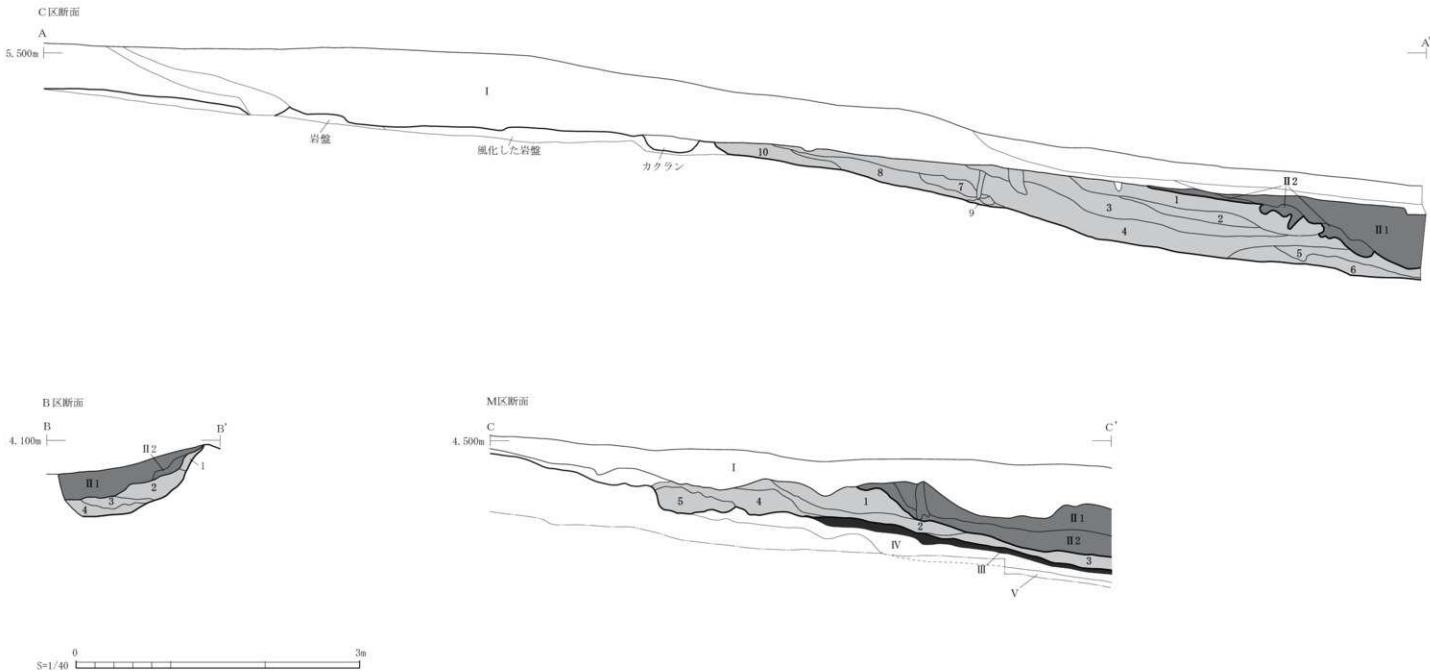
遺物は、1層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、2層からは土師器杯、須恵器杯・甕が少数出土している。1層からはロクロ調整による土師器杯・甕が出土しているが、それ以外に特徴的な部分がなく、詳細は不明である。須恵器杯は1・2層からヘラ切りされたものが出土している。

#### SD 13

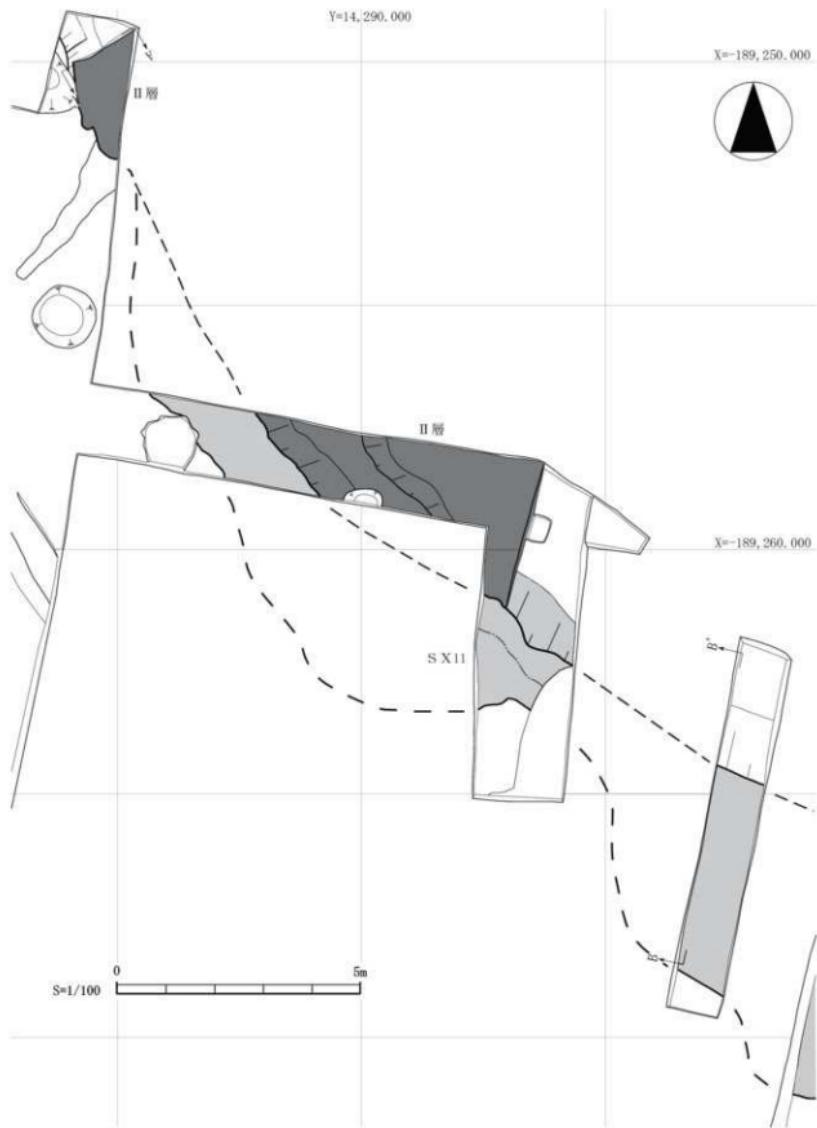
B区北西部の地山面で発見した南北溝跡である。II層によって覆われており、検出したのは3.3mであ



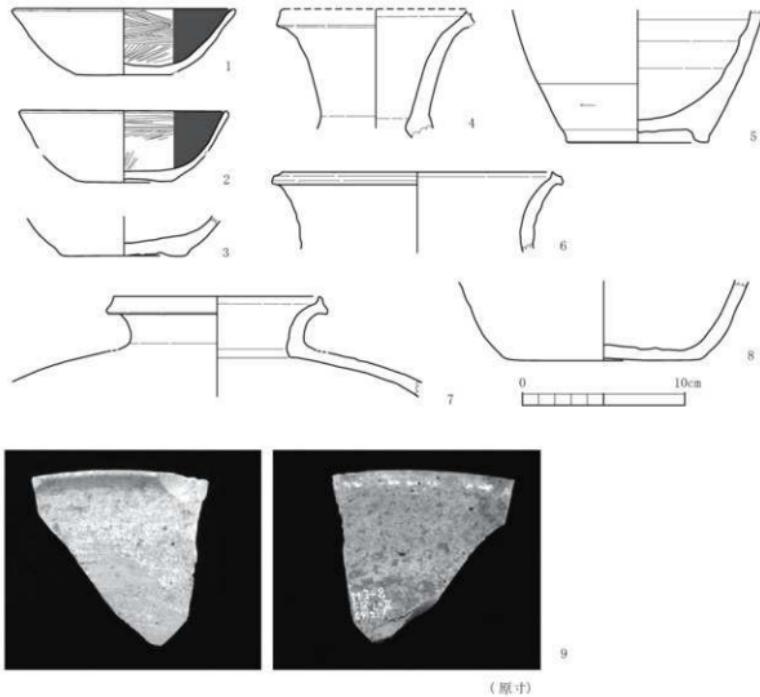
第3図 C区平面図



第5図 C・M・B区断面図



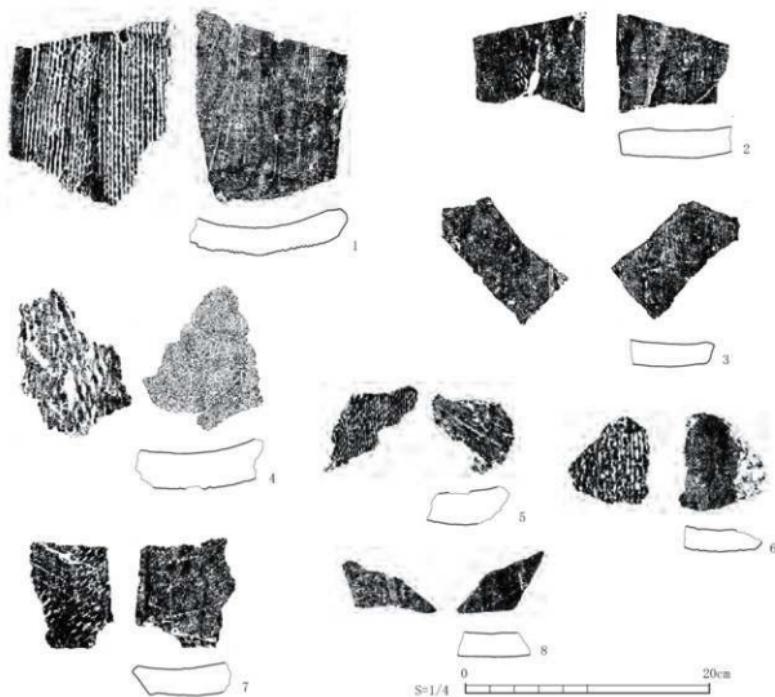
第4図 B・E・F・M区平面図



(原寸)

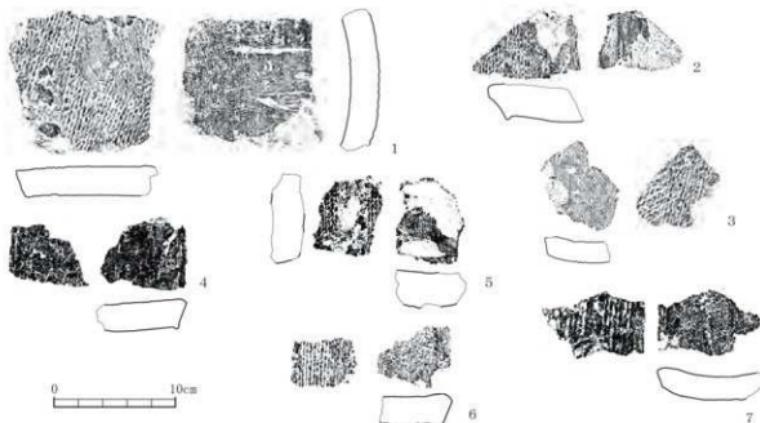
番号	種類	西土地域 層位	特徴		13件 残存率	成形 残存率	器高	万葉 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土器器 杯	正区 II層	L1~体部:ロクロナデ 底部:赤焼仕上	口~底部:ハラミガキ・黒色乳理	(16.8) 5/24	(58) 16/24	41		R 15	
2	土器器 杯	正区 II層	L1~外部:ロクロナデ 底部:回転熱切引	口~底部:ハラミガキ・黒色乳理	(12.8) 7/24	58 24/24	44		R 14	
3	須恵器 壺	C区 III層	体部:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	体部:ロクロナデ底部:ロクロナデ		76 23/24			R 3	
4	須恵器 長盞瓶	C区 II層	L1部:ロクロナデ	L1部:ロクロナデ					R 22	大口壺 L1部約122mm
5	須恵器 壺	S X II-1層	C区 体部:ロクロナデ→回転ヘラケズリ、底部: 回転ヘラケズリ→高台堅付:ロクロナデ	体部:ロクロナデ底部:ロクロナデ		(88) 10/24			R 1	底部: ヘラガキ
6	須恵器 壺	S X II-2層	L1縁部:ロクロナデ	L1縁部:ロクロナデ	(17.9) 5/24				R 27	
7	須恵器 壺	S X II-1層	C区 体部:ナギ	体部:ロクロナデ底部:工具による ナギ	(13.6) 1/24				R 13	
8	須恵器 壺	C区 II層	体部:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	体部:ロクロナデ底部:指擦痕		(12.2) 9/24			R 31	
9	灰陶器 梶	C区 II層	L1縁部:ロクロナデ。灰陶ハケ塗り	L1縁部:ロクロナデ。灰陶ハケ塗り					R 3	茶濃度

第6図 出土遺物(1)



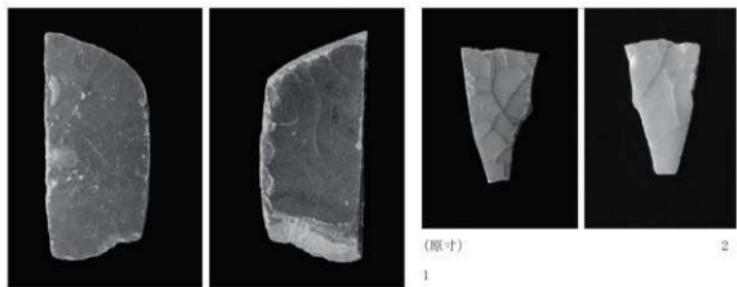
番号	種類	出土地区 層位	特徴		多賀城政庁分類	登録 番号	備考
			外 面	内 面			
1	平瓦	C区 II層	つぶれ気味の縛押き	右目→ナデ	II B	R 25	
2	平瓦	E区 II層	右目・縛押き→ナデ	右目→ナデ	I A	R 8	
3	平瓦	C区 I層	右目→ナデ	四型凸压痕・ナデ	I A	R 20	
4	平瓦	B区 II層	つぶれ気味の縛押き	右目→ナデ	II B	R 4	
5	平瓦	C区 II層	縛押き	右目		R 24	
6	平瓦	C区 I層	つぶれ気味の縛押き	右目→ナデ	II B	R 32	
7	平瓦	C区 I層	縛押き	右目→ナデ	II Bb	R 7	
8	平瓦	E区 II層	右目→ナデ	四型凸压痕	I A	R 9	

第7図 出土遺物(2)



番号	種類	出土地区 層位	特徴		多賀城行政分類	登録 番号	備考
			外面	内面			
1	平瓦	C区 II層	つぶれ気味の縦引き	柾目→ナゴ	II-B	R.23	
2	平瓦	E区 II層	つぶれ気味の縦引き		II-Bb	R.10	
3	平瓦	C区 II層	つぶれ気味の縦引き	柾目→ナゴ	II-B	R.26	
4	平瓦	F区 II層	四型台形窓	柾目→ナゴ		R.1	第8次調査
5	平瓦	F区 II層	つぶれ気味の縦引き	柾目		R.2	第8次調査
6	平瓦	M区 II層	つぶれ気味の縦引き	柾目		R.5	第8次調査
7	平瓦	F区 II層	つぶれ気味の縦引き	柾目		R.4	第8次調査

第8図 出土遺物(3)



番号	種類	出土地区 層位	特徴		登録 番号	備考
			外面	内面		
1	青磁 梗	E区 I層	体部: 塵オリーブ(7.5GY84/2) 鉄化文	体部: 灰オリーブ(7.5GY4/2) 鉄化文	R.29	
2	青磁 梗	F区 II層	体部: 緑灰(7.5GY6-1) 薙介文	体部: 緑灰(7.5GY6-1)	R.30	

第9図 出土遺物(4)

表1 出土遺物集計表(1)

種別	器種	分類	部位	成形・調整手法	A区		B区		C区		E区		F区		G区		H区		Z
					Ⅰ型	Ⅱ型 SNS	Ⅰ型	Ⅱ型 RIN	Ⅰ型 SNS	Ⅱ型 RIN	Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅱ型	不明
土器	杯	A類	口																
			体	底															
		B類	口					3				4	11		2			6	
			体					3	1	1				3					
			回転ヘラケズリ			1							1					1	
	瓶	A類	手持ちヘラケズリ						1				2					1	
			ヘラ切り																
		B類	静止赤切り									1	2					1	
			回転赤切り								1		8					1	
			(赤切り)		4					1									
	(不明)				3	1			1	6	1	10	30		12			7	
土器付	高台付杯	底																	
	壺	A類	口												1				
			体	ハケメ	1						1		1					1	
		B類	底	ヘラケズリ															
			不明																
			本割れ																
	瓶	口		3	2					1	2	2	1					4	
		B類	体	円錐															
			ヘラケズリ																
			口クロナギ		2	1				2	1	4						3	
			底	不明															
	(不明)				11	7			12	50	2	9	25		5	20		45	
土器付付	壺	脚部												1					
	杯	A類	口		1	1		1	4	2		6						1	
			体		2	1		1	8	7	1	2	2	1		1	3		
		B類	回転ヘラケズリ		1													1	
			手持ちヘラケズリ																
			ヘラ切り		1		1	1		1	1							3	
	瓶	A類	静止赤切り																
			回転赤切り							1		2		1					
		B類	(赤切り)							2	1							1	
			高台付																
			反耳杯																
土器付付付	壺	口							3	1	3	1	1		1		1		
	壺	A類	体		6	11	15	4	3	125	62	13	20	18	8	14	1	1	
			底							3								19	
		B類	口									1		1				1	
			体			2	3		18	7	1	7	1	1	5			1	
			底			1	1		4	1	1		1	1				1	
	瓶	口		1						1	1							2	
		B類	体															1	
			底																
			高台付															3	
	平瓦	桙(直)	口							1									
			体																
		桙	底							1	1	2							
			口																
			体																
		平瓦	底																
瓦類	丸瓦					2	1	1	4	4	2	3			3				
	加厚土器								1				4						
	砥石											2							
	青磁										1			1					

表1 出土遺物集計表(2)

種別	器種	分類	部位	成形・調整手法	F 瓦	F 瓦	M 瓦
土器部	杯	A類	L1				
			体				
		B類	L2				
			体				
			回転ハラケズリ				
			手持ちハラケズリ				
			底				
			ハラ切り				
			静止あ切り				
			回転あ切り				
			(底切り)		1	4	
		(不明)					
土器部	高台付杯	A類	底				
			L1				
			体				
			ハラメ				
			ハラケズリ				
		B類	不明				
			底				
			木質痕				
			底				
			不明				
		(不明)				4	3
		脚部					
土器部	瓶	杯	L1				
			底				
			回転ハラケズリ				
			手持ちハラケズリ				
			底				
			ハラ切り				
			静止あ切り				
			回転あ切り				
			(底切り)				
		(不明)					
土器部	高台付杯	高台付杯					
		足置杯					
		瓶					
		壺	L1				
			体		5	11	2
			底		1	1	
		瓶	L2				
			体		1	1	1
			底		1		
		高台付杯					
瓦器陶器部	平瓦	筒(II)	L1				
			体				
			底				
			(不明)		1		
		板	L1				
			体				
			底				
			(不明)				
		平板	I A類		1		
			II B類				
		II B-a類	II B-a類				
			II B-b類				
		II B-b 2類	II B-b 2類		1		
			II C類				
		(不明)				1	
		丸瓦				1	
		鉢瓦上層					
		瓦石					
		青磁					

る。南側から北側に向かって幅が広くなっている、最も狭い部分で25cm、広い部分で80cmを計る。方向は北で約40度東に偏している。埋土は褐色土であり、炭化物を含み、しまっている。

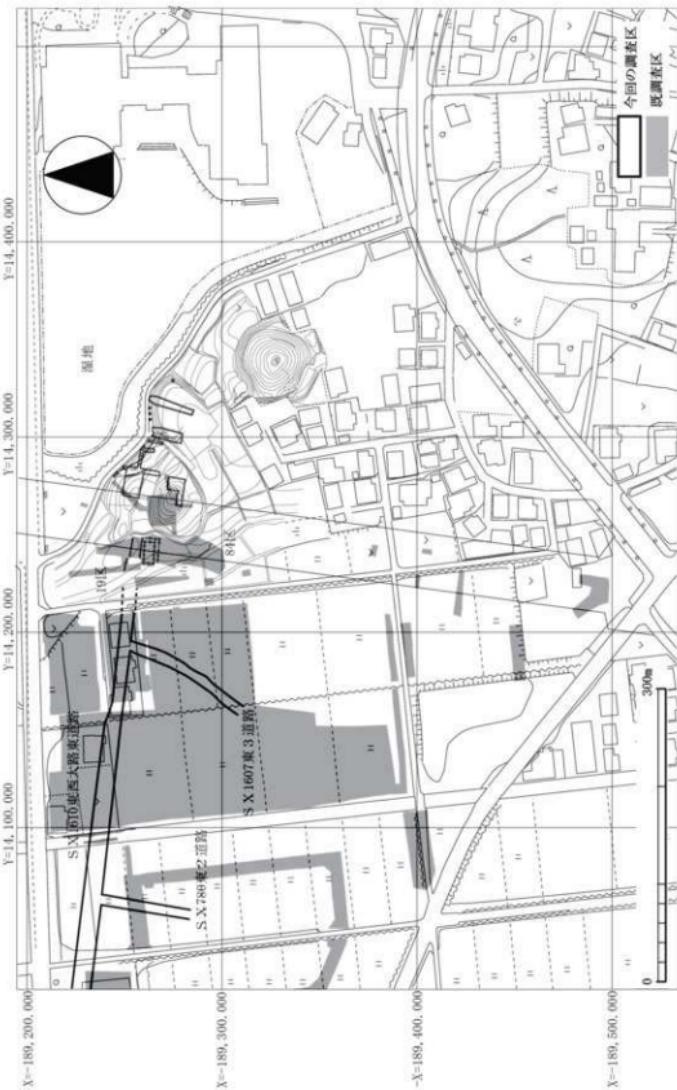
### 3 考察

今回の調査において確認できた遺構は、丘陵斜面に整地して造成された平坦面とそれを形成する整地層(S X 11)、及び溝跡(S D 13)1条である。出土した遺物についても、中世の青磁が2点出土した以外は土器・陶器・瓦などすべて古代のものであり、遺構のあり方とも矛盾しない。溝跡については平面的な検出にとどまつたため、その性格については何ら手掛かりも得られなかつたが、整地層については東西大路東道路との関わりからいくつかの問題点があり、以下それについて検討してみたい。

**東西大路東道路をめぐる問題点:** 調査に至る経緯について先に述べたところであるが、今回の調査の目的の一つとして掲げた東西大路東道路に関わる問題について触れておきたい。

東西大路東道路は多賀城外の幹線道路である東西大路の延長線上にある。多賀城外におけるまち並みが、内陸方面に通じる東西大路沿いに広がっている状況に注目すれば、この道路は庵寺へ通じる道路であったと考えられる。城南地区を対象とした区画整理事業に係る発掘調査(平成9~14年度)では、約150mにわたって平面的に検出してきたものであるが、城南地区東端部には高崎古墳群が立地する狭い尾根が東南から北西方向に延びてきており、その西側の沖積地までは確認できたものの、尾根の西側ではその存在を推定するにとどまり、それより西側については全く手がかりがない状態であった。ところが平成19年度に実施した第4次調査において地山上に施された古代の整地層を発見し、その地点が東西大路東道路の延長線上にあったことから道路遺構の存在した可能性が高まってきた。

今回の調査区は東西約70m、南北約50mの広さを有し、東西大路東道路がそのままの方向を保つて延び



第10図 調査区と道路構造

ると仮定するならば確実に捉えることができる位置にある。しかし、対象地区の東半部は現代に造成された平場であり、盛土は厚く、しかもその造成時には丘陵を削り取る大規模な地形の改変が行われていた事実が判明したことから、旧地形を残す範囲は東西約25m、南北約30mであった。

**遺構の年代**: S X 11からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、丸瓦など出土している。年代推定の資料となり得るものはきわめて少ないが、土師器杯が7点、甕が1点出土しており、すべてロクロ調整を行ったものである。土師器杯1点は底部を手持ちヘラケズリしたものである。須恵器杯は2点出土しており、いずれも底部の切り離しはヘラ切りである(第6図3)。ほとんどが口縁部・体部の破片であることから明確ではないが、多賀城周辺において、ロクロ調整を行った土師器杯とヘラ切りで切り離された須恵器杯の組み合わせは8世紀後葉以降に現れることが確認されており(註2)、この整地層が8世紀後葉以降に形成されたと考えることができる。

S X 11の北側斜面には各調査区ともⅡ層の堆積が見られ、土師器杯・甕・瓶、須恵器杯・甕・瓶、平瓦、丸瓦、製塙土器など出土している。土師器杯については底部を回転ヘラケズリしたものや手持ちヘラケズリしたものもあるが回転糸切り(糸切りを含む)によるものが10点と多く、須恵器杯についても切り離しが明らかなものの3点はいずれも回転糸切り(糸切りを含む)であり、S X 11よりは確実に新しい様相を呈している。9世紀中葉頃に位置づけられる多賀城跡第62次調査の第II群土器に類似しており、同様の年代が考えられる(註3)。Ⅱ層は、C区ではS X 11上面の窪みに堆積している状況も確認しているが、それ以外の多くの地点では北側の斜面に厚く堆積しており、Ⅱ層出土遺物の年代が直ちにS X 11の下限を示すか否かは注意が必要であろう。

**遺構の性格**: 最後に、S X 11の性格について触れておきたい。S X 11が東西大路東道路の延長線上にある整地層であることから、まずは路面構築の整地層であるかどうかが問題となろう。北側に向かって低くなる傾斜面に整地して平坦面の拡幅を行っていること、整地層でありながらその上面で他の遺構を全く確認できなかったことなどは、S X 11を路面整地と考える根拠とることができ、Ⅱ層の堆積する北側の斜面は路肩と見ることも可能である。しかしその一方で、通常道路遺構に伴っている側溝が全く検出できなかったという問題点が残る。その痕跡も残さないほど大規模な削平を想定すると現況より著しく高い路面の存在を想定せねばならず、地形的に無理があろう。

S X 11を道路遺構と断定するには資料不足であるが、東西大路東道路の延長線上にあり、上面に他の造作物を伴わない整地層であることを評価して「東西大路東道路に関わる整地層」と考えておきたい。

**古代以外の遺物**: E区から内面に劃花文を印刻した青磁碗、F区から外面に蓮弁文を陽刻した青磁碗がそれぞれ1点出土している。いずれも龍泉窯系に分類されるものであり、12・13世紀頃のものと推定される。前者はⅠ層から、後者は古代の堆積層であるⅡ層から出土しているが上層からの混入と考えられる。沖積地に張り出したこの低丘陵における、中世の何らかの活動を示すものであろう。

(註1) 多賀城市文化財調査報告書第96集「II 高崎古墳群第4次調査」「多賀城市内の遺跡1－平成19年度発掘調査報告書 ほか－」2009

(註2) 多賀城市文化財調査報告書第70集「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書 II -」2003

(註3) 宮城県多賀城跡調査研究年報1992「II 第62・63次調査」「多賀城跡」1993

写真図版1 (高崎古墳群第6次調査)



航空写真(昭和22年撮影)



航空写真(昭和36年撮影)

写真図版2 (高崎古墳群第6次調査)



1 航空写真(平成4年前後の風景)



2 調査風景(東より)



3 B区Ⅱ層堆積状況(南東より)

高崎古墳群第6次調査

写真図版3 (高崎古墳群第6次調査)



1 C区・S X 11(北より)



2 C区・S X 11とⅡ層堆積状況(東より)



3 C区全景(南より)

高崎古墳群第6次調査

## XII 西沢遺跡第16次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本調査は、専用通路整備工事に伴う発掘調査である。平成21年7月30日に申請者より当該地における本工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は道路北側部分保護のため幅2mにわたって地山を（最深1m）掘削し法面を造るというものであった。そのため埋蔵文化財への影響が考えられ、本発掘調査を実施するに至ったものである。その後、8月28日に地権者より調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、9月8日から調査を開始した。

はじめに重機を使用して表土の除去作業を行った。並行して作業員を動員して地山面での遺構検出作業を行う。9日には、遺構の分布状況が把握され、調査区の東半部に柱穴、溝跡が検出された。10～16日に

は遺構の掘り込みと並行して、随時平面・断面図の作成と細部の写真撮影を行う。17日、補足調査、調査区の全景写真撮影、器材の撤収を行って現地調査を完了した。

### 2 調査成果

#### （1）発見遺構

表土（厚さ40cm前後）下の地山面（岩盤層）において遺構を検出した。

##### S B 536 捜立柱建物跡

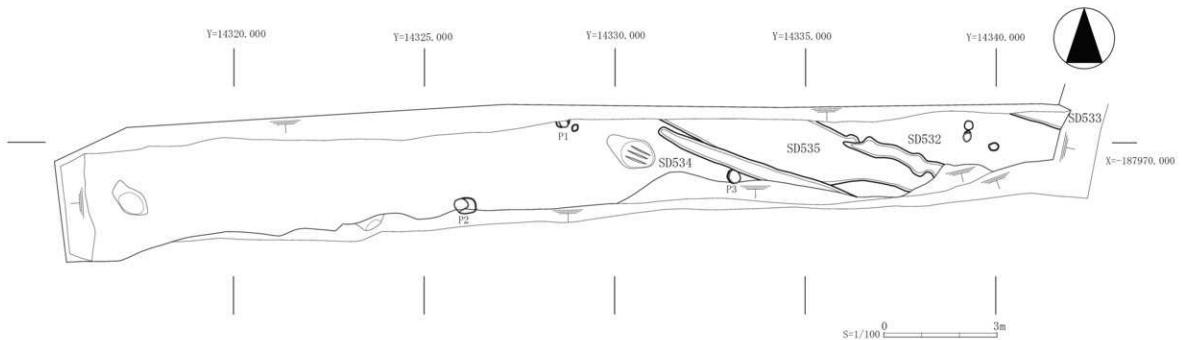
調査区東半部で発見した東西2間の建物跡であり、南側柱列であると考えられる。S D 532・535と重複し、それらよりも古い。柱穴は3基確認しており、全てで柱抜取り穴を確認した。柱間は西から約2.2m、約2.2mで、総長約4.4mである。方向は東で約12度北に偏している。柱穴は一辺約20cmの隅丸方形で、深さは28～38cmである。掘り方埋土は岩盤粒を多量に含む褐灰～にぶい橙色土である。遺物は出土していない。

##### S D 532溝跡

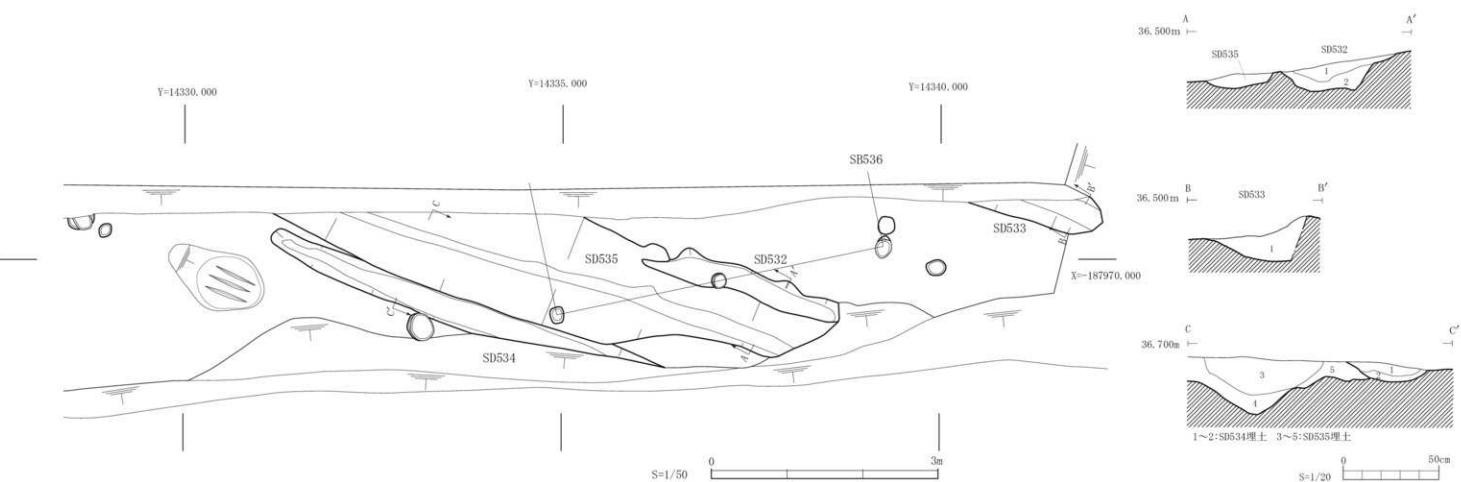
調査区東半部で発見した東西方向の溝跡である。S D 535・536と重複し、それらよりも新しい。規模は長さ2.76m以上、上幅0.5m、下幅0.27m、深さ8～15cmである。断面形は逆台形である。方向は東で約15度南に偏している。埋土は2層に分けられ、1層が岩盤粒を含むにぶい黄橙色土、2層が褐色土である。遺物は須恵器瓶の破片が1点出土している。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構全体平面図



第3図 遺構平面図(東半部)

第4図 溝跡平面図

#### S D 533溝跡

調査区東端部で発見した東西方向の溝跡である。規模は長さ1.8m以上、上幅0.57m以上、深さ25cmである。断面形は皿形である。方向は東で約21度南に偏している。埋土は岩盤粒を若干含む灰褐色土である。遺物は出土していない。

#### S D 534溝跡

調査区東半部で発見した東西方向の溝跡である。S D 535と重複し、それよりも新しい。規模は長さ5.1m以上、上幅0.4m以上、深さ9cmである。断面形はU字形である。方向は東で約21度南に偏している。埋土は2層に分けられ、1層が岩盤粒を含む灰黄褐色土、2層が岩盤小ブロックを含むにぶい黄褐色土である。遺物は土師器坏、須恵器甕の細片が出土している。

#### S D 535溝跡

調査区東半部で発見した東西方向の溝跡である。S B 536、S D 532・534と重複し、S D 532・534よりも古くS B 536よりも新しい。規模は長さ7m以上、上幅1.4m、下幅0.27m、深さ10～20cmである。断面形は中央付近が船底形で、壁は緩やかに開く。方向は東で約17度南に偏している。埋土は3層に分けられ、1～2層が岩盤粒を若干含む褐灰色土、3層が岩盤粒を多量に含む灰褐色土である。遺物は土師器の細片、須恵器瓶・甕の破片が出土している。

#### その他の遺構(柱穴)

この他に建物の構成が不明な柱穴が5基検出されている。この中で比較的規模が大きいP 1～3について取り上げる。掘り方は一辺約35～50cmの隅丸方形で、全てで柱抜取り穴を確認した。深さはP 1が30cm、P 2が16cm、P 3が54cmである。掘り方埋土は岩盤小ブロックを多量に含む褐灰～にぶい橙色土である。遺物はP 2より土師器甕(B類)の小片が1点出土している。

### 3まとめ

今回の調査では、掘立柱建物跡1棟、溝跡4条、柱穴5基を発見した。溝跡はいずれも北西から南東にのびているもので、建物跡が廃絶した後に溝が造られている。S D 535については、西側隣接地の第9次調査で発見している近世の溝との位置関係や断面の形状が類似する点から同一遺構の可能性が高いものである。出土遺物には土師器、須恵器の破片があるが、遺構の年代に関わるものではない。なお、西半部は後世の削平を受けているようで遺構は確認できなかった。



調査区全景(東より)



調査区東半部遺構検出状況(西より)



調査区東半部遺構完掘状況(西より)

写真図版1



SD533溝跡土層断面  
(東より)



SD534・535 溝跡  
土層断面  
(西より)



SD532・535 溝跡  
土層断面  
(東より)

写真図版2

## XIII 高原遺跡第8次調査

### 1 調査に至る経緯と経過

本件は、浮島字高原地内における個人住宅新築工事計画に伴う確認調査である。平成21年10月、建設業者より、当該地における個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、住宅基礎工事にはベタ基礎を採用するが、給排水管埋設の際には最深10mの掘削を行うというものであった。当該地の北西約30mの地点においては、平成20年度に第7次調査を実施しており、10世紀以前は谷状の地形であったことが明らかにされている。当該地の具体的な状況については不明であるが、給排水管埋設時の掘削が地山面に達する可能性があり、遺跡への影響が懸念されることとなった。当該地は西側の畠地より一段高く、少なからず盛土造成されている状況が窺われることから、対象地内の旧地形を知る手がかりを得ることを目的とした確認調査を実施することとした。

10月27日、重機によって表土の除去に着手したところ、コンクリートブロックを中心とした産業廃棄物が現れ、それを投棄するための掘削は現地表より約3.0mの深さまで達していた。また、その広がりは住宅建設予定地全体に及んでいる状況が明らかとなつたことから埋蔵文化財が遺存する可能性はない判断し、10月28日調査を終了した。

その後、地権者側で宅地内に廃棄された産業廃棄物のすべてを除去する作業が行われ、その作業時に現地で立会を行ったが、遺構の痕跡等は一切確認できなかった（下写真）。

### 2 調査成果

現代の搅乱が基盤層まで及んでおり、遺構・遺物とも発見できなかった。



第1図 調査区位置図



擾乱を除去した状況

## IV 大日南遺跡第7次調査

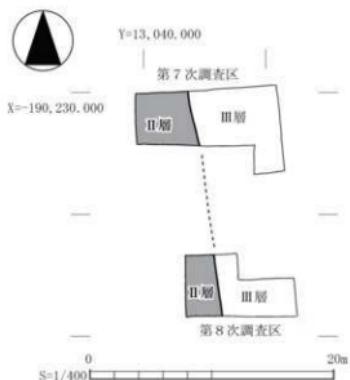
### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年11月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径14cm、長さ7.5mの鋼管杭を35本打ち込むことと、最深1mの給排水工事を行なうことが示されていた。本遺跡内では現表土下約1m前後に中世の遺構があると推測されることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。平成21年12月15日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、12月18日に現地調査を実施した。

はじめに、重機により表土除去を行った。西半部で現表土下1.2mの深さで黄褐色砂質土(Ⅱ層)、東半部でⅡ層形成以前の粗砂層(Ⅲ層)を確認した。Ⅱ層は本遺跡内で認められる中世の遺構検出面と同一のものであったが、遺構・遺物は発見されなかった。同日、これら上面での写真撮影し、19日に調査区平面図の作成、22日に重機により埋め戻しを行い、調査の一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



調査区全景(西より)

## XV 大日南遺跡第8次調査

### 1 調査に至る経緯・経過と調査成果

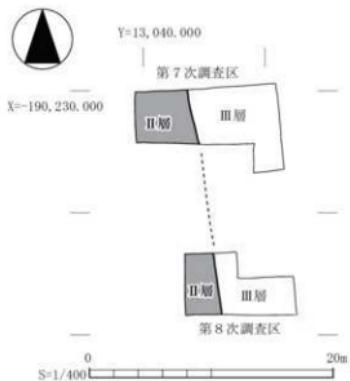
本調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。平成21年11月、地権者より当該区における住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に直径14cm、長さ9mの鋼管杭を28本打ち込むこと、最深1mの給排水工事等を行うことが示されていた。本遺跡内では現表土下約1m前後に中世の遺構があると推測されることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。平成21年12月15日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受け、12月19日に現地調査を実施した。

はじめに、重機により表土除去を行った。西半部で現表土下1.2mの深さでにぶい黄色砂質土(Ⅱ層)、東半部でⅡ層形成以前の粗砂層(Ⅲ層)を確認した。Ⅱ層は本遺跡内で認められる中世の遺構検出面と同一のものであったが、遺構・遺物は発見されなかった。同日、これら上面での写真撮影

と調査区平面図の作成、22日に重機により埋め戻しを行い、調査的一切を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



調査区全景(西より)

## 報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき2							
書名	多賀城市内の遺跡2							
副書名	平成21年度発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第99集							
編著者名	千葉孝弥、武田健市、島田敬、相澤清利							
編集機関	多賀城市教育委員会							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第48次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺21-6	042099	18012	38度 17分 44秒	140度 58分 03秒	20090408 20090526	73m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第49次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺21-17	042099	18012	38度 17分 43秒	140度 58分 02秒	20090428 20090509	58m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第50次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺21-1	042099	18012	38度 17分 44秒	140度 58分 02秒	20090610 20090714	49m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第51次)	宮城県多賀城市 新田字北閑合23・26-2	042099	18012	38度 17分 16秒	140度 58分 00秒	20090610	27m <sup>2</sup>	道路建設
新田遺跡 (第52次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺25-9外	042099	18012	38度 17分 45秒	140度 58分 07秒	20090826 20091001	55m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第53次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺48-21	042099	18012	38度 17分 51秒	140度 58分 13秒	20090925 20091020	52m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第54次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺48-18	042099	18012	38度 17分 52秒	140度 58分 13秒	20090925 20091117	45m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第58次)	宮城県多賀城市 新田字北閑合4-23、5-7	042099	18012	38度 17分 18秒	140度 58分 02秒	20091210	7m <sup>2</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 (第59次)	宮城県多賀城市 新田字船西27-2	042099	18012	38度 17分 14秒	140度 58分 05秒	20091222	13m <sup>2</sup>	個人住宅建設
山王遺跡 (第69次)	宮城県多賀城市 山王字東町浦75-5の一部	042099	18013	38度 17分 46秒	140度 58分 47秒	20090409 20090509	35m <sup>2</sup>	個人住宅建設
山王遺跡 (第70次)	宮城県多賀城市 山王字梯下し2-12	042099	18013	38度 17分 45秒	140度 58分 28秒	20090428	49m <sup>2</sup>	給排水管設置工事

まんのう 山王遺跡 (第72次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 川字多賀前106外	042099	18013	38度 17分 31秒	140度 59分 14秒	20090513 / 20090527	289m <sup>f</sup>	農地整備	
まんのう 山王遺跡 (第73次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 山字山王四区185-1外	042099	18013	38度 17分 33秒	140度 58分 43秒	20090529 / 20090612	456m <sup>f</sup>	農地整備	
まんのう 山王遺跡 (第74次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 南宮字伊勢210-1外	042099	18013	38度 17分 55秒	140度 58分 34秒	20090624 / 20090707	147m <sup>f</sup>	店舗建設	
まんのう 山王遺跡 (第75次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 山王字三千里6-3	042099	18013	38度 17分 45秒	140度 58分 17秒	20090716	6m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
たかさご 高崎遺跡 (第76次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 高崎三丁目283-10	042099	18018	38度 17分 47秒	141度 00分 09秒	20090715	20m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
たかさご 高崎遺跡 (第78次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目136-41	042099	18018	38度 17分 46秒	141度 00分 20秒	20090722	4m <sup>f</sup>	擁壁設置工事	
たかさご 高崎遺跡 (第79次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目117-2外	042099	18018	38度 17分 47秒	141度 00分 24秒	20090925 / 20090926	45m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
たかさご 高崎遺跡 (第80次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目32-5	042099	18018	38度 17分 53秒	141度 00分 20秒	20091029	13m <sup>f</sup>	擁壁設置工事	
たかさご 高崎遺跡 (第81次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 高崎二丁目231-12	042099	18018	38度 17分 36秒	140度 59分 49秒	20100108	38m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
かくさく 高崎古墳群 (第6次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 高崎二丁目502外	042099	18002	38度 17分 39秒	140度 59分 48秒	20091105 / 20091222	421m <sup>f</sup>	賃貸住宅 建設	
にしざわ 西沢遺跡 (第16次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 市川字奏社35-1	042099	18017	38度 18分 20秒	140度 59分 51秒	20090908 / 20090917	50m <sup>f</sup>	道路整備	
たかはら 高原遺跡 (第8次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 浮島字高原33-1外	042099	18042	38度 18分 11秒	141度 00分 09秒	20091027 / 20091028	40m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
だいにちみゆ 大日南遺跡 (第7次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 高橋四丁目20-11外	042099	18048	38度 17分 10秒	140度 58分 56秒	20091218 / 20091222	58m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
だいにちみゆ 大日南遺跡 (第8次)	みやえきさんとうじゆ 宮城県多賀城市 高橋四丁目20-10外	042099	18048	38度 17分 09秒	140度 58分 56秒	20091219 / 20091222	36m <sup>f</sup>	個人住宅 建設	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
新田遺跡 (第48次)	集落・屋敷	古墳	土壙・溝跡	土師器	幅2mを越す前期の溝跡確認				
		古代	道路跡		奈良時代の東山道発見				
		中世	掘立柱建物跡 区画溝跡 土橋跡	無軸陶器・青磁 かわらけ	幅2.5mの区画溝に囲まれた 屋敷跡を確認				
新田遺跡 (第49次)	集落・屋敷	古墳	土壙・溝跡	土師器	前期の遺構面を2枚確認				
		古代	道路跡・溝跡		溝跡から多くの土師器出土				
		中世	掘立柱建物跡 井戸跡		奈良時代の東山道発見				
				小規模な掘立柱建物跡発見					

新田遺跡 (第50次)	集落・屋敷	古墳	土壌 性格不明遺構	土玉	前期の遺構面を2枚確認
		古代	道路跡		奈良時代の東山道発見
		中世	溝跡		
新田遺跡 (第51次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世			
新田遺跡 (第52次)	集落・屋敷	古墳	溝跡		
		中世	掘立柱建物跡 溝跡	青磁・無釉陶器	14世紀頃の掘立柱建物跡、溝 跡発見
新田遺跡 (第53次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世	掘立柱建物跡 溝跡・水田跡	土師器・須恵器 須恵系土器 無釉陶器	
新田遺跡 (第54次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世	溝跡・土壌 水田跡	土師器・須恵器 瓦・無釉陶器	
新田遺跡 (第58次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世			
新田遺跡 (第59次)	集落・屋敷	古墳・古 代・中世			
山王遺跡 (第69次)	集落・都市	古 墳 古 代	溝跡・土壌	土師器・須恵器 須恵系土器・瓦	
山王遺跡 (第70次)	集落・都市	古 代	溝跡		
		中 世	井戸跡、溝跡		屋敷を問む大規模な区画溝跡 発見
山王遺跡 (第72次)	集落・都市	古 代	溝跡・土壌 道路跡		多賀城南辺墓地と同じ方向の 東西道路を発見
山王遺跡 (第73次)	集落・都市	古 代	溝跡・小溝群 井戸跡		古代の大溝と中世の区画溝を 発見
山王遺跡 (第74次)	集落・都市	古 墳 古 代	柱穴・溝跡 小溝群	土師器・須恵器	
山王遺跡 (第75次)	集落・都市	古 墳 古 代			
高崎遺跡 (第76次)	集落・城館	古 代			
高崎遺跡 (第78次)	集落・城館	古 代			
高崎遺跡 (第79次)	集落・城館	古 代			
高崎遺跡 (第80次)	集落・城館	古 代			
高崎遺跡 (第81次)	集落・城館	古 代			
高崎古墳群 (第6次)	高塚古墳 集 落	古 代	整地層		東西大路東道路に関わる整地 層を発見
西沢遺跡 (第16次)	集 落	古 代	掘立柱建物跡 溝跡	土師器・須恵器 瓦	
高原遺跡 (第8次)	集 落	古 代			
大日南遺跡 (第7次)	集落・城館	古 中 代 世			
大日南遺跡 (第8次)	集落・城館	古 中 代 世			

	新田遺跡第48次調査では、古墳時代前期の溝跡、土壙、8世紀後半以前の東西道路跡、15・16世紀頃の掘立柱建物跡や区画溝跡、土橋を発見した。このうち、8世紀後半以前の道路跡は、奈良時代の東山道と考えられる。また、中世の区画には3時期の変遷があることを確認した。
	新田遺跡第49次調査では、古墳時代前期の溝跡、土壙、8世紀後半以前の東西道路跡(東山道)、中世の掘立柱建物跡や井戸跡を発見した。
	新田遺跡第50次調査では、古墳時代前期の土壙、8世紀後半以前の東西道路跡(東山道)を発見した。
	新田遺跡第51次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第52次調査では、14世紀頃の掘立柱建物跡、溝跡などを発見した。
	新田遺跡第53・54次調査では、中世の掘立柱建物跡、溝跡、古代～中世の水田跡などを発見した。
	新田遺跡第58次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第59次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
要 約	山王遺跡第60次調査では、古代以降の溝跡、土壙を発見した。
	山王遺跡第70次調査では、南北方向の溝跡を発見した。
	山王遺跡第72次調査では、古代の東西道路跡、溝跡、土壙を確認した。
	山王遺跡第73次調査では、古代の溝跡、小溝群、中世の溝跡、井戸跡などを確認した。
	山王遺跡第74次調査では、古代の柱穴、小溝群、近世の柱穴、溝跡などを確認した。
	山王遺跡第75次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第76次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第78次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第79次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第80次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第81次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	高崎古墳群第6次調査では、古代の道路跡に関わるとみられる整地層を確認した。
	西沢遺跡第16次調査では、古代の掘立柱建物跡、溝跡、近世の溝跡などを発見した。
	高原遺跡第8次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	大日南遺跡第7次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。
	大日南遺跡第8次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。

## 多賀城市文化財調査報告書第99集

### 多賀城市内の遺跡2

—平成21年度発掘調査報告書—

平成22年3月31日発行

編集 多賀城市教育委員会

発行 宮城県多賀城市中央二丁目27-1

電話 (022)368-0134

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町2-10

電話 (022)288-6123